

繋がりのオンラインエスノグラフィ : 吹奏楽部員のTwitter利用に着目して

著者	末岡 真里奈
内容記述	筑波大学修士 (図書館情報学) 学位論文・平成31年3月25日授与(41245号)
発行年	2019
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159764

繋がりのオンラインエスノグラフィ：
吹奏楽部員の Twitter 利用に着目して

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2019 年 3 月

末岡真里奈

目次

第1章 序論.....	5
1.1 研究背景.....	5
1.2 先行研究の検討.....	7
1.3 本研究の目的と位置づけ.....	11
1.4 本論文の構成.....	11
第2章 研究方法.....	13
2.1 オンラインエスノグラフィの特性.....	13
2.2 調査の詳細.....	15
2.2.1 本研究におけるオンラインエスノグラフィ.....	15
2.2.2 調査対象に関連する情報獲得のためのオフライン調査.....	18
2.3 調査フィールドおよび調査対象の選定理由.....	20
2.3.1 Twitterを選定した理由.....	20
2.3.2 部活動に着目した理由.....	20
2.3.3 吹奏楽部を選定した理由.....	21
2.4 倫理的配慮.....	21
第3章 Twitterから広がるオンラインコミュニティ.....	23
3.1 Twitterアカウントの使い分け.....	23
3.2 「吹奏楽部アカウント」ではない「吹奏楽アカウント」と部活動.....	24
3.3 「吹奏楽部アカウント」によるオンラインコミュニティの形成.....	25
3.4 オンラインコミュニティでの様々なトラブル.....	30
3.4.1 「吹奏楽部グループ」とトラブル.....	30
3.4.2 2人の高校生とトラブルの連鎖.....	32
3.4.3 トラブル解決のための協働.....	34
第4章 オンラインコミュニティと「吹奏楽オフ」.....	37
4.1 mixiとニコニコオーケストラ.....	37
4.2 Twitterと「吹奏楽オフ」.....	39
4.3 「#ラスト普門館音楽隊」で広がる吹奏楽コミュニティ.....	41
第5章 吹奏楽部における繋がり.....	47
5.1 「体育会系」な繋がり.....	47
5.2 「人間的に成長する」ための繋がり.....	49
5.3 音楽的な繋がり.....	52
第6章 既存の人間関係とTwitter.....	56

6.1 スクールカーストと「吹奏楽部アカウント」	56
6.2 「 <i>Twitter</i> の影響」を受ける「イメージ」	61
6.3 隠蔽または暗号としてのツイート	67
6.3.1 social steganography の検討	67
6.3.2 暗号としての「意味深ツイート」	69
第7章 結論	72
7.1 「繋がりたい」ということ	72
7.2 インターネット・パラドクスの検討	74
7.3 繋がるの可能性	77
7.4 オンラインエスノグラフィができること	78
7.5 課題と展望	79
謝辞	81
引用文献一覧	82
付録	87
付録1 オンラインエスノグラフィにおけるスクリーンショットでの記録の一部	87
付録2 C 中学校吹奏楽部への参与観察のための補助的アンケート調査に用いた調査票	92

第1章 序論

1.1 研究背景

ソーシャルメディアの登場は、インターネット上でのコミュニケーションを活発化し、人間関係の構築方法に大きな変化をもたらしたと考えられる。ソーシャルメディアとは、2000年以降にウェブマーケティングの世界で用いられ、広く普及した概念である(木村, 2012)。総務省(2015)は、ソーシャルメディアについて、「インターネットを利用して誰でも手軽に情報を発信し、相互のやりとりができる双方向のメディアであり、代表的なものとして、ブログ、Facebook や Twitter 等の SNS (ソーシャルネットワーキングサービス)、YouTube やニコニコ動画等の動画共有サイト、LINE 等のメッセージングアプリがある」と説明している。また、総務省は、SNS を「登録された利用者同士が交流できる Web サイトの会員制サービス」と表し、友人や、同じ趣味を持つ人同士や、近隣地域の住民が集まってある程度閉ざされた世界にすることで、密接な利用者のコミュニケーションを可能にしていると述べている¹。

ソーシャルメディアも SNS も幅広いサービスを包含している。そのため、何がソーシャルメディアであり、何が SNS あるかということが非常に曖昧である。ボイドとエリソンは、SNS を“web-based services that allow individuals to (1) construct a public or semi-public profile within a bounded system, (2) articulate a list of other users with whom they share a connection, and (3) view and traverse their list of connections and those made by others within the system” (Boyd & Ellison, 2007, p. 211) と定義した。さらに、エリソンとボイドは、2013 年に 2007 年の定義を改訂している。エリソンとボイドが改訂した定義 (Ellison & Boyd, 2013) を、佐々木は「SNS は、利用者が、①利用者自身そして他の利用者が生成したコンテンツ、場合によっては当該システムによって提供されたデータも含めて、利用者を特定できる公開/限定公開のプロフィールを持つ、②他の利用者によって閲覧可能で、またそこからさまざまな関係を辿ることのできる人間関係を公開されたものとして明確に表示できる、③他の利用者によって生成されたコンテンツを消費し、またそのコンテンツを介して他の利用者とやりとりが可能、という三つを満たすコミュニケーションプラットフォームである」(佐々木, 2016, p. 24) と訳している。

ソーシャルメディアであってエリソンとボイドの言う SNS でないものとして、ユーザプロフィールがなく、匿名で書き込める掲示板が挙げられる。佐々木は、「時代とともにウェブ

¹ 総務省. “SNS (ソーシャルネットワーキングサービス) の仕組み”. 国民のための情報セキュリティサイト. 2013. http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/security/basic/service/07.html, (参照 2018-06-24).

ブサービスが徐々に利用者のプロフィールと利用者同士の関係情報をデータとして持つようになってきているため、この領域は狭くなってきている」(佐々木, 2016, p. 25) と述べ、「ウェブ全体のソーシャル化の潮流によって、エリソンとボイドの意味での SNS とソーシャルメディアはここ 5～6 年で接近している」(佐々木, 2016, p. 25) と考察している。ソーシャルメディアには、ユーザ間、ユーザコンテンツ間、コンテンツ間でそれぞれ結びついた関係性を視覚的に把握できるため、コンテンツの集積が、ユーザの相互コミュニケーションだけでなく、メディアとして社会的現実を構成して提示するほどの力を持ちうるようになった(木村, 2012)。また、ソーシャルメディアの流行について、人々が使用する機器の変化と切り離して考えることは困難である。高谷(2017)は、モバイル機器が日常生活に浸透することで、インターネットは、自分のアイデンティティを率直に呈示して自由になれる匿名空間から、現実世界へと近づき、スマートフォンを持ち歩くことによって、「ソーシャルメディア(オンライン)」と「現実社会(オフライン)」の境界はますます曖昧になると述べている。この「オンラインとオフラインの境界の曖昧さ」は、かねてから指摘されている(例えば、藤代編, 2015)。つまり、オンライン世界とオフライン世界が結びつき、相互に影響を与え合いながら、人間関係の構築を支えていると言える。

一方で、オンライン世界とオフライン世界が結びつくことで問題が発生する場合もある。青山ら(2017)は、「ネットいじめ」が対面式のいじめの延長線上にあるにもかかわらず、対面式のいじめではその発生過程が研究されているが、ネットいじめでは研究されていないことを指摘し、小学生と中学生を対象にネットいじめ調査を行った。また、ソーシャルメディア利用の問題点について様々な観点から注目が集まっているが、とりわけ、若者のソーシャルメディア利用が抱える問題について、盛んに調査されている。例えば、SNS を介した出会いによって未成年者が遭遇した様々な犯罪やトラブル事例が報告され、注意喚起が行われている^{2, 3}。また、SNS が普及する以前から過度なインターネット利用に対して、「中毒」や「依存」の観点から警鐘を鳴らし、若者がいかにインターネットと付き合っていくべきか議論され続けている(例えば、ヤング, 1998; 文部科学省, 2003)。

ソーシャルメディアの普及という観点から、「インターネット・パラドクス」(Kraut ら, 1998)に対する検討も盛んに行われている(例えば、河井, 2014; 北村, 2016)。Kraut ら(1998)は、インターネットを介したコミュニケーションによって、オフラインでの人間関係やイン

² 総務省 総合通信基盤局 消費者行政第一課 青少年担当. インターネットトラブル事例集(平成 29 年度版). 総務省, 2017, 000506392, 26p. http://www.soumu.go.jp/main_content/000506392.pdf, (参照 2018-01-03).

³ 内閣府. “気づいて！SNS 出会いにひそむワナ”. 内閣府. 2018. https://www.gov-online.go.jp/cam/net_crime/, (参照 2018-06-24).

ターネット利用者の精神的健康が損なわれると論じ、そのような状況をインターネット・パラドクスと名付けた。インターネット・パラドクスに関する議論は、テレビ視聴やテレビゲームの悪影響を指摘する議論とよく似た構図が見られる（宮本, 2008）。未成年者のソーシャルメディア利用のネガティブな影響についても、活発に研究が行われている。近年では、先述したネットいじめの他にも「SNS 疲れ」など、オンライン世界とオフライン世界とが結びつくことで起こる問題に対応する動きも大きくなっている。このように、ソーシャルメディアの普及は、若者のオフライン世界での活動に負の影響を及ぼすと考えられる傾向にある。

1.2 先行研究の検討

先行研究の検討を行う前に、インターネットの利用動向に関する最新の調査結果を踏まえて、調査対象の範囲を決定する。平成 29 年通信利用動向調査の結果（図 1）では、13 歳から 59 歳の年齢層でインターネット利用が 9 割を超えていることが示されている（総務省, 2018）。

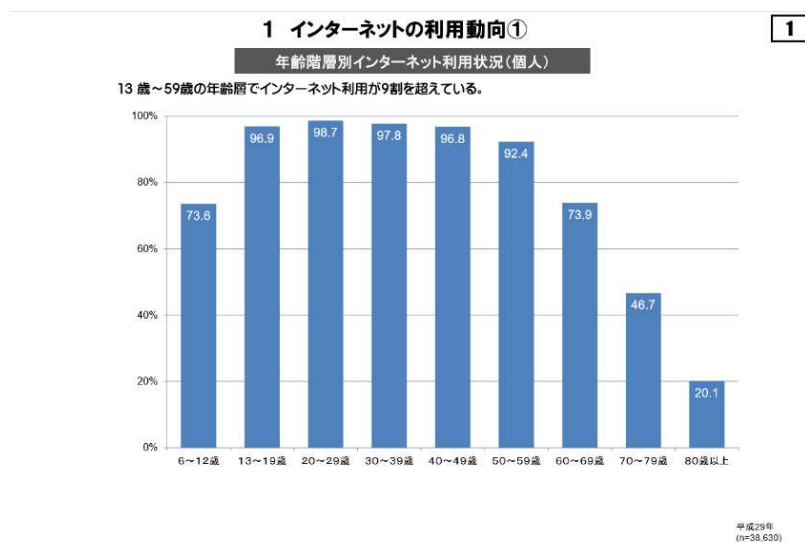


図 1 平成 29 年通信利用動向調査の結果（総務省, 2018）

LINE 株式会社は 2017 年に、小学校から高校までの児童・生徒を対象としてインターネットの利用実態把握調査を行い、その結果から以下の 4 点を特徴として示している（塩田, 2018, p. 4）。

- ① 小 1-3 の 36%、小 4-6 の 55%、中学生の 80%、高校生の 98%が、スマホを「自分のものとして」持っている
- ② 小 1-3 の 17%、小 4-6 の 26%、中学生の 56%、高校生の 70%が、ネットを「2 時間以上」利用している
- ③ 小 4-6 の 74%が、家庭で「インターネット・ゲーム利用に関するルール」を決めているが、中学生では 54%、高校生では 25%まで下がってしまう
- ④ 「インターネット上でイヤなことをされた」と回答した中で、中学生が約 9%と最も多い

上記の 2 つの調査結果を踏まえ、本研究では、「自分のものとして」スマホを持ち、少しずつ保護者の指導外で主体的にインターネットを利用しているであろう中学生と高校生（以下、中高生）を、主な調査対象とする。

ここからは、3 つの観点で先行研究の検討を行う。まず、中高生のインターネット利用の観点から先行研究の検討を行う。中高生のインターネット利用と人間関係に関する研究は、日本では 2000 年代前半から活発になりはじめ、現在に至る（例えば、森と坂本, 2000、上別府と杉浦, 2004、安藤ら, 2005、伊藤, 2011、宮戸と小玉, 2016、西村, 2017）。また、中高生の SNS 利用に関する研究は、2010 年以降活発になっている（例えば、加藤, 2013、時津, 2015、時津と中村, 2018）。ここでは、前節で言及したネットいじめと、SNS 疲れに関する研究を取り上げる。

ネットいじめについて、内海（2012）の研究を取り上げる。内海は、中学生 487 名を対象にした質問紙調査を行い、インターネット利用時間、インターネットを通して攻撃を行った経験・受けた経験、関係性攻撃、表出性攻撃、保護者からのインターネット統制に対する中学生の認知を測定した。この測定結果から、内海は、自由にインターネットを利用できるという中学生の認知が、統制的認知の中で最もインターネット利用時間との関連が高く、ネットいじめをした経験や、ネットを介していじめられた経験への間接効果を示していると分析し、「長時間のネット使用の制限や子どもの関係性攻撃に配慮した介入が効果的と考えられる」（p. 19）と述べている。

SNS 疲れについて、加藤（2013）の研究を取り上げる。加藤は、SNS 疲れを「SNS を利用する中で利用経験に基づいた何らかの否定的感情を抱き、サイト利用を控えたり、退会したりした経験」（p. 35）と定義し、高校生 15 名を対象に SNS 疲れに繋がる経験についてインタビュー調査を行った。調査対象者である高校生 15 名全員が SNS 利用に伴うネガティブな経験について言及したが、15 名とも継続して SNS を利用していた（加藤, 2013）。SNS の継続理由について、加藤は、「SNS を退会することによる既存の関係への悪影響が一つの

可能性として考えられる」(加藤, 2013, p. 42) と考察し、「身体的・精神的負荷を抱いたまま SNS 利用を継続し、結果として、学校生活に悪影響が出ることも考えられる」(p. 42) と述べている。

内海 (2012) や加藤のように、中高生のインターネット利用が抱える問題点に言及する研究は数多くなされ、そこから得られた知見が蓄積している。その一方で、日本では、学校教育以外の場での中高生のインターネット利用について、ポジティブな側面に焦点を当てた研究は、問題点に言及する研究に比べて少ないと言える。このように、中高生のインターネット利用において問題点にばかり着目されているのは、「大人と比較して判断能力の低い中高生像」が前提になっていることが一因と考察できる。中高生と大人との関係性については、後述する。

次に、調査対象へのアプローチという観点から先行研究を検討する。上記のようなインターネット利用やソーシャルメディア利用に関する先行研究は、主にオフラインからアプローチを行っている。中高生の様々なオンライン上のやり取りや人間関係を、調査者自身がオンライン空間に参加して明らかにした研究はごくわずかである。つまり、オンライン世界で人間関係を築く中高生の実態に、調査者もオンライン世界の中で人間関係を築く一人として迫るような研究は、日本では未だ発展していない。

デジタルネットワークは、利用状況をデータとして記録し、分析することが比較的容易であり、定量的手法に適していることから質的調査の試みが少なかったが、人々がネットワークに接続して活動する際の感情や心理、また、複数のメディアや手段によって築かれる人間関係やコミュニケーション関係といった質的情報、文脈、意味世界は、量的調査のみでは把握することが困難である (木村, 2010)。そのような経緯から、2000 年代には、C. Hine、S. Schneider、D. Hakken、D. Miller、J. Howard などが、オンライン空間を質的研究の領域で扱うようになった (木村, 2010)。D. Miller は、“SNS have turned out to be something much closer to older traditions of anthropological study of social relations such as kinship studies” (Miller, 2002, p. 147) と、SNS と人類学的研究の相性の良さを説いている。近年では、人々の日常生活におけるインターネットの影響力と存在感の高まりとともに、オンラインでの慣行やコミュニケーション、およびデジタル化によって形成されたオフラインの慣習に関する民族誌的研究が、ますます普及している (Varis, 2014, p. 2)。

特に、2008 年当時にアメリカで最大のオンラインコミュニティを形成していた「Second Life」において、Boellstorff が行ったフィールドワークは、先駆的なオンラインエスノグラフィとなった。Boellstorff は、オンライン上のバーチャルワールドをオフライン世界の補完ではなく、同等のものと見なし、「Second Life」におけるオンラインでのやり取りのみでフィールドワークを完結させた (Boellstorff, 2008)。かつて、オンライン上の情報は、オフラインから得られる情報より劣るものとされていたため、そのような考え方に反する

Boellstorff の研究・調査の姿勢は、非常に革新的であったと考えられる。

ボイドはアメリカの SNS 研究の第一人者と呼ばれており、ティーンエイジャーとインターネットに関する研究を、オフラインでの調査だけでなく、オンラインからのアプローチも行いながら進めている（ボイド, 2014）。

以上より、筆者はオンライン空間をエスノグラフィックに研究することは、定量的手法での調査とは違った側面を明らかにできる点で意義深いと考えている。

3 つ目の観点は、「デジタルネイティブ」と見なされている中高生と、中高生を監督する立場の大人との関係性である。未成年者である中高生たちは、あらゆる面において未熟だと見なされるため、保護者たちの監督のもと生活している。その反面、現代を生きる中高生たちは、デジタルネイティブと呼ばれ、後発的にデジタル機器に触れた世代よりも熟達したデジタルの使用者であると考えられている（例えば、タブスコット, 2009）。「デジタルネイティブ」という言葉は、Marc Prensky の‘Digital Natives, Digital Immigrants’において提唱された（Prensky, 2001）⁴。

藤原（2017）は、元々デジタルネイティブ論は教育論として出発し、デジタル技術を用いた新しい教育システムの開発を促進する文脈で使用されていたが、日本では若者論として浸透し、若者とその上位世代との摩擦を表現する際や、理解不能な若者の言動を揶揄する際にデジタルネイティブという言葉が用いられたと説明している。日本で上記のようなデジタルネイティブ論が浸透したのは、監督者であるはずの保護者が、「未熟な未成年者たち」を監督できない状況が生じたことと関係があると考えられる。ボイド（2014）は、アメリカのティーンエイジャーたちが、親や教師の監視の目をかいくぐるために SNS を使用していると論じている。ボイドの研究はアメリカで行われたものであるが、日本の中高生も同様の行動を起こしているとする、先述した状況も起こると考えられ、「判断能力に優れた大人たちには理解不能な危ないデジタルネイティブ像」が結ばれるのではないだろうか。

「危ないデジタルネイティブ像」すなわち、「デジタル技術を活用する判断力の低い中高生像」のみを前提に研究を進めると、保護者の監視から逃れるほどの複雑で高度なソーシャルメディアの利用方法を編み出す中高生という側面を無視してしまい、調査における大きな取りこぼしに気づかぬままになってしまう恐れがある。筆者は、「判断力の低い中高生像」を元にした「いかに中高生たちへのインターネット利用（特にソーシャルメディア利用）を規制すべきか」に重きを置いている研究が多いことに対して、今一度、批判的になる必要があると考える。

⁴ ボイド（2014, p.290-291）は、Marc Prensky ではなく、ジョン・ペリー・バーロウが最初に若者たちをデジタル環境のネイティブと表現したと述べている。

1.3 本研究の目的と位置づけ

本研究は、中高生のオンラインエスノグラフィを行い、実際にオンライン世界で人間関係を築く中高生の実態について記述することを目的とする。本研究では、その中でも特に、オンライン世界とオフライン世界の交錯の様相に焦点を当てつつ、人と人との繋がりやの編まれ方を追っていく。

本研究は、CMC (Computer-Mediated Communication) 研究と位置付けられる。その中でも、未成年者のソーシャルメディア利用に注目した研究と言える。未成年者のソーシャルメディア利用に関して、社会心理学の分野で活発な研究が行われ、多くの知見が蓄積されているが、本研究では、人類学的なアプローチを行うことによって、今まで言及されてこなかった側面に焦点を当てる。

第1章第1節で言及したインターネット・パラドクスは、量的調査によって繰り返し検討が行われている。特に、未成年者へのインターネットを介したコミュニケーションの影響に関しては、豊富な知見が蓄積している。一方で、一貫した研究結果が出ておらず、ある時にはネガティブな影響が、またある時にはポジティブな影響が示されている。そこで、中高生のオンラインエスノグラフィによって、実際にオンライン世界で人間関係を築く中高生の実態を記述した上で、改めてインターネット・パラドクスの検討を行う。

1.4 本論文の構成

本節では、本論文の構成について述べる。

第1章では、最初にソーシャルメディアが普及した現代の人間関係について言及し、中高生のインターネット利用に関する先行研究を中心に検討を行う。その後、本研究の目的と位置付けを示し、最後に本論文の構成を説明する。

第2章では、オンラインエスノグラフィの特性について言及する。調査の詳細と、調査フィールドおよび調査対象の選定理由を示し、倫理的配慮について述べる。

第3章以降は、調査結果から分かったことを元に分析と考察を記述する。まず第3章では、Twitter から広がるオンラインコミュニティについて説明する。はじめに Twitter アカウントの使い分けに言及し、その中でも「吹奏楽部アカウント」について詳細な説明を行う。その後、「吹奏楽部アカウント」が形成するオンラインコミュニティについて述べ、最後にオンラインコミュニティで起こったトラブルとその対応について記述する。

第4章では、オンラインコミュニティとオフラインでの人々の繋がりについて「吹奏楽オフ」を軸に言及する。まず、「吹奏楽オフ」が盛り上がるきっかけと考えられている「ニコニコオーケストラ」と、当時流行していた mixi の関係について説明を行う。ニコニコオーケストラによって生まれた流れが、2018 年時点ではどのように受け継がれているのかを、参与観察の結果を踏まえて考察する。また、Twitter から発信された「吹奏楽オフ」企画が、

いかに大きく盛り上がっていったかについても言及する。

第5章では、吹奏楽部における繋がりを、先行研究を踏まえつつオフラインでの調査から分かったことを元に、3つの視点で論じる。第1節では、吹奏楽部の「体育会系」な側面に着目している。第2節では、「人間的に成長する」目的を持つ吹奏楽部について言及する。第3節では、第1節と第2節で展開された非音楽的集団としての吹奏楽部という考え方について再検討を行う。

第6章では、既存の人間関係と Twitter の関係について論じる。まず、「吹奏楽部アカウント」の Twitter での投稿（以下、ツイート）を踏まえて、スクールカーストに抗おうとする中高生について記述する。次に、Twitter から影響を受け、オフラインでの人間関係に対して考え方が変わった例について言及する。最後に、隠蔽や暗号という切り口でツイートを論じる。

第7章では、オンラインとオフラインが交錯する繋がりについて、これまでの各章で言及したことを踏まえてまとめを行う。第1節では、「吹奏楽部アカウント」にとってどのような状態が繋がっていると言えるのか、また、何故「吹奏楽部アカウント」は「繋がりたい」のかを考察する。第2節では、「インターネット・パラドクス」の検討を行う。第3節では調査対象者たちの将来にわたる繋がりの可能性を開いていく一助として Twitter が用いられていることを示す。そして、第4節では、これまでの記述から、オンラインエスノグラフィにできることを改めて考察し、まとめを行う。最後に第5節で、本研究の課題と今後の展望を示す。

第2章 研究方法

本研究では、調査フィールドとしてソーシャルメディアの中から Twitter を選定し、調査対象として吹奏楽部関連の Twitter アカウントを選定した。Twitter についての説明は、本章第2節第1項で行う。ソーシャルメディアの中から Twitter を選定した理由、部活動に着目した理由、部活動の中から吹奏楽部を選定した理由は、本章第3節で説明する。

本研究の調査期間は、2017年7月から2018年12月までである。

2.1 オンラインエスノグラフィの特性

調査方法は、先述の通りオンラインエスノグラフィである。本研究では、オンラインエスノグラフィを質的調査法のなかの一つのアプローチ方法とする。質的調査法について、メリアムは、「社会現象のしぜんな状態をできるだけこわさないようにして、その意味を理解し説明しようとする探求の形態を包括する概念 (umbrella concept) である」(メリアム, 2004, p. 8) と説明している。質的調査法には多様なアプローチ方法が存在するが、それらのアプローチ方法は、「①理解と意味を引き出すことが目標。②調査者がデータ収集と分析の主たる道具。③フィールドワークの活用。④帰納的方向性をもった分析。⑤調査結果は十分に記述的 (傍点原文)」(メリアム, 2004, p. 16) という5つの質的調査法の本質的特性を共有している。つまり、本研究におけるオンラインエスノグラフィは、この5つの質的調査法の本質的特性を有している。また、概念や仮説や理論の創設を目的とする研究では、調査の過程で問題が焦点化することがしばしば起こるが、これは、概念や仮説や理論の検証を目的とした研究、とりわけ定量的な調査ではあまり見られない特徴と言えるだろう。

オンラインエスノグラフィとは、文字通りオンライン上で行うエスノグラフィのことである。エスノグラフィには2つの意味があり、特定の集団や社会を対象として参与観察を行いながら、行動様式や価値観などを明らかにする調査方法を指す場合と、その調査によって編まれた民族誌そのものを指す場合がある(藤田・北村編, 2013)。オンラインエスノグラフィの場合、オフラインでのエスノグラフィと違って、調査対象とするフィールドに「場所」という制約がない(高谷, 2016)。つまり、オンライン世界で共通の結びつきを持つ人々を調査対象としていると言える。

しかし、一口にオンライン上で行うエスノグラフィと言っても、その調査方法は多様に展開している。木村(2010)は、「オンラインだけでフィールドワークを行う試み」(p. 2)をオンラインエスノグラフィ、「情報ネットワークを介したつながりの意味、文脈を丹念に掘り下げ、知識がネットワークを介して、どのように生成するかを明らかにする試み」(p. 2)をバーチャルエスノグラフィ、「サイバースペースを含みこんだ社会的活動に関するフィー

ルドリサーチ、質的研究を、フィールドワーク（オンライン、オフライン両者を含む）を中心にした調査研究活動から成果をまとめ、公表するプロセス、方法」（p.2）を「サイバー・エスノグラフィー」と分類している。なお、本研究では、調査手法についてオンラインエスノグラフィという呼称を用いるが、木村（2010）が述べたような「オンラインだけでフィールドワークを行う試み」を指しているわけではない。本研究では、オンライン世界とオフライン世界の交錯の様相に焦点を当てるため、オンラインとオフラインという言葉に重きを置き、調査手法の呼称にオンラインエスノグラフィを用いる。繰り返しになるが、本研究では、オンライン世界とオフライン世界の交錯の様相に焦点を当てるため、オンラインだけでフィールドワークを完結させることはせず、オフラインでの調査も積極的に行う。本研究におけるオフラインでの調査では、インタビューと参与観察を行った。インタビュー調査と参与観察については、後述する。

Varis は、オンライン上で行うエスノグラフィの方法が多様に展開している理由について、デジタル通信に関する研究のデータと環境が多種多様であるからではなく、異なる「エスノグラフィ」の考え方があるからだと述べている（Varis, 2014, p. 2）。エスノグラフィを特定の技術や、主に観察やインタビューなどのデータ収集方法に限定する考え方から、エスノグラフィを一連の技術ではなくアプローチとして捉える考え方までであるが、Varis は後者、つまりエスノグラフィを、技術の採用には還元せず、特定の認識論的主張を持つ文化研究アプローチと見なしている（Varis, 2014, p. 2）。

本研究では、Varis 同様エスノグラフィを、認識論的主張を持つアプローチと見なす。先行研究ではブラックボックス化してしまっていた子どもたちのオンラインでの行動を、現場に立ち回り、つまり実際にオンライン上で研究者自身が活動して、明らかにしていく。現場に立ち返るといえるのは、まさに「アプローチとしてのエスノグラフィ」の原則的な思想である。そのような現場において筆者は、大人たちの言説から距離をとり、自ら決断することが可能な「主体的に行為する者」としての中高生に目を向ける。

しかし、オンライン上で中高生を対象に調査をする際、どのようになりすましを見破るのか、どのように「本当のその人」に接近するのかという問題が発生する。この問題に対して、オフライン調査であったとしても、調査対象者が「本当の自分」を語るかどうかは定かでないという反論が可能だが、本調査の場合、調査した人々の大半がなりすましかもしれないという危険性は無視できない。よって、なりすましではないと推測できるほどの情報を取得することが重要である。そのため、本調査では、Twitter のプロフィール、「フォロイー」や「フォロワー」の関係（Twitter に関する用語の詳細は後述する）、ツイートを発する際の言葉遣い、画像などのコンテンツの有無、他のソーシャルメディアの利用の有無を確認した。特に、中高生同士での Twitter 上でのやり取りを重点的に調査し、同じ学校に通っていると推察できる者同士でのやり取りを発見した際は、そのやり取りを行っていた者のフォロイーとフ

フォロワーの関係をも調査し、なりすましでないか否かの確認を行った。例えば、とある中学生 X が学校行事に関する所感や記念写真をツイートした場合、X の同級生と推察できる中学生が、学校行事に関するツイートをしたり、X のツイートに対して「楽しかったね」などのリプライをしたりするか確認した。また、Twitter を活用することで成立しているイベントに参加し、中高生と実際に会って交流を行った。

2.2 調査の詳細

先述した通り、本研究ではオンライン世界とオフライン世界の交錯の様相に焦点を当てるため、オンラインだけでフィールドワークを完結させることはせず、オフラインでの調査も積極的に行った。本研究におけるオフラインでの調査では、インタビューと参与観察を行った。本研究におけるオフラインでのインタビュー調査と参与観察は、2 種類に分けることができる。1 つ目はオンラインでの調査から派生したものであり、この種類のオフラインでの調査は、オンラインエスノグラフィの一部として考える。2 つ目は調査対象に関連する詳細な情報を手に入れるためのオフライン調査である。以下では、この 2 種類の調査について第 1 項と第 2 項に分けて説明を行う。

2.2.1 本研究におけるオンラインエスノグラフィ

本研究では、調査フィールドとしてソーシャルメディアの中から Twitter を選定し、調査対象として吹奏楽部関連の Twitter アカウントを選定した。Twitter とは、オンライン上で 140 文字以内の短文（全角文字の場合）を投稿できる無料のサービスである。Twitter の投稿は、ツイートまたは「つぶやき」と呼ばれる。ツイートは、Web 上で公開されているので、非公開設定にしているアカウントのツイート以外は、Twitter にアカウント登録をしていない者でも閲覧可能である。

本研究におけるオンラインエスノグラフィの詳細について述べる前に、Twitter の使い方を説明する。Twitter にアカウント登録をすると、自分専用のページを持つことができる（図 2）。他の Twitter アカウントを「フォロー」すると、自身のツイートとフォローしたアカウントのツイートが、同じ画面上にリアルタイムで表示される。この画面を「ホームタイムライン」と呼ぶが、「TL（タイムライン）」と略されることが多い。自身の Twitter アカウントでフォローしているアカウントのことを、フォロイーと呼び、反対に、自身の Twitter アカウントをフォローしているアカウントのことを、フォロワーと呼ぶ。Twitter アカウントが互いにフォローし合うことを「相互フォロー」と言う。Twitter ユーザは、自由に他の Twitter アカウントをフォローできる。ただし、非公開設定にしている Twitter アカウントをフォローするためには、事前にフォローの申請をし、承認を得る必要がある。また、特定の Twitter アカウントにメッセージを送る場合、宛先である Twitter アカウントの ID を記

し、その直前にアットマークを付けることで、「メンション」できる。また、他人のツイートに返事をしたり質問をしたりする「リプライ」機能を使って Twitter ユーザ同士で会話ができる。他にも、他者のツイートをフォロワーのタイムライン上に表示することで情報を拡散する「RT（リツイート）」、特定の Twitter アカウントとやり取りが行える「DM（ダイレクトメッセージ）」、DM でグループチャットが行える「GDM（グループダイレクトメッセージ）」、第 3 章で詳細を説明する「ハッシュタグ」など、上記の他にも様々な機能を活用できる。このような機能を活用することで、Twitter ユーザ同士がコミュニケーションをとることが可能である。

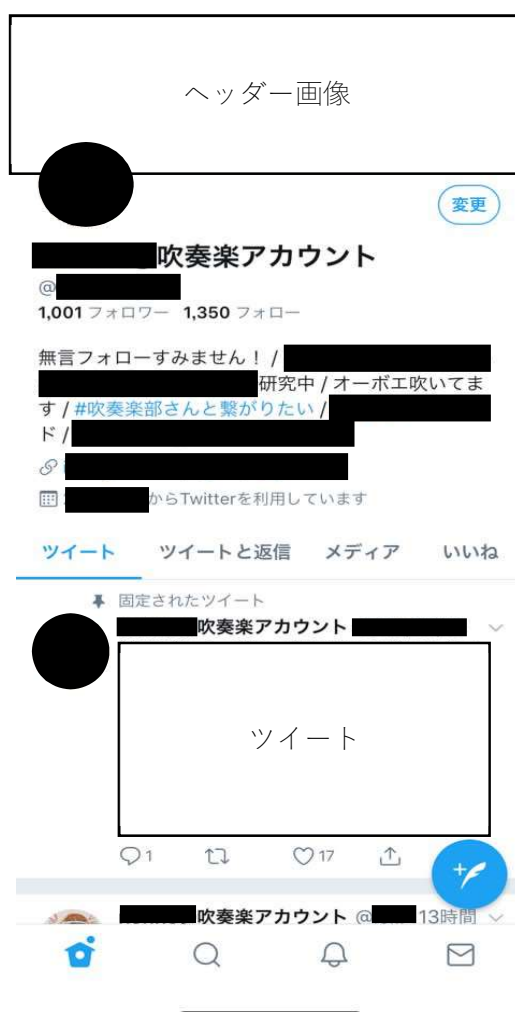


図 2 調査用アカウントのホーム画面 (iPhone にて 2018 年 12 月 25 日取得)

筆者は、高校3年生の夏から Twitter にアカウント登録を行い、それ以来 Twitter を6年間使い続けている。これまで筆者は、Twitter を学校の友人やオフラインで知り合った人との連絡ツールと考えてきた。全く面識のない人の Twitter アカウントをフォローすることはほとんどなかったが、著名なアーティストや企業の公式アカウントなどは情報を獲得する目的でフォローしていた。筆者は、本調査において初めて全く面識のない人とのコミュニケーションを Twitter 上で行った。Twitter では複数のアカウントを作成することが可能であるため、筆者は普段使用している Twitter アカウントとは別に、調査用の Twitter アカウント（以下、調査用アカウント）を用いて Twitter ユーザたちと交流した。以下に本調査の詳細を示す。

調査用アカウントでは、朝日新聞 CSR 推進部の公式のアカウントである「♪吹奏楽コンクール♪」⁵や、そのほかの吹奏楽関連の情報を発信する Twitter アカウントをフォローし、情報収集を行った。情報収集を行ったことで、筆者は「吹奏楽部アカウント」の存在を知ることができた。「吹奏楽部アカウント」とは、アカウント名やプロフィール欄などで、吹奏楽や部活動などについてのツイートを行うことを表明している Twitter アカウントである。本論文では、Twitter ユーザが使用している「吹奏楽部アカウント」という名称を、改変せずにそのまま使用する。

「吹奏楽部アカウント」の用途は、それぞれの Twitter ユーザによって様々であるが、主に吹奏楽部での活動や、学校での行事や、楽器に関する所感などをツイートしていることが多い。また、「吹奏楽部アカウント」同士でリプライを送り合って情報交換を行う場面も散見された。それらを観察している中で、Twitter を活用している吹奏楽部員の間で流行しているハッシュタグを知ることができた。そのハッシュタグを用いて、調査用アカウントにおけるフォロイー・フォロワー関係の拡大を行った。ハッシュタグの詳細については、先述したように第3章で説明する。調査用アカウントで相互フォローとなった「吹奏楽部アカウント」に対して、調査協力依頼のリプライや DM を送り、中高生と個人的にやり取りを行った。個人的なやり取りの際は、Twitter の DM 機能だけでなく、LINE を使用することもあった。LINE とは、スマートフォンや PC などを用いて、1対1または複数人での無料メールや無料通話をすることが可能なアプリケーションソフトである。DM や LINE を用いた個人的でクローズドなやり取りだけでなく、Twitter 上でのオープンなやり取りで、調査に有益なデータであると判断したものは、スクリーンショットによって記録を行った。スクリーンショットによる記録の一部を付録（図5～図9）として加えた。

2018年12月7日午後5時の時点では、調査用アカウントのフォロー数は1,355、フォロ

⁵ “♪吹奏楽コンクール♪”. Twitter. <https://twitter.com/AsahiBrass?s=17>, (参照 2019-02-07).

ワー数は1,006である。また、中高生が利用していると推察できる相互フォローの Twitter アカウントは745であり、そのうち「吹奏楽部アカウント」の数は650である。筆者がオンライン上で個人的にやり取り（「よろしく」などの挨拶のみの場合も含む）をした中学生は22名、高校生は22名である。筆者が調査用アカウントで行ったツイートのは、約2,000である。筆者がオンラインエスノグラフィにかけた調査時間は、約900時間である。1日に約2時間の調査を毎日行い、それを約15ヶ月間続けたと計算した。

筆者は、調査を進めていく中で Twitter でのフォロイー・フォロワーの関係を発展させ、オンライン上の「吹奏楽部グループ」へ参与した。参与の経緯および、その詳細については、第3章で述べる。筆者が参与した「吹奏楽部グループ」は5つである。そのうち1つは Twitter の GDM を用いたグループであり、他の4つは LINE を用いたグループである。LINE グループのうち1つは、2018年5月6日午前10時の時点で解体されている。2018年12月7日午後5時の時点で筆者が参与しているグループの参加者数は、Twitter の GDM を用いたグループが25名で、LINE を用いたグループがそれぞれ21名、140名、10名である（同じ人物が複数のグループに参加している場合がある）。筆者が参与したグループには年齢制限がないため、中高生以外の参加者も存在する。

また、筆者は Twitter 上で演奏参加者を募集していたイベントである夏イベ（仮名）に参加し、オフラインでの参与観察とインタビュー調査も行った。その際に、筆者はイベント参加者への連絡用の LINE グループ（以下、夏イベ LINE グループ）に入った。2018年8月30日午後5時の時点では、夏イベ LINE グループに70名が参加している。夏イベ LINE グループにも、中高生以外の参加者が存在する。

2.2.2 調査対象に関連する情報獲得のためのオフライン調査

上記の夏イベとは別に、茨城県にある公立の A 中学校に通う2年生（2017年度当時）6名と、埼玉県にある公立の B 高校に勤務する吹奏楽顧問1名にインタビュー調査を行い、また、兵庫県にある公立の C 中学校の吹奏楽部と、茨城県を拠点に活動する D ジュニアオーケストラ（以下、D オケ）で参与観察を行った。以上の調査を行った理由は、Twitter を活用する吹奏楽部員の研究をするにあたり、吹奏楽部ではない部活動に所属する中高生、Twitter を活用しない吹奏楽部員、吹奏楽部員を取り巻く大人たち、吹奏楽部以外の音楽的繋がりを持つ集団に所属している中高生についても調査を要するためである。このようなオフライン調査をすることにより、調査対象がその周囲の人物たちからどのように受け止められうる存在かを詳しく知ることができ、調査対象に対する印象論にとどまらない分析を行うことが可能になる。また、筆者はかつて吹奏楽部に所属していたが、2018年時点では、実際にどのような吹奏楽部運営がなされているのかは知らないため、このようなオフライン調査を行うことで、部分的にはあるが現役吹奏楽部たちの活動を丹念に調査するこ

とができる。

本研究では、様々な形でインタビューデータを獲得した。あらかじめ作成した質問項目に沿ってフォーマルインタビューを行い、データを得た場合もあれば、参与観察中のインフォーマルな雑談の中から重要なデータを見出す場合もある。フォーマルインタビューの際、構造化したインタビューは行わず、半構造化形式、または非構造化形式を採用した。これらの形式を採用した理由は、定型化した質問項目を聞くのみでは個々人が持っている様々な意見や考えを引き出せないと判断したからである。フォーマルインタビューの記録方法は、紙とペンでのメモと、IC レコーダーでの録音である。インフォーマルインタビューの場合、その場で記録を取ることは困難な場合も多いが、筆者が重要と判断した会話内容を、インフォーマルインタビューが終わった後すぐに記憶できている範囲で文字に起こした。文字起こしをした後、発話者に対して会話の内容を間違っていないかを確認した。

筆者は、2017 年 7 月に A 中学校へ調査協力依頼を行い、2017 年 10 月から 2017 年 11 月にかけて A 中学校 2 年生の男子生徒 3 名と女子生徒 3 名の合計 6 名に対して、半構造化インタビューを行った。調査時間は 1 人あたり約 1 時間程度で、調査形式は 1 対 1 の対面である。

2018 年 5 月に、B 高校で 2017 年度から吹奏楽部顧問を担当している長谷川さんに、筆者は調査協力を依頼した。同年同月の休日に、長谷川さんへ 2 日間にわたって非構造化インタビューを行った。

C 中学校吹奏楽部は、3 年生 19 名、2 年生 11 名、1 年生 20 名が所属し、週 5 日活動している。なお、2018 年 10 月に開催された文化祭をもって 3 年生は引退となり、文化祭以降は 1 年生と 2 年生のみで吹奏楽部の活動を行っている。筆者は、C 中学校吹奏楽部において、2018 年 6 月から 11 月の間に 7 度の参与観察を行った。また、11 月に、2018 年度の 1 年生と 2 年生を対象としたアンケート調査を行った。調査票は、本論文の付録として加えた。紙媒体で調査票を 26 名に配布し、女子部員 11 名、男子部員 1 名の合計 12 名から回収した。アンケート調査結果から、Twitter 利用者は 12 名中 1 名であることが分かった。また、12 名とも全員が、Twitter 上で学校生活や部活動や吹奏楽に関するツイートを行っていないことも分かった。

D オケは、約 60 人の団員が所属し、週 1 日活動している。D オケに所属できるのは、小学 1 年生から 22 歳までであり、卒団をすると OB・OG としてサポートをすることになる。筆者は、2018 年 5 月から運営のサポートとして D オケに加入したが、ジュニアオーケストラのメンバーとともに演奏会に二度参加した。2018 年 12 月時点でも、筆者は D オケに継続して所属している。

2.3 調査フィールドおよび調査対象の選定理由

2.3.1 Twitter を選定した理由

総務省情報通信政策研究所（2017）の「平成 28 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」の結果から、ソーシャルメディア等の中で 10 代（13 歳から 19 歳まで）の利用率が 50%を超えているものは、YouTube（84.3%）、LINE（79.3%）、Twitter（61.4%）であることが分かった。また、ソーシャルメディアにおける「書き込む・投稿する」といった利用率（10 代から 60 代の調査結果）は、YouTube（2.5%）、LINE（44.0%）、Twitter（13.1%）であることが分かった。

YouTube の場合、動画を視聴する中高生は多いが、実際に動画を投稿したり、コメントを書き込んだりする中高生は少ないと推測でき、フィールドとして不適当と考えた。LINE の場合、クローズドな SNS のため、中高生の会話内容を調査することは困難である。しかし、Twitter は、非公開設定にしていないアカウントのツイートであれば誰でも閲覧できるため調査可能であり、かつ、筆者も Twitter ユーザとして他のユーザと交流を持つこともできる。さらに、Twitter で人間関係を構築することによって、他の SNS やオフラインでの交流に発展することも考えられる。以上より、Twitter をフィールドに設定した。

2.3.2 部活動に着目した理由

学習指導要領で、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と記載され、部活動は学校教育にとって重要な活動として位置づけられた⁶。部活動の重要性は、学校にとってだけでなく、当事者である中高生にとっても同じであろう。特に膨大な時間と労力を割き、熱心に部活動に取り組んでいる中高生にとって、部活動は生活そのものと言える。

石井（2011）の研究から、Twitter ユーザは、本名などの個人を識別できる情報の開示をせず、趣味などの属性情報を開示して他者とつながる傾向があることが分かった。この傾向を踏まえると、Twitter を活用している中高生にとって部活動は重要な属性の一つだと考えられるため、所属している部活動についての情報を開示して Twitter 上での繋がりを作るという行動を起こしやすいのではないかと推察できる。

上沼ら（2017）は、中学生のインターネット利用、部活動、生活習慣について、それぞれ研究がすすめられているが、インターネット利用と部活動の双方の関連についてはほとんど研究がされていないことを指摘し、特にインターネットは今後さらに学校教育において

⁶ 文部科学省. “学習指導要領「生きる力」”. 文部科学省ホームページ.

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sou.htm, (参照 2019-01-10).

導入されていくことから、様々な要素と関連づけて調査する必要があると述べている。

以上より、部活動に関するツイートに着目し、中高生のオンラインエスノグラフィを行うことは、意義があると言える。

2.3.3 吹奏楽部を選定した理由

「日本は吹奏楽大国である」⁷と言われるほど、吹奏楽に関する活動が盛んである。2017年6月26日時点で、全日本吹奏楽連盟には14,169団体が所属している⁸。学校における吹奏楽部の活動も非常に活発である。つまり、調査対象となる中高生部員も多く、オンライン上での探索に向いていると言える。

また、先述したように、調査の初期段階で吹奏楽部員によって個人的な交流用に作られたTwitterアカウントが存在していることが分かった。広報などの公的理由で作られたわけではない部活動用のアカウントは、吹奏楽部を除くと、Twitter上ではあまり見当たらなかった。そのため、相対的に「吹奏楽部」を表明するアカウントは「多い」と感じられる。吹奏楽部以外の様々な部活動名でTwitterアカウントを検索し、ツイート内容を確認したが、私的な部活動用アカウントの数自体が少なく、大規模なオンラインコミュニティが築かれている様子は、調査開始時点では見受けられなかった。

そして、調査者である筆者自身、中高生の時分に吹奏楽部に所属し、現在も楽器演奏を続けている。元吹奏楽部員という筆者の立場を活かすことで、吹奏楽部員たちとオンライン上で活発に交流できると考えた。

以上の3つの理由から、吹奏楽部を調査対象として選定した。

2.4 倫理的配慮

オンラインエスノグラフィの倫理的な問題に対処するための汎用的なガイドラインは、まだ存在していない。そのため、調査に関して調査者の良心と倫理観に委ねられる部分が多い。例として、調査対象者への同意の確認が、従来の方法では行いづらいことが挙げられる。同意書による確認では、氏名や住所など、オンライン空間では開示しないことがマナーとされるものを求めるためである。また、ツイートなどを論文中で引用した場合、インターネット上で検索すると、第三者が情報源にたどりつくことができ、ツイートをした者が特定

⁷ 株式会社 oricon ME, オリコン NewS 株式会社. “アレンジこそ命, 吹奏楽特有の音楽文化”. ORICON NEWS. 2013-08-17. <https://www.oricon.co.jp/news/2027669/full/>, (参照 2018-06-24).

⁸ 全日本吹奏楽連盟. “連盟概要”. 全日本吹奏楽連盟. 2017. <http://www.ajba.or.jp/gaiyou.htm>, (参照 2018-06-24).

される恐れがある。

本調査では、Twitter の DM や LINE の個人チャットを用いて密にやり取りをするようになった Twitter ユーザに対して、研究内容を説明し、調査協力の同意を得た。その際、同意書は作成せず、本名など個人が識別できる情報の開示を求めなかった。本稿で引用するツイートは、筆者と個人的にやり取りを行っている Twitter アカウント以外のものも含まれる。ツイートを引用する際、内容が大きく変わらない程度に言い回しを変更し、誰がツイートしたか特定できないようにした。調査用アカウントでは、筆者が研究を行っていることを表明している。また、直接会ってインタビュー調査を依頼した調査対象者に対しては、同意書による確認を行った。オンラインエスノグラフィ、およびオフラインでの調査によって得たデータを用いる際に記述する人物名は、ハンドルネームを含め仮名であるが、許可を得た上で匿名化せずに名前を掲載している人物もいる。

本調査は、研究倫理審査委員会に本研究の内容を申請し、承諾を得た後に進めた。その際、本研究への協力依頼書と同意書に関しても同時に申請し、承諾を得た後、オフラインでの調査の協力者に配布した。先述した通り、オンライン上での調査では、同意書は作成せず、協力者に対して個人が識別できる情報の開示を求めている。

オフラインでの調査の協力者への調査依頼は、LINE またはメールを利用して行った。依頼を行う際には、研究目的・調査概要について文章で説明し、調査を行う直前には、依頼書を配布するとともに口頭でも研究の詳細を説明し、協力者の了承を得た後、調査を実施した。またインタビュー調査の場合、IC レコーダーでインタビュー内容を記録することを伝え、承諾を得た後に IC レコーダーのセッティングをして記録を行った。

第3章 Twitter から広がるオンラインコミュニティ

第3章以降は、調査をもとにした分析と考察を記述する。オンラインエスノグラフィで得たデータや、インタビューデータなどを引用する際は、すべて斜体で記す。

3.1 Twitter アカウントの使い分け

Twitter ユーザの中には、複数のアカウントを作成し、それらのアカウントを使い分ける者もいる。この行為は、Twitter ユーザの間では「アカ分け」と呼ばれることが多い。どのような用途のアカウントなのか他のユーザにも分かるよう、アカウントに名前を付けて分類する場合がある。例えば、趣味のためのアカウントであれば「趣味アカウント」、こっそりと利用しているアカウントであれば「裏アカウント」など、様々な分類がある。ユーザ間で共有されている明文化された分類のルールは、現時点では見当たらない。

高谷 (2017) は「アカ分け」について「メインアカウントでプライベートなツイートをする一方で、趣味用の別アカウントを使って同じ趣味 (好きなアーティストなど) を持つ全国の見知らぬユーザたちと情報交換を行っている学生もいる。目的に応じてアカウントを使い分けることで、それぞれの人的ネットワークを維持している」と述べている。高谷の調査によると、「自分のプライベートを見ず知らずの人に伝えるのは怖い」など、匿名空間のインターネットであっても、ユーザは見知らぬ人への強い警戒心を持つことが、「アカ分け」の主な理由として挙げられている。

しかし、調査用アカウントでフォローしている「吹奏楽部アカウント」のいくつかが「リア友 (オフラインでの友達) リムりました」、「リアルを知り合いはブロックします」とツイートしているのを、筆者は目にした。「リム」るとは「リムーブ」する、つまり、フォローを外すことを意味する。「ブロック」は、フォローを外し、フォロワーからも外すことを意味する。ブロックが解除されない限り、ブロックされた Twitter ユーザは、ブロックを行った Twitter ユーザのツイートを見ることができない。

高谷は女子大学生へのインタビュー調査から、「ある程度良好な関係を維持しなくてはならないような関係の場合は、Twitter をフォローして時々コメントをしたり『お気に入り』を押したりすることで、付かず離れずの関係を維持している」(高谷, 2017, p. 22) と述べている。高谷のインタビュー調査の結果を踏まえると、「リア友」をリムーブしたり、ブロックしたりすることを、「リア友」は「関係性の維持」への拒否だと捉える恐れがあると推察できる。本調査では、「〇〇という状況なので、アカウントを分けます。なので、リア友リムーブ・ブロックします」という趣旨のツイートを複数発見した。これらのツイートは、これから行うリムーブやブロックが「関係性の維持」への拒否ではないと「リア友」に対して表明することで、オフラインの人間関係を良好に保つ役割を果たしていると考えられる。

主な「アカ分け」理由が、見知らぬ人への警戒によるものであれば、「リア友」をリムーブしたり、ブロックしたりするという、オフラインの人間関係を悪くするリスクをはらんだ行動は、ほぼ起こらないはずである。それにもかかわらず、できる限り衝突を回避する努力をしながら、「リア友」をリムーブしたり、ブロックしたりする Twitter アカウントの存在が、本調査から明らかになった。

高校2年生女子のサオリさんは、「特に仲のいい人とか、公式アカの方は吹奏楽の人たちとか」を基準に「アカ分け」を行い、その理由について「顔が写ってる写真は知らない人に見られたくない」と述べている。この調査結果は、高谷の論と一致すると言える。しかし、「愚痴とかは仲良い子には見られたくないーという感じなのでー」ともサオリさんは述べている。つまり、「仲が良いからこそ見られたくない」という動機での「アカ分け」が行われていると言える。

以上より、自分のプライベートを見ず知らずの人に伝えるのは怖いという側面だけでなく、「愚痴」や、自分の趣味や、オフラインで開示していない何かしらの情報を「リア友」に伝えるのがはばかれるという側面にも着目する必要がある。また、上記のような「リア友」に提示する自分とそうでない自分とを分ける行為は、誰にどのように見られるかを意識し、他者から期待されている役割通りに振舞う努力をしている側面があるため、ゴッフマン(1974)の言う「印象操作」とも捉えられる。

3.2 「吹奏楽部アカウント」ではない「吹奏楽アカウント」と部活動

第2章第2節第1項で、「吹奏楽部アカウント」を、アカウント名やプロフィール欄などで、吹奏楽や部活動などについてのツイートを行うことを表明している Twitter アカウントであると説明したが、ここではより詳細な描写を試みる。本研究で「吹奏楽部アカウント」に分類した Twitter アカウントの中には、「吹奏楽部アカウント」ではなく、「吹奏楽アカウント」というアカウント名を用いているものも存在する。それらはアカウント名に「部」が含まれていないが、ツイート内容は吹奏楽部としての活動が多くを占めている Twitter アカウントである。しかし、このような「吹奏楽アカウント」とは全く異なった「吹奏楽アカウント」も存在する。

1 つは、中高生ではない吹奏楽愛好者の Twitter アカウントである。詳細は後述するが、日本には数多くの市民吹奏楽団があることから、学校を卒業した後も部活動ではない領域で吹奏楽と関わり合い続けている者が数多くいることが分かる。このような吹奏楽愛好者たちは、情報を得たり、コミュニティを作ったりするために Twitter を活用する際、「吹奏楽アカウント」という名称を用いることが多いと考えられる。実際に Twitter で「吹奏楽アカウント」を調査したところ、中高生以上の年齢だと推察できる吹奏楽愛好者のアカウントを容易に見えた。さらに、それらのアカウントのフォロイー・フォロワーを調べてみる

と、吹奏楽愛好者同士でリプライし合ったり、オフラインの吹奏楽イベントに関する情報を共有したりする場合が多いことも分かった。

もう1つの「吹奏楽アカウント」は、中高生の「吹奏楽部アカウント」ではない Twitter アカウントである。一例として高校3年生男子の HARUKI さんの Twitter アカウントを取り上げる。HARUKI さんは、吹奏楽部にかつて所属していたが、現在は退部し、大人も多く参加しているアマチュア吹奏楽団に参加している。そのため、HARUKI さんの Twitter アカウントは、厳密に言うと「吹奏楽部アカウント」に分類されない。HARUKI さんは、Twitter などで自己紹介を行う際に「吹奏楽部ではないのですが」という前置きをしばしば入れる。HARUKI さんはアマチュア吹奏楽団体に所属しているので、Twitter 上で「吹奏楽アカウント」を名乗ることは誤りではない。しかし、HARUKI さんが交流を持つ Twitter アカウントの多くは、HARUKI さんと同年代の吹奏楽部員たちであると考えられるため、前置きが必要となると考えられる。また、HARUKI さんのようにアマチュア吹奏楽団体に所属する中高生は珍しいと、HARUKI さん自身が意識していることも推察できる。

吹奏楽は部活動に限ったものではないが、上記の HARUKI さんのツイートなどから、中高生にとっての吹奏楽は部活動を意味していることが分かる。本節の冒頭で述べたように、「吹奏楽アカウント」という名称を用いている Twitter アカウントのツイート内容が、吹奏楽部としての活動について言及したものが多くを占めているのも、中高生にとっての吹奏楽は部活動であることを表していると考えられる。また、中高生以上の年齢の吹奏楽愛好者たちの多くは吹奏楽部出身であり、彼ら彼女らが現役吹奏楽部員であったときに演奏した曲や、吹奏楽部強豪校について言及したツイートも散見された。特に、第4章第3節で言及するが、2018年11月には、『吹奏楽の甲子園』や『吹奏楽の聖地』と呼ばれ、親しまれてきた普門館⁹の解体に対する寂しさや、普門館への長年の憧れについてのツイートが、調査用アカウントの TL をにぎわせた。これらのツイートから、現役中高生はもちろんのこと、吹奏楽部を引退し、学校を卒業した吹奏楽愛好者たちが、長い年月をかけて吹奏楽部の活動を楽しんでいる様子が伺えた。

以上より、「吹奏楽アカウント」から、吹奏楽と吹奏楽部には切っても切り離せない強い結びつきがあると、筆者は主張する。

3.3 「吹奏楽部アカウント」によるオンラインコミュニティの形成

本項では、「吹奏楽部アカウント」がいかにしてオンライン上でコミュニティを築いてい

⁹佼成出版社。“「普門館からありがとう～吹奏楽の響きたちへ～」 1万2000人が別れを惜しむ”。佼成新聞 DIGITAL. 2018-11-12. <https://shimbun.kosei-shuppan.co.jp/news/25137/>, (参照 2019-01-07).

るかに言及する。Twitter 上でのオンラインコミュニティ形成において特徴的なのが、ハッシュタグの使用方法である。以下に、ハッシュタグの説明をツイナビから引用する¹⁰。

#記号と、半角英数字で構成される文字列のことを Twitter 上ではハッシュタグと呼ぶ。発言内に「#〇〇」と入れて投稿すると、その記号付きの発言が検索画面などで一覧できるようになり、同じイベントの参加者や、同じ経験、同じ興味を持つ人の様々な意見が閲覧しやすくなる。ハッシュタグは Twitter ユーザーが自発的に使用するようになったルールであり、ハッシュタグを使用するに当たっては Twitter Inc. への申請や登録は必要ない

元々ハッシュタグは、テレビなどを見ながらその放送内容に関わるツイートをする「実況」の際に使用されていた。また、何らかの形で自分の状況を発信する行為も実況と言える¹¹。しかし、近年ハッシュタグは、実況以外でも活用されている

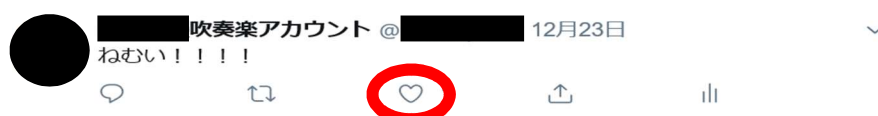


図 3 Twitter のいいねボタン (iPhone にて 2018 年 12 月 25 日取得)

図 3 で示すように、Twitter に表示される「いいね (ツイートへの反応)」ボタンはハートの形をしており、「ラブ」を連想させることから、いいねと RT の両方を行うことを「ラブリツ」や「らぶりつ」と呼称する場合がある。「#ラブリツください」というハッシュタグが用いられることもあるため、「ラブリツ」という行為に意味を見出す Twitter ユーザの存在を確認できる。また、「#らぶりつした人全員フォローする」というハッシュタグから、いい

¹⁰ 株式会社デジタルガレージ. “ハッシュタグ (hashtag) とは”. ツイナビ. 2018-05-29. https://twinavi.jp/guide/section/twitter/glossary/%E3%83%8F%E3%83%83%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%BF%E3%82%B0%28hashtag%29%E3%81%A8%E3%81%AF?ref=pc_tw, (参照 2018-06-24).

¹¹ 津田の『Twitter 社会論：新たなリアルタイム・ウェブの潮流』(2009) から推察するに、2007 年の段階では、Twitter 上での実況による繋がりが生み出されたばかりであったが、2019 年現在では定着している。

ねや RT をきっかけにした相互フォローへの発展を企図する者の存在も確認できる。また、「#ラブリツください」などのツイートを、より多くの Twitter ユーザの目に触れさせる、いわば拡散に力を貸す繋がりが存在するとも言える。

吹奏楽部員同士が繋がる場合、「#吹奏楽部さんと繋がりたい」、「#twitter 上にいる吹奏楽部全員と繋がるのが密かな夢だったりするのでとりあえずこれを見た吹奏楽部員は rt していただけると全力でフォローしに行きます」など、様々なハッシュタグが活用されている。

筆者も実際に「#twitter 上にいる吹奏楽部全員と繋がるのが密かな夢だったりするのでとりあえずこれを見た吹奏楽部員は rt していただけると全力でフォローしに行きます」というハッシュタグ付きで「オーボエを吹いていました」という趣旨のツイートをしたところ、1 日も経たないうちに 50 以上のいいねと、10 以上の RT が行われ、フォロワー数が増加した。ハッシュタグ付きのツイートをするまで、調査用アカウントのフォロワーは、オフラインの知り合いの Twitter アカウントのみであったため、当時の筆者は「ハッシュタグを使って相互フォローの関係を築き、さらにその関係を拡大することができるのか」と衝撃を受けた。また、ハッシュタグの使用によりフォロワーが増加したことへの驚きを綴ったツイートも散見されたことから、筆者以外にも、筆者と同様の衝撃を受けた Twitter ユーザがいることが分かった。以上より、Twitter 上では、ハッシュタグが見知らぬ人との繋がりを作る上で重要であると言える。

Twitter のハッシュタグを使用したり、第 3 章第 4 節で述べるオンライン上の「吹奏楽部アカウントグループ」に参加したりする動機として「友達探し」や「仲間がほしい」というツイートが散見された。本調査では、「吹奏楽部アカウント」を中心に交流を行ったため、吹奏楽関連の話しをすることが多かったが、学校の勉強やクラスの友人関係などの様々な話題でやりとりが盛り上がることも多々あった。「吹奏楽部アカウント」だからといって、吹奏楽や部活動以外の話を禁止するというわけではなく、むしろ「雑談」が推奨されていることが本調査で分かった。

他のソーシャルメディアと比較して、情報のインフラを目指して設計された Twitter¹²は、自由度が高いと以前から指摘されていたが（例えば、津田, 2009 や、北村ら, 2016）、この自由度の高さによって、Twitter ユーザが新たな Twitter の使用方法を次々に編み出すことができていると考えられる。そして、実況に主に使われていたハッシュタグが、「友達探し」に流用されるようになったと推察する。

また、Twitter でリストを作成すると、リスト内の Twitter アカウントのツイートのみが閲覧できるようになる。作成したリストは公開にすることも非公開にすることも可能であ

¹² Internet Week New York のプログラム「Future of Media」でのジャック・ドーシー氏の発言を津田（2009）が要約したものを参照した。

る。とある Twitter ユーザが作成した公開リストを別の Twitter ユーザが活用することも可能である。「吹奏楽部アカウント」を観察していると、ハッシュタグによって相互フォローとなった「吹奏楽部アカウント」の中から、特に交流の多い Twitter アカウントを登録したリストを作成していることが多かった。作成したリストに Twitter アカウントを追加することは「リスイン」と呼ばれる。

調査用アカウントでの観察中に「リスインありがとう！」というツイートを目にしたことから、「リスイン」に対して、特定の Twitter アカウントのツイートを特別に読みたいという思いの表れと考える者がいることや、「リスイン」されることを名誉に思う者がいることが分かった。以上より、「リスイン」は、深い友愛の証として機能していると見ることができ、また、その深い友愛関係を第三者に表明する機会とも見ることができる。

以上を踏まえると、ハッシュタグによる相互フォロー関係の形成は、オフラインでの友達つまり、「リア友」と同様の意味である Twitter 上の繋がりを作る一方で、「ラブリツ」や「リスイン」などに見られる Twitter というプラットフォームに独特の繋がり of 展開があると言える。

Twitter の繋がり is 「弱い (個人情報 of 開示度が低く既知 of 友だちが少ない)」(石井, 2011) あるいは「ゆるい」(津田, 2009) と見なされる傾向にある。Twitter を開発したジャック・ドーシー氏は、「クローズアップ現代+」で、「私はツイッターは SNS だとは思っていません。SNS は友達・家族・クラスメート・同僚を探すツールですが、ツイッターは全く違います。ツイッターでは『関心』によって、誰かとつながるのです。関心を持ってツイッターを使うことで、面白い人たちと出会うことができます。彼らと会話することもあれば、ただフォローする場合もあります。これがツイッターと SNS の大きな違いで、この点でツイッターはユニークなのです。SNS と違い、知り合いを探すツールではない」と語っている¹³。Twitter の繋がりが、「弱い」、「ゆるい」と見なされるのは、『関心』によって誰かとつながる」ことを企図して設計されていることに由来すると考えられる。なお、ジャック・ドーシー氏の言う SNS の定義に、Twitter は当てはまっていないが、その他の SNS の定義と照らし合わせた際に、Twitter を SNS であると見なす場合がある。

石井 (2011) は、匿名的な「弱い」繋がり形成する Twitter が、日本で多くの利用者を獲得している事実は、Twitter のような SNS が社会関係資本 of 形成や維持にとどまらない機能を持つことを示しており、ネットワーク上の現実 of 対人関係と結びつかない匿名 of 交流自体を楽しむという機能に注目している。

「吹奏楽部アカウント」の場合、吹奏楽 (部) という「関心」によって繋がり合っている

¹³ NHK. “ツイッター CEO が語る “つぶやき” の光と影”. クローズアップ現代+. 2017-11-21. <https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4067/index.html>, (参照 2019-01-02).

と言えるが、Twitter 上で「友達探し」を行う Twitter アカウントがいるため、関心事に関する情報の取得だけでなく、「雑談」などを行う交流も志向されていると言える。この点は石井の論と合致する。「吹奏楽部アカウント」が用いる「友達」という言葉は、オフラインにおける既存の人間関係を指しているわけではないが、「吹奏楽部アカウント」は、Twitter 上で今までの関係性とは異なる新たな「友達」を探している。これは、血縁や地縁や社縁などの選択できない縁ではなく、「選択縁（選べる縁）」（上野, 1994）を Twitter 上で取り結んでいるとも言える。上野（1994）は、選択縁の特徴を以下の 3 つにまとめている。1 つ目の特徴は、自由で開放的な関係である。原則としてコミュニティなどへの加入・脱退は自由である。2 つ目の特徴は、情報媒介型の性格を持つことである。特定の情報やシンボルを媒介に結び付いているので、コミュニケーションの場を共有しながら匿名性を保つことができ、また、深夜放送のオーディエンス同士のように、対面接触や身体的な場の共有がなくても関係が生じる。3 つ目の特徴は、役割からの離脱である。例えば、拘束的な社会関係からはみ出した人間関係を築く酒場では、アイデンティティの自由な創造やコントロールが可能である。

富田（1997）は、「オンライン上で親密な関係にある人と、オフラインで親密であるかどうかは、もはや問題ではない。むしろ、オフラインでの関係がないからこそ親密になれる関係が登場しているのである」（富田, 1997, p. 62）と述べ、「メディアの上だけで親しくする他者」であるオンライン上の親友を、“Intimate Stranger”と名付けた。筆者は、“Intimate Stranger”を、オンライン上で選択縁を取り結んだ者と考える。

富田は、“Intimate Stranger”という新たな人間関係を手に入れようとしている状況に対して、オンライン上の新しい親密な関係を手に入れることで、既知の身近な人との親密な関係を失ってしまうのか、または、“Intimate Stranger” との間の親密さは、従来とは全く異なったものとして、既知の身近な人たちとの親密な関係と両立するものであるか、注意を払う必要性について述べている。

本調査では、「吹奏楽部アカウント」の相互フォロー関係や、第 3 章第 4 節で説明を行う「吹奏楽部グループ」のやりとりを観察したが、「リア友」との交流を遮断している者もいれば、「リア友」とオンライン上のみの「友達」とのどちらとも交流を行っている者もいた。一人ひとりがどのようにオンライン上で人との繋がりを構築するかを選択していることから、選択縁を取り結んだ“Intimate Stranger”との間の親密さは、従来とは全く異なったものとして、既知の身近な人たちとの親密な関係と両立するものであると筆者は考察する。そして、選択縁を取り結んだ“Intimate Stranger”や、場合によっては「リア友」をも含むオンラインコミュニティが、Twitter 上でハッシュタグなどの機能を活用する「吹奏楽部アカウント」によって、吹奏楽（部）という「関心」を軸に形成されていることが、調査を通して分かった。

本論文で言う Twitter 上のオンラインコミュニティには、明確なグループの内と外が厳密には存在しない。Twitter というサービスを使用するか否かという点では、ある種の内と外は存在するが、Twitter 上で展開されるオンラインコミュニティは、自分自身を起点としたフォロイー・フォロワーによって形成される。そのため、一人の Twitter ユーザが、複数のオンラインコミュニティに属することも可能であり、また、オンラインコミュニティ加入・脱退の手続きを行うこともない。先述したように「吹奏楽部アカウント」は、吹奏楽（部）という「関心」を軸にオンラインコミュニティを形成しているが、このオンラインコミュニティは、後述する「吹奏楽部グループ」とは違い、はっきりとした内と外を持たない非常に流動性の高いコミュニティであると、筆者は主張する。

3.4 オンラインコミュニティでの様々なトラブル

3.4.1 「吹奏楽部グループ」とトラブル

第2章第2節第1項でも説明したが、調査用アカウントで吹奏楽関係のフォロイー・フォロワーが増加した結果、筆者は Twitter から派生した2つの繋がりを獲得できた。その2つの繋がりのきっかけは、オンライン上の「吹奏楽部グループ」への参加と、夏イベへの参加である。本項では、「吹奏楽部グループ」についての説明を行う。夏イベの詳細は、第4章第2節で説明を行う。まず、いかにして、「吹奏楽部グループ」が成立するかを述べる。ハッシュタグ同様、Twitter 上ではしばしば「グループ入りませんか？」という趣旨の宣伝が行われる。同好の士を募り、Twitter の GDM または、その他の SNS、特に LINE でグループを作成してより深い交流を持つのである。

グループの規模は様々であり、また短い期間で大きく変動する。筆者が参加した Twitter の GDM の「吹奏楽部グループ」参加者数は、筆者が加入した 2018 年 3 月 18 日午後 11 時の時点で 6 名だったが、その後増加し、2018 年 6 月 24 日午後 1 時の時点では 32 名である。しかし、その後「グループトーク (LINE 上でのグループチャットの名称)」が行われなくなり、グループを「退出」する者が増え、2018 年 8 月 30 日午後 5 時の時点で参加者は 28 名になり、2018 年 11 月 12 日午後 5 時の時点で参加者は 25 名となった。また、筆者が初めて参加した LINE の「吹奏楽部グループ」は、筆者が加入した 2018 年 5 月 5 日午後 9 時の時点で 60 名の参加者がいたが、6 日午前 10 時の時点でグループが解体された。

本調査では、LINE の「吹奏楽部グループ」におけるグループトーク中に、5 回トラブルが発生した。1 回目のトラブルは喧嘩、2 回目のトラブルは誹謗中傷、3 回目と 4 回目のトラブルはともに「荒らし」行為、5 回目のトラブルはオンラインとオフラインが交錯するような複雑な喧嘩である。各トラブルについての詳細は以下に記述する。なお、トラブルに関連するデータは非常にセンシティブであるため、筆者が倫理的配慮を要すると判断を行い、トラブルの発生した日時は記述していない。

まず1回目のトラブルである喧嘩について説明する。LINE グループは、グループ参加者であれば誰でも自由に、他の誰かをグループへ「招待」したり、「退室」させたりすることができる。とある「吹奏楽部グループ」(以下、A グループ) で LINE でのグループトーク中に、メッセージのやり取りの頻度をめぐって参加者同士で喧嘩が発生し、気に入らない人間を退会させるという行為が繰り返された結果、グループが解体した。

2 回目のトラブルは誹謗中傷である。先述のグループとは別の「吹奏楽部グループ」(以下、B グループ) で、LINE の匿名投票ができる「アンケート」機能を悪用し、「死ぬ」「調子に乗るな」などの誹謗中傷を特定の個人に行う者が現れた(このグループは 2018 年 11 月時点では解体されていない)。個人に対する誹謗中傷が起こった時、中高生の中には「インターネットはこういうもの」や、「相手にしてはいけない」などと発言する者がいた。また、上記2つのトラブルを経験した HARUKI さんは、オンライン上でグループが作られることに対して「事件(?)はありましたが、今ではアットホームな感じでみんな仲良くやっているんで、吹部とか関わらずにコレもいいなあって思ってます」と綴った。

3 回目と4回目のトラブルはともに「荒らし」行為である。荒らしとは、グループの会話の妨害や、参加者の強制退会によってグループそのものを壊そうとする行為である。2 度の荒らしは両方とも、本調査で参加した「吹奏楽グループ」の中で一番規模の大きいもの(以下、C グループ) で発生した。1 度目の荒らしについて、「グル主(グループの創設者や管理者のことを指す)」である、高校1年生男子のハヤトさんは、以下のように説明した。ハヤトさんの LINE の QR コードが、何者かによってアダルトサイトに転載されたために、「怪しい」アカウントが C グループに参加し、荒らしが起こった。ハヤトさんは、「吹奏楽グループ」を作るために、自身の LINE の QR コードを自身の Twitter アカウントでツイートし、公開していた。荒らしが起こってからハヤトさんは、「グルチャ(グループチャットの略) 募集」ツイートを全て削除し、LINE の QR コードを変更して対応を行った。C グループでは、1 度目の荒らしがあった後、C グループとは別のグループで荒らしにあった人々の意見や対策が汲み上げられたり、荒らしを抑制するコンピュータプログラムの導入を試みたりして、グループ内で話し合いを行いながら荒らし対策を練っていた。C グループに参加していた「餌師(「荒らしを行う団体に情報を提供する者」) 疑惑のある LINE アカウントが、荒らしを行う人物を LINE に招待したところ、すぐにハヤトさんが当該の人物を退会させるという対応をとった。そのため、2 度目の荒らしは被害の拡大を防げたと考えられる。

5 回目のトラブルは、オンラインとオフラインが交錯するような複雑な喧嘩である。A グループでの 1 回目のトラブル同様、グループ参加者同士で喧嘩が発生し、気に入らない人間を退会させるという行為が、C グループでも発生した。しかし、1 回目のトラブルとは違い、学校が同じ生徒同士での喧嘩であった。

3.4.2 2人の高校生とトラブルの連鎖

A グループでの 1 回目のトラブルと、B グループの創設と、C グループでの 5 回目のトラブルとは関連性がある。2 人の高校生を中心に、LINE グループの間の繋がりトラブルの連鎖について記述する。なお、オンライン上でのトラブルというセンシティブな内容を扱うため、誰が誰に対して何を行ったかなどを部分的に改変して記述している。また、発言者を特定できないように、引用文で使用されている単語などは、文意が変わらない程度に改変している。

高校 2 年生女子のヒナノさんと高校 1 年生女子の MIYUさんは、同じ高校に通っている。2 人は吹奏楽部の先輩後輩として、当初は良好な関係を築いていた。1 回目のトラブルで解体した A グループにもヒナノさんと MIYUさんは参加していたが、A グループでは 2 人で遊ぶ約束や「菓子パ（お菓子パーティーの略）」を開催する段取りについて連絡しあっていた。ヒナノさんと MIYUさんは、A グループにおいて上記のような個人的なやり取りを行っていたが、一方で他の参加者が個人的なやり取りを行うことに対しては、「（メッセージ受信時の）通知が増えてうざい」と批判的であったため、A グループで喧嘩が発生し、グループ解体に至った。

この一件によって、メッセージのやり取りの頻度についてあらかじめルールを取り決めた B グループが新たに作成された。特に攻撃的であった MIYUさんに対して、一定の距離を置こうとする A グループ参加者たちが、A グループを退室して B グループに参加した。ここで取り上げた LINE グループ以外にも「吹奏楽部グループ」は数多く存在し、ヒナノさんも MIYUさんも複数の「吹奏楽部グループ」に参加していた。MIYUさんは C グループにも参加していたが、ヒナノさんが C グループに新たに参加すると、C グループを自主的に「退室」した。C グループ参加者たちが、突然 MIYUさんが退室したことを不思議に思っているところに、「ヒナノが入ったから MIYUが抜けたんだよ」とヒナノさんは説明を行った。LINE での個人的やり取りが上手くいかなかったことや、学校での喧嘩により、ヒナノさんと MIYUさんの友人関係が破綻していったと考えられる。

さらに、ヒナノさんは、MIYUさんの部活動での練習振りを中傷するようなメッセージや、MIYUさんが練習している様子を盗撮したと思われる動画を、C グループに投稿した。MIYUさんは既に C グループを退室しているので、ヒナノさんのメッセージや動画に対して反論することはできず、C グループの参加者たちも、ヒナノさんに同調する形で MIYUさんへの誹謗中傷ともとれるようなメッセージを投稿した。A グループや、C グループ以外の様々な「吹奏楽部グループ」で、MIYUさんのオンライン上での振る舞いは問題視されていたこともあり、MIYUさんを庇う者はいなかった。

MIYUさんへの誹謗中傷ともとれるようなやり取りは 2 日間続いたが、その後しばらくは、MIYUさんが「吹奏楽部グループ」の話題になることはなかった。そして、約 1 ヶ月後

には、LINE のアカウント名を「みゆ」に変更した MIYU さんが再び C グループに参加した。みゆさんは、C グループに復帰した当初、頻繁に他の C グループ参加者たちとやり取りをしており、喧嘩なども発生せず良好な関係を築いていた。しかし、その 1 ヶ月後、みゆさんは、グループトークでの「雑談」中に「うちのステメ（「ステータスメッセージ」の略）をある人にパクられたのは本当クソ」と名指しをせずにヒナノさんを非難した。ステータスメッセージとは、LINE の「友だち」一覧画面などで、自身の LINE アカウント名の横に表示されるメッセージである。みゆさんの発言に対し、奈央さん（高校 3 年生女子）は「悪口的なのは話すならこちゃ（個人チャットの略）の方がいいかも👍」と指摘した。みゆさんは、奈央さんに対して「すみませんー」と謝罪をし、その後しばらくは、吹奏楽曲について話を他の参加者たちと行っていた。しかし、会話がひと段落したところで、みゆさんは、加勢の酢酸<MXGP 愛>さん（中学 1 年生男子）を C グループに招待し、2 人で名指しせずにヒナノさんを中傷するやり取りをはじめた。

ヒナノさんへの中傷が行われた後すぐに、みゆさんと、加勢の酢酸<MXGP 愛>さんと、ヨシノンさん（中学 3 年生男子）の 3 人は C グループを退会させられた。上記の 3 人を退会させたのは、ヒナノさんではなく、ヒナノさんのインターネット上の友人であるりり子さん（中学 2 年生女子）だった。りり子さんが 3 人を退会させたことに、C グループの参加者が戸惑っていると、りり子さんは以下のように説明を行った。

他の吹奏楽部グループで色々トラブルがありまして、それで私の友達がこの 3 人からいやがらせ的なのを受けたので、これ以上関わるとこっちで起きた問題がこのグループまで影響するので退会させました。関係ないグループもそれで 1 つ問題が起きてしまったので、こちらにまで迷惑をかけたくなかったので…語彙力なくてごめんなさい。長文すみません。何も言わずに退会失礼しました。

問題については複雑すぎるので、あまり言えないことが多いですが…

C グループには、みゆさんとヒナノさんとの間で発生したトラブルについてよく知らない者も多くおり、「何が起きてるの？喧嘩？」と説明を求めるメッセージが送られることもあった。C グループの「グル主」であるハヤトさんは、詳しい事情を知っているらしく、さらに説明を加えたが、複数人が矢継ぎ早にメッセージを送ることで、説明文が流れてしまうという問題があった。そこで、ヒナノさんとりり子さんは、トラブルの詳細を複数人に対して確実に説明するために、新しく LINE グループを作ることを提案した。以下に、りり子さんの C グループに投稿したメッセージを示す。

説明会用のグループ作ります。そこで20時から説明を行います。知りたい人はヒナノとりり子ちゃんを（友だちに）追加してください。

このグループのトークに「入りたい」と送ってくれた方を招待します。

筆者は「説明会用のグループ」があったことや、「説明会」がオンライン上で開催されていたことを、「説明会」が終わってから知った。ヒナノさんととりり子さんだけでなく、Cグループの「グル主」であるハヤトさんも「説明会用のグループ」設置の指揮を執っている様子が、Cグループ参加者間のやり取りによって分かった。そのため、筆者は、トラブルに關して中立的立場のハヤトさんに、LINEの個人チャットを用いて「説明会」の内容を尋ねた。ハヤトさんは「説明会用のグループ」で、説明が行われた部分のスクリーンショットを、LINEの個人チャットで筆者に送ってくれた。

「説明会用のグループ」では主にヒナノさんが、3人を退会させた経緯を説明していた。吹奏楽部の後輩であるみゆさんが、Twitter上でヒナノさんの行動を批判したことから、2人の関係は悪化した。LINEのプロフィール欄にあるステータスメッセージに、誰とは明言しない形で誹謗中傷を書くという行為を互いに行うなど、オンライン上での喧嘩は続いていたが、学校では互いに無視をするという状況であったようだ。しかし、みゆさんからヒナノさんにLINEの個人チャットで「ふざけんな」、「未読無視とか最低」、「頭悪い」などのメッセージが届くようになり、やがて1日に何十回もLINEの無料通話機能を用いた電話がかかってくるという状況になった。また、みゆさんと、加勢の酢酸<MXGP愛>さんと、ヨシノンさんの3人で構成されるLINEグループに執拗にヒナノさんは招待され続けているそうである。

ヒナノさんは、みゆさんの行動について、りり子さんなどのオンライン上の友人や、みゆさん以外の学校の友人に相談をしていた。そのため、ヒナノさんを案じたりり子さんが、みゆさんをCグループから退会させたのであった。

3.4.3 トラブル解決のための協働

本節第1項と第2項のまとめを行う。Aグループでメッセージのやり取りの頻度をめぐって参加者同士で喧嘩が発生した際、メッセージのやり取りの頻度についてあらかじめルールを取り決めたBグループが新たに作成された。BグループでLINEのアンケート機能を悪用した誹謗中傷が行われた際、参加者間で「相手にしてはいけない」などのメッセージを投稿し合い、状況の鎮静化をはかった。Cグループでは1度荒らしが発生したが、その後Cグループ内で荒らし対策を行い、また、荒らしが発生しかけた際は、「グル主」のハヤト

さんが迅速な対応を行った。MIYU（みゆ）さんとヒナノさんとの間のトラブルに関して、ハヤトさんや、りり子さんをはじめ、複数の C グループ参加者の協働によって、「説明会用のグループ」が作成されて情報流通の方法が工夫され、状況の整理が行われた。

「吹奏楽部グループ」の他にも、例えば「恋人がほしい人限定グループ」など、様々な種類の LINE グループが Twitter などをきっかけとして作成されているが、どのようなグループであっても、トラブルは日常的に発生していると推察できる。また、それらのトラブルを未然に防ごうとしたり、発生したトラブルに対処したりすることも同様に日常化していると考えられる。

LINE グループに限らず、Twitter の GDM などのグループチャットでも類似のことは起こると考えられる。また、Twitter 上でのリプライ機能を用いたやり取りや、特定の相手に対するツイートを、リプライ機能を用いずに直接タイムライン上に投稿する「空中リプライ」など、様々な方法でのやり取りを調査用アカウントで観察していても、大小問わず様々なトラブルが発生していた。Twitter を介して恋人を作ることに対する是非で揉めることもあれば、Twitter アカウントを何者かに乗っ取られてしまうこともあれば、特定の集団に対する否定的な感情をツイートし「炎上（誹謗中傷などの好意的ではない投稿が集中すること）」してしまうこともあると言ったように、中高生と推察できる Twitter アカウントという限られた範囲ですら、多岐にわたるトラブルが見られた。

また、A 中学校テニス部に所属する椎名さん（中学 2 年生女子）は、「そういうの（ソーシャルメディアへの自撮りのアップロード）はしない」とインタビュー中に語り、さらに「妹がそういうことしそうで不安だから SNS はさせない」という趣旨のことを語った。椎名さんの語りから、顔写真や個人情報などをソーシャルメディア上に載せることについて、中高生なりの考えを持っていることが分かる。中高生たちは、それぞれの基準で危険を設定した上で、危険を回避しながらソーシャルメディアを利用していると言える。

中高生たちは、ソーシャルメディア利用において危険の回避に努めるが、全くもってトラブルなく利用を行えるわけではないと言える。しかし、LINE グループでも Twitter 上でも、オンライン上で人々が繋がる際に大なり小なりトラブルが起こった場合、トラブルの渦中にいる者たちはトラブル解決のために協働する様子が観察できた。以上より、中高生の中には、様々な人々とオンライン上で繋がる行為はメリットばかりではないと分かった上で、危険やトラブルを回避する努力を行ったり、トラブルが生じたときに対策を練ったりして、その行為を続けたいという欲求を持つ者もいると考えられる。

その一方で、MIYU（みゆ）さんとヒナノさんとの間に起こったトラブルのように、場合によってはいじめや、「ネットリンチ（インターネット上での集団攻撃）」に発展しかねない深刻なトラブルが発生することは事実であり、その危険性を無視して安易にオンライン上で人々が繋がるメリットばかりを強調することは、やや楽観的過ぎると筆者は考える。中高

生がオンライン上で危険に晒されたり、誰かを意図的に深く傷つけたりしないように、学校教育や家庭教育などによって、未成年者たちに情報リテラシの重要性を教えることが必要である。

第4章 オンラインコミュニティと「吹奏楽オフ」

第3章では Twitter を起点に広がっていくオンラインコミュニティについて言及を行ったが、第4章では Twitter を起点にオフラインでの繋がりを形成する様子や、形成されたオフラインでの繋がりにからオンラインコミュニティが広がる様子を記述する。オンライン上で交流を持った現役吹奏楽部員や吹奏楽愛好者がオフラインで集うことは、「吹奏楽オフ（会）」と呼ばれる。「吹奏楽オフ」では、集まった者たちで合奏したり、吹奏楽や楽器について語らい合ったりする。「吹奏楽オフ」は、吹奏楽部員たちのオンラインとオフラインの「場所」を伴った交錯地点がと言えるだろう。

本章では「吹奏楽オフ」の盛り上がりとその背景について考察する。それにあたり、かつて吹奏楽部員であった者たち、つまり中学高校を卒業した者たちについても言及する。本章第1節と第2節では、オフラインでの参与観察とインタビュー調査の結果を中心に引き上げ、第3節では、「吹奏楽オフ」と見なす企画に関するブログ記事とツイートを取り上げる。

4.1 mixi とニコニコオーケストラ

Twitter やその他のソーシャルメディアを通して活動する音楽家が昨今増えている。そのような人々が Twitter 上で音楽活動などの広報を行う場合があり、時には様々な楽器奏者を募集してイベントが成立することもある。このようなイベントによく参加するという西本さん（20代男性）に、インフォーマルな形式でのインタビューを行った。西本さんは、「ニコニコオーケストラがなかったら、今の吹奏楽オフはなかった」と述べている。

ニコニコオーケストラ（以下、ニコオケ）とは、mixi の「コミュニティ（掲示板を利用して参加メンバーと交流ができる機能）」を活用したアマチュア管弦打楽器奏者の集まりである。コミュニティ参加者のうち、オフ会に参加できるメンバーで演奏を行い、録音録画したものを、ニコニコ動画にアップロードする。ニコオケは、「皆で楽しんで演奏をすることを目的としているため、名称に『オーケストラ』とついてはいるが、特にオーケストラや吹奏楽、アニメソング、ゲーム音楽などジャンルの枠にとらわれない自由な形態での演奏が多い¹⁴」そうである。ニコオケは、2017年8月2日で創立10周年を迎え、2017年9月30日ですべてのオフ会から10年となったが、2017年9月30日の動画投稿をもって活動を終了

¹⁴ 大百科ニュース社. “☆ニコオケ☆とは（ニコオケとは）[単語記事]”. ニコニコ大百科. <https://dic.nicovideo.jp/a/%E2%98%86%E3%83%8B%E3%82%B3%E3%82%AA%E3%82%B1%E2%98%86>, (参照 2019-01-12).

し、コミュニティを解散した¹⁵。

西本さんもニコオケに参加したことがあるそうで、演奏者が一同にホールに会して録音録画する際の自由闊達な雰囲気を楽しそうに語った。演奏者たちは、録音では真剣に演奏をするが、ニコニコ動画にアップロードするための動画を撮影する際には、奇抜な仮装をしたり、変な体勢で楽器を吹いたり、そもそも手に楽器を持っていなかったりして、徹底的に「ふざけた」そうである。

西本さんは「いろんな団体がニコオケをきっかけに活動している」と語り、ニコオケが「吹奏楽オフ」の草分け的存在であったことを強調するとともに、全日本吹奏楽コンクール（以下、コンクール）で演奏されるような、いわゆる定番の曲だけでなく、ゲーム音楽やアニメ関連の曲を演奏する「吹奏楽オフ」の多さにも言及した。

ニコオケは、「吹奏楽オフ」勃興のきっかけとなったが、オーケストラに親しんでいる者のオフ会は「吹奏楽オフ」とは少し様子が異なっている。西本さんに「管弦楽のオフ会も盛り上がっているんですか」と筆者が聞くと、西本さんは「オケはそんなに（盛り上がっていない）」と答えた。この現象は、Twitter でも当てはまる。「吹奏楽部アカウント」と比較して「オーケストラ部アカウント」は非常に少ない。「オーケストラ部アカウント」が他のアカウントと繋がる際に使うハッシュタグは、「#吹奏楽部さんと繋がりたい」などを流用していることがもっぱらである。「オケはそんなに」オフ会や Twitter が盛り上がらないのは、吹奏楽部員の方が圧倒的にオーケストラ部員の数を上回っているからだと考えられる。東京都高等学校吹奏楽連盟の加盟校は 300 校を超えている（東京都高等学校吹奏楽連盟, 2016）が、全日本高等学校オーケストラ連盟の東京都の加盟校は 21 校（全日本高等学校オーケストラ連盟, 2017）である。また、東京都一般吹奏楽連盟の加盟団体は 93 団体（東京都一般吹奏楽連盟, 2018）だが、日本アマチュアオーケストラ連盟の東京都の加盟団体は 8 団体（日本アマチュアオーケストラ連盟, 2018）である。日本での吹奏楽関連の活動は非常に活発であり、オーケストラのそれを大きく上回っている。このため、ニコオケが「オーケストラオフ会」ではなく、「吹奏楽オフ」の源流となったと言えよう。

西本さんは「吹奏楽オフ」の一番のメリットを「やっぱり、自分のやりたい曲できるっていうのがでかい。自分が運営側に回れば絶対できるもん」と語った。筑波大学管弦楽団に所属している筆者が、「大学オケの演奏会とかだと、お客さんウケも考えてプログラム組まないといけないので、やりたいことやれるって機会少ないですね」と述べると、西本さんは「それが一番。ゲーム系だと、お客さんウケとか考えなくても、（ゲームの）ファンの人が（聴きに）来てくれますし」と答えた。市民吹奏楽団や市民オーケストラでは、なかなかで

¹⁵ KohMei. “【☆ニコオケ☆Final】最後にもう一度『流星群』を演奏してみた【10 周年】”. ニコニコ動画. 2017-09-30. <http://www.nicovideo.jp/watch/sm31998519>, (2019-01-08).

きないような曲であっても、自らが発起人となって賛同してくれる演奏者を集めたり、編曲を行ったりすることで、演奏の機会を得られる。

西本さんは、自らの選曲に賛同してくれる演奏者を集めるのに、SNS が非常に役に立っているとも述べている。「知らない人と出会うのに SNS がないのはかなり厳しい」と西本さんは考えている。筆者が「今、一番活用している SNS は」と聞くと「今は主に Twitter で繋がってる。ニコオケ時代は mixi だったけど」と答えた。

以上より、mixi によって演奏者の繋がりを得ていたニコオケが、「吹奏楽オフ」の源流となり、現在では mixi に代わって Twitter が演奏者の繋がりを支える存在となっていることが分かった。

4.2 Twitter と「吹奏楽オフ」

本項では先述した夏イベについて説明する。夏イベは、オンライン上で募集した約 400 名の参加者で、複数の吹奏楽曲を合奏するイベントである。中高生の参加者は約 40 名である（中高生は保護者の同意があれば参加可能）。夏イベは大規模な「吹奏楽オフ」と位置付けられる。筆者は、2018 年 6 月から 8 月にかけて夏イベの参与観察を行った。

筆者が夏イベに参加したきっかけは、Twitter でイベントの参加者募集を行っているのを目にしたことである。夏イベ主催者の牧さん（20 代・男性）は、YouTube に演奏動画を投稿するなどの活動を行い、その活動の宣伝や日々の雑感などを Twitter で発信している。牧さんの Twitter アカウントには 2018 年 8 月時点で約 15,000 のフォロワーがいる。筆者がフォローしていた「吹奏楽部アカウント」のうちのいくつかは、牧さんの Twitter アカウントのフォロワーであった。筆者がフォローしていた「吹奏楽部アカウント」が、夏イベ参加者を募集する牧さんのツイートを RT し、それが筆者の目に留まった。

イベント参加の申し込みは、主に牧さんの Twitter アカウントへの DM で受け付けている。牧さんと DM で連絡が取れ、イベント参加が確定すると、夏イベ LINE グループに招待される。夏イベ LINE グループでは、練習日程の相談や参加費の支払い方法などが共有される。また、夏イベで演奏する曲目は、夏イベ LINE グループ内でのアンケートをもとに、練習期間や、演奏者数などを考慮して牧さんが決定する。曲目が決定すると楽譜のデータが共有され、参加者が各自で印刷できるようになる。

夏イベでは、参加者同士の顔合わせが 1 回、合奏前の譜読み練習会が 2 回、合奏練習が 4 回開催された。夏イベの開催場所は関東圏内であったが、関東圏外からの参加者も複数いた。また、現役の吹奏楽部員や、社会人など時間の都合が合わない者も多数いる。そのため、練習に来られない参加者も多く、本番当日に初めて参加者全員が揃うという状態であった。

夏イベの目的は、吹奏楽を通して多くの人が「繋がる」事にある。本番当日には、1 時間ほどの長い休憩時間を設け、「できる限り多くの人と交流を持ってほしい」と牧さんは参加

者たちに呼びかけた。筆者も本番当日には、沢山のひとと話したり、一緒に写真を撮ったりすることができた。もちろん、本番だけでなく顔合わせや練習会によって、参加者間での関係性の構築は行われた。さらに、本番終了後の打ち上げでは、より参加者間の関係性は親密になった。例えば、中学2年生女子の野原さんが、筆者に対して吹奏楽部での活動のことや、中学校で流行っている SNS などを教えてくれたり、高校3年生女子の大貫さんが、打ち上げ参加者から大貫コール（ひたすら名前を呼ばれるだけ）を受けていたりした。

牧さんは、夏イベ本番当日に Twitter の活用を推奨し、夏イベ関連のツイートには積極的に夏イベ用ハッシュタグをつけるように促した。夏イベ用のハッシュタグを使って Twitter で検索をかけると、夏イベ参加者と思しき Twitter アカウントを発見できる。また、練習会終了後や、本番当日の休憩時間に Twitter アカウントを参加者同士で教え合うこともあった。夏イベ本番が終わった後も、夏イベに参加した感想などがハッシュタグとともにツイートされており、夏イベ中にあまり話せなかった人と Twitter で繋がるということが可能になる。夏イベをきっかけに、夏イベ参加者とのコミュニケーションに特化した Twitter アカウントを作成した人もいる。筆者は打ち上げをきっかけに、野原さんと Twitter で相互フォローとなった。夏イベでは、Twitter の繋がりからオフラインの繋がりへと変化していく過程とともに、オフラインの繋がりから Twitter の繋がりへ発展する様子も見ることができた。

牧さんは、夏イベのような大規模な「吹奏楽オフ」を開催したことに対して、「この企画（夏イベ）もニコオケがあってこそ」と、ニコオケから影響を受けていることを語った。牧さんは中学生の頃に「ニコオケ」の動画を見て、音楽経験や技量に関係なく吹奏楽愛好者たちが集って演奏できるイベントに憧れを持ったが、これは、現役中高生たちが YouTube に投稿された動画を見て、憧れを持つことと共通するのではないかと考えられる。実際に、夏イベに参加した中高生に参加したきっかけを尋ねると、「YouTube で、牧さんが主宰した吹奏楽イベントの動画を見て参加した」という趣旨の答えが返ってきた。オンライン上で参加者をリクルートして合奏イベントを行い、その後イベントでの演奏をオンライン上にアップすることで、イベントの宣伝になり、参加者が増加するという循環が起こると考えられる。

第2章第3項第1節で示した通り、10代の若者の YouTube 利用率が 84.3%であることを踏まえつつ、夏イベに参加した中高生の語りを考察すると、「吹奏楽オフ」での演奏動画を YouTube で見たことがきっかけで、自らも演奏する側としてオフ会に参加したいと考える中高生が多く存在すると言える。さらに、「吹奏楽オフ」に参加する前後で、Twitter 上の吹奏楽愛好者ネットワークや、演奏者ネットワークに参入して、繋がりを拡大していくことも推察できる。

4.3 「#ラスト普門館音楽隊」で広がる吹奏楽コミュニティ

現役の吹奏楽部員たちはもちろん、吹奏楽関係者や吹奏楽ファンの多くが最も注目する吹奏楽イベントは、コンクールだと筆者は考える。西田 (2006)、古川 (2008)、関向 (2017) などが、それぞれの視点から、吹奏楽部の活動におけるコンクールの存在の大きさに言及している。調査用アカウントでも、「コンクールシーズン」と呼ばれる 6 月から 8 月にかけて、コンクールに参加する意気込みやコンクールに向けた練習についてのツイートが散見され、全国大会が開催される 10 月には、どの学校が全国大会で金賞をとるのかという予想や、どの学校の演奏が好みかなどのツイートを見ることが非常に多かった。上記の期間以外にも、コンクールに向けた日々の所感などは、常にツイートされている。一方で、コンクールを重視しすぎることに苦言を呈すツイートも決して少なくはない。先行研究や、上記のような様々なツイートを踏まえると、吹奏楽部にとってのコンクールの存在がいかに大きいかかうかがい知れる。

そして、コンクールの代名詞とされるほど吹奏楽関係者の間で有名なのが「普門館」である。『吹奏楽の甲子園』や『吹奏楽の聖地』と呼ばれ、親しまれてきた普門館⁹⁾は、かつてコンクール全国大会の開催会場であったが、耐震性の問題から 2018 年 12 月に取り壊されることとなった。佼成新聞 DIGITAL の記事によると、普門館の取り壊しを前に、普門館大ホールの舞台を開放するイベント「普門館からありがとう～吹奏楽の響きたちへ～」が 2018 年 11 月 5 日から 11 日まで行われ、約 12,000 人の吹奏楽関係者や吹奏楽ファンが普門館を訪れたそうである⁹⁾。筆者も 11 日に普門館を訪れたが、大勢の楽器を抱えた人々が列をなして普門館への入場を今か今かと待ち構えている様子が印象的であった。

「普門館からありがとう～吹奏楽の響きたちへ～」が開催されるという発表がされた直後に、吹奏楽ファンで集まって演奏をしようという趣旨の企画が、Twitter で発信された¹⁶⁾。この企画は、吹奏楽団体や、吹奏楽イベントの運営を職業としている者によって提案されたものではない。吹奏楽部出身のアマチュア楽器奏者が個人的に Twitter で呼びかけを行ったところ、RT などで拡散され、規模が大きくなった企画である。一人の呼びかけから始まった企画だったが、ツイートが拡散されるにつれ、運営側として参加する者が 5 名集まった。計 6 名での企画運営により、全国各地から集った 50 名以上の演奏者での大合奏が、11 月 11 日に普門館大ホールにて実現した。これらの企画の運営における打ち合わせは、Twitter の DM などを通して行われたそうである¹⁷⁾。参加者への事前情報の周知にも Twitter が用い

¹⁶⁾ “最後の普門館で合奏し隊”. Twitter. <https://twitter.com/lastfumonkan>, (参照 2019-02-07).

¹⁷⁾ はたさきえみか. “普門館と宝島とはじめの一步”. note. 2018-11-20. <https://note.mu/emitaso/n/n958b7ab2ffa2#!>, (参照 2019-01-07).

られている。「#ラスト普門館音楽隊」というハッシュタグ付きでツイートが行われていることにより、企画に関する情報の検索が容易になり、企画参加者にとっての必要情報が手に入りやすくなるように工夫されていた。

この企画について「普門館と宝島とはじめの一步」というタイトルのブログ記事を、発起人のはたさきえみかさんが書いている¹⁷。ここでは、はたさきさんのブログ記事を参考にしつつ、「#ラスト普門館音楽隊」というハッシュタグ付きのツイートや、はたさきさんの企画に反応のあった Twitter アカウントのツイートを見ていく。

はたさきさんは、「『普門館からありがとう〜吹奏楽の響きたちへ』と題して、ステージを一般開放することになった¹⁸」という朝日新聞デジタルの記事を目にし、2018 年 8 月 3 日に「最後の普門館で合奏し隊」という名前の Twitter アカウント¹⁶を作成し、1 回目のツイートをを行ったそうである¹⁷。以下に、「最後の普門館で合奏し隊」の 1 回目のツイートを示す¹⁹。

最後の普門館で、集まって即興合奏しませんか??

1人で音出しもいいけど、周りの音にかき消されちゃうかも。。。。

久々に楽器を触る人、現役生、OBOG ざっくばらんに集まって 2.3 曲その場で即興で吹いてみませんか！みんなで最後の普門館に響き渡らせよう！

「普門館の記事について当時ツイートされていた方」を中心に、はたさきさんは「最後の普門館で合奏し隊」を用いて Twitter 上で呼びかけを行ったそうである¹⁷。また、「最後の普門館で合奏し隊」のフォロワー数を徐々に増加し、アカウント作成から 3 日後の 2018 年 8 月 6 日に選曲のための投票を実施した²⁰。投票では、「星条旗よ永遠なれ」や「ディスコ・キッド」など普門館で演奏された曲たちが接戦を繰り広げ、最終的に「オーメンズ・オブ・

¹⁸ 魚住ゆかり．“東京）普門館、解体前に恩返し的一般公開 11 月”．朝日新聞デジタル．2018-08-02．<https://www.asahi.com/articles/ASL814T4JL81ULPI01Z.html>, (参照 2019-01-07)．

¹⁹ “最後の普門館で合奏し隊”．Twitter．2018-08-03．<https://twitter.com/lastfumonkan/status/1025167745715920896>, (参照 2019-02-07)．

²⁰ “最後の普門館で合奏し隊”．Twitter．2018-08-06．<https://twitter.com/lastfumonkan/status/1026449914178359297>, (参照 2019-02-07)．

ラブ」と「宝島」が選ばれた¹⁷。その後、企画への参加のアンケートを実施し、約 80 名が参加を表明した¹⁷。

8 月の末には「最後の普門館で合奏し隊」のフォロワーが 100 を超えたが、その頃から、はたさきさんは、企画の運営に精神的な負担を感じるようになった。以下に、はたさきさんの書いたブログ記事を引用する¹⁷。

フォロワーが 100 を超えだすと、私の穴だらけの企画にご指摘くださる方もいらっしゃいました。豆腐メンタル（柔らかい豆腐のように精神面が脆いことの意）、かつ、このような企画モノを一度運営もしたことがない私にとって善意で忠告してくださった方のコメントもトゲが沢山ついて見えてしまい、一度 1 ヶ月ほど、twitter を見るのを止めた時期もありました。

しかし、8 月に私が初めてのツイートをした直後からサポートしてくださっていた運営の一人に助けられ、10 月にようやく再始動。1 ヶ月を切っていたこともあり、再始動の後、目標としていた参加者数 100 人に到達し、フォロワーも 250 人に増えていました

はたさきさんは、企画に対する他者からの指摘に「トゲが沢山ついて見えてしまい」、「一度 1 ヶ月ほど、twitter を見るのを止めた」そうである。一口に言ってしまうと、インターネットを介したコミュニケーションでのネガティブな経験であるが、「運営の一人」という Twitter 上で生まれた繋がりを持つ人に「助けられる」経験もそこにはある。

11 月 5 日以降は、「普門館からありがとう～吹奏楽の響きたちへ～」に参加し、普門館の大ホールで楽器を吹いた人々が、その体験の感想や、普門館への思いについてツイートをしている様子を観察できた。それらのツイートは、「吹奏楽部アカウント」やその他の吹奏楽愛好者たちによっていいねや、RT がされ、普門館を軸とした緩やかなオンラインコミュニティが出現させた。

このオンラインコミュニティで「最後の普門館で合奏し隊」は注目されていたようで、はたさきさんが企画の下見のために普門館を訪れた際、「最後の普門館で合奏し隊」で写真や動画を付与したツイートを複数回行くと、「普門館からありがとう～吹奏楽の響きたちへ～」の「レポ（レポートの略）」として、Twitter ユーザー間で RT によって拡散され、情報が共有された。また、11 月 9 日には「最後の普門館で合奏し隊」が、以下のようなツイートを行

っている²¹。

明日は入場規制がかかる可能性がありますので、運営が着き次第、状況をお伝えします。

#普門館からありがとう のタグでも状況が分かると思いますので、適宜ご確認ください。

それでは今日はゆっくりおやすみください(^ ^)

#ラスト普門館音楽隊

「#ラスト普門館音楽隊」のハッシュタグが付与されたツイートが、「最後の普門館で合奏し隊」企画当日の11月10日に逐次投稿され、企画参加者間のスムーズな情報共有を実現していた。上記のハッシュタグの使用方法は、第3章第3節で述べた実況に分類できるが、不特定多数に向けた実況だけでなく、特定の他者に向けた連絡事項の伝達という側面も持ち合わせている。

CMC 研究、特に Twitter に関する研究では、Twitter は情報を獲得するためのメディアか、それとも人々が交流するための SNS かという議論から、Twitter ユーザの Twitter 利用動機を、情報獲得と交流とで分けることが多い。しかし、上記のような「レポ」やハッシュタグ付きのツイートの場合は、「最後の普門館で合奏し隊」企画参加予定の人々が情報を得るために閲覧する場合もあれば、既に普門館を訪れた人々あるいは、普門館を訪れられない人々が、一連のハッシュタグ付きツイートの閲覧そのものを楽しむ場合もある。また、一連のハッシュタグ付きツイートを RT したり、ツイートにリプライしたりすることで、緩やかな繋がりが編まれていくとも言える。ゆえに、上記の場合、発信の動機についても、受信の動機についても、明確に情報獲得と交流の2つに分けることは困難であろう。

また、はたさきさんのブログ記事によると、11月に入った頃には、指揮者を含め6名の「最後の普門館で合奏し隊」運営者が揃い、Twitter の DM を通して、最終の打ち合わせを行っていたそうである¹⁷。その時の様子が、はたさきさんのブログ記事に、以下のように綴られている¹⁷。

²¹ 「最後の普門館で合奏し隊」。Twitter. 2018-11-09. <https://twitter.com/lastfumonkan/status/1060900463061622784>, (参照 2019-02-07).

みなさん匿名、顔も年齢も分からない状態でしたが、一心に 11/10(土)を心待ちに準備をしました。

… (中略) …

当日、DM で連絡を取りながら、全体集合より 1 時間半早く集合した運営チーム 6 名。東北からバスや新幹線に乗って来てくれた中学生と高校生、新潟からお越しくださった学校の先生など、みなさんこの日を心待ちにしていた熱いメンバーでした

「最後の普門館で合奏し隊」企画参加者たちは、普門館大ホールに滞在できる 30 分間を通して、「オーメンズ・オブ・ラブ」と「宝島」の合奏を無事にとり行った。「最後の普門館で合奏し隊」企画終了後について、はたさきさんは以下のようにブログ記事に記している¹⁷。

「私は、もしかしたら、
音楽が生まれる場所、音楽を通してコミュニティが生まれる空間
を作りたいのかもしれない」とふと思い立ちました。

… (中略) …

ふとした思いつきで始めた 8 月の tweet から新しいコミュニティが生まれ、フォロワーさんが繋がっていく。みんなで奏でられた一回限りの音楽とそれぞれの思い。
不思議な 3 ヶ月でしたが、私にとってはとても特別な 3 ヶ月でした

はたさきさんのブログ記事から、オフラインでの対面の繋がりを前提とした Twitter 上の繋がりが編まれつつも、Twitter 上でのみの繋がりの状態で、参加者 100 名という規模の企画が準備されたことが分かった。また、「音楽が生まれる場所、音楽を通してコミュニティが生まれる空間」を「ふとした思いつきで始めた 8 月の tweet から」作りあげられたことにも改めて着目すると、オンラインからオフラインへ、オフラインからオンラインへと繰り返す繋がりが浮かび上がってくる。はたさきさんの意図をはるかに超えた「フォロワーさんが繋がっていく」流れは、内と外を持たない緩やかなオンラインコミュニティを起点に、オフラインでの繋がりに至った後、夏イベ同様に、オフラインでの繋がりに至ると推察できる。そして、またオンラインからオフラインへ、オフラインからオンラインへと繰り返し繋がりは変化する。「音楽を通してコミュニティが生まれる空間」は、オンラインにもオフラインにも限定され得ないのである。そして、このことから、オンラインでの繋がりがオフラインでの繋がりに劣るものではなく、ま

たオフラインでの繋がりに代替されるものでもない、筆者は考察する。

第5章 吹奏楽部における繋がり

第3章と第4章では、「吹奏楽部アカウント」のオンラインコミュニティの様子や、その広がり方を記述してきた。本章では、「吹奏楽部アカウント」のバックグラウンドにある吹奏楽部に焦点を当て、吹奏楽部における繋がりを3つの観点から論じる。吹奏楽部に関する先行研究として、古川（2008）の研究に言及をしながら、吹奏楽部における繋がり进行分析する。

5.1 「体育会系」な繋がり

古川は、目上の者からのいじめやしごきを連想させる「体育会系」という言葉に嫌悪感を覚えつつも、「吹奏楽は体育会系」と言われることには納得してしまうという思いがあると述べている。筆者の Twitter 上の調査でも、「吹奏楽部は体育会系でしょ」というツイートや類似したツイートは数多く存在し、そのツイートに対する共感を示すリプライも見られた。「体育会系」な吹奏楽部というイメージは、長期に渡って存在し、2018年の時点でも顕在であると言える。

古川の研究では、古川自身の吹奏楽体験を「セルフ・エスノグラフィー」という形で分析し、さらにプロの演奏家に対するインタビューを行い、「体育会系」な吹奏楽部の「カルト性」を論じている²²。「体育会系」と、熱狂する集団としての「カルト」との共通点を考察する理由として、「学校吹奏楽に対する熱狂ぶりや、外に眼をやること無しに指導者の指導に盲目的に従う学校吹奏楽の体質などの諸特徴から、学校吹奏楽に対して一種のカルト集団のようなおいを感じたこと」（古川, 2008, p. 7）と、「体育会系」集団が伝統や風習として重んじている行為が一種のカルト集団の様相を呈していることから、「体育会系とカルト性の共通点を感じた」（古川, 2008, p. 8）ことを、古川は理由として挙げている。

古川の論文で取り上げられた「カルト性」は、以下に引用する3つの特徴を持っている。

- ①集団の排他性が見られること。
- ②集団が重視され、個人は封殺されること。

²² 古川の用いる「体育会系」は、特定の体育会（大学の運動系部活やサークルの連合団体）や、アスリートを指しているわけではなく、学校運動部の中に見られる集団の特質（古川, 2008, p. 64）を指している。また、古川の用いる「カルト性」は、反社会的な活動をする破壊的カルトの性質ではなく、一つのものに熱狂する集団の性質（古川, 2008, p. 88）を表している。本論文では、どちらの語も古川の使用方法に依拠するため、鍵括弧を付けて表す。

③閉鎖的で、外部性が存在しないこと。

集団が熱狂によって周囲と分断され、そこから外部性が無くなった時に、「カルト性」を帯びたものとなると古川は考えている。

古川の母校の吹奏楽部では、熱狂的「カルト性」をはらんだ活動は行われておらず、古川自身も「全ての吹奏楽部が上でカルト的と述べたような活動をしているわけではないし、むしろ多くの吹奏楽部ではここまでの活動はしていないだろう」（古川, 2008, p. 34）と述べている。しかし、テレビ番組や雑誌が注目するほどのスパルタ練習を行う強豪校以外の吹奏楽部も、「体育会系」と評されているのは事実である。筆者は、全ての吹奏楽部が「カルト性」を帯びるとは言えない反面、全ての吹奏楽部が全くもって「カルト性」とは無関係とも言えないと考える。

筆者が参与観察を行った D オケ指揮者の石井さんは、日本の吹奏楽というのは「ガラパゴス化」しており、「良くも悪くも独特」とであると語る。石井さんは、レナード・バーンスタインなどの著名な音楽家に師事し、世界各地のオーケストラで指揮者として活動を行っている。世界各地でクラシック音楽を探究してきた石井さんの目からは、日本の吹奏楽というのは「良くも悪くも独特」に見えるようだ。日本では「吹奏楽世界」という「閉じた世界」が出来上がり、「吹奏楽の世界で食っている人たちが」、「吹奏楽のためだけに曲を書く」という「利権が絡んでいる」状態になっていると、石井さんは指摘する。石井さんの指摘と古川の論を踏まえると、「集団の排他性が見られること」や「閉鎖的で、外部性が存在しないこと」というのは、それぞれの学校の部活動単位だけでなく、日本の「吹奏楽世界」という大きな視点でも当てはまると、筆者は考察する。

また、石井さんの語る「吹奏楽世界」を特徴づけるものは、コンクールだと筆者は考察する。石井さんは、吹奏楽部の活動について「怒鳴られてやる練習っておかしいよね。心削ってまでやるのって音楽なのかな？」と、コンクールに向けた練習への疑問を示し、「吹奏楽部は自己表現の場所になっていない」ことや、「音程や縦は正確だけど機械みたい」な演奏を行うことを批判的に語った。コンクールに対する批判的視点は、古川の論文でも大きく取り上げられている。コンクールは非音楽的であるという批判については、本項第 3 節で言及する。

吹奏楽部の活動において、石井さんが特に疑問を感じている点は、演奏者である生徒の「個性が尊重されない」点である。筆者が、吹奏楽部に所属する生徒たちについて、「自分にとって良い音楽を求めるといより、先生の求める音楽を戦々恐々としながらこなしているのではないのでしょうか」と、石井さんに提示したところ、石井さんは「それだと、先生の限界が、みんなの音楽の限界ってことになるよね」と語った。コンクールで良い成績を取

ることを念頭に置いた「個性が尊重されない」練習が行われるという点は、吹奏楽部の「集団が重視され、個人は封殺される」側面であると言える。

また、吹奏楽部では、コンクールに向けた練習以外にも「集団が重視され、個人は封殺されること」は起こりうる。ここからは、吹奏楽部の集団性に着目しつつ、C 中学校吹奏楽部の参与観察を元に考察を行う。筆者は、C 中学校吹奏楽部に対して「体育会系」のような熱狂的「カルト性」を、表面的には感じられなかった。顧問からの体罰などは一切なく、生徒たちも「先生を怖いとは思わない」という趣旨のことを語ってくれた。しかし、「集団が重視され、個人は封殺されること」が全く起こらないわけではない。吹奏楽部での集団が重視される状況として、3 年間を通して担当するはずの楽器を決定する場面が挙げられる。

学校が所有している楽器や入部した生徒数の兼ね合いで、部員全員の希望を叶える形で担当楽器を決めることは、しばしば困難になる。このような状況になった際、担当楽器を決めるためにオーディションを行う場合が多く、C 中学校吹奏楽部も例外ではない。また、オーディション以外でも、顧問の要請に従ってコンバート（担当楽器の変更）が行われることもある。C 中学校吹奏楽部では、顧問の要請によってクラリネット担当からオーボエ担当に変わった生徒がいた。オーボエ担当になった生徒は、「クラリネットもやりたいが、オーボエにも興味があった」という趣旨のことを語っており、嫌がっている生徒を無理にコンバートしたわけではないと言える。しかし、C 中学校吹奏楽部以外の吹奏楽部では、時として顧問や先輩からの強制力が働いた結果としてコンバートが行われることもある。調査用アカウントでフォローしている Twitter アカウントの中には、「なりたい楽器を担当できなかったから、吹奏楽部を辞めるか迷う」という悩みをツイートする者もいた。

吹奏楽部という集団として機能するために生徒個人のやりたいことが制限される状況は決して珍しくない。担当楽器の選択が必ずしも自由にできないという問題は、多くの吹奏楽部が抱えており、やむを得ない部分も多いが、吹奏楽部の「集団が重視され、個人は封殺される」側面であることに変わりはない。

コンクールを中心に形成される「吹奏楽世界」の排他的で閉鎖的な状況と、「集団が重視され、個人は封殺される」部活動の在りようから、吹奏楽部は「体育会系」な繋がりを持つ集団というイメージが形成されると、筆者は考察する。

5.2 「人間的に成長する」ための繋がり

日本における吹奏楽は、他の種類の音楽と違い、部活動と強く結びついていることを、古川（2008）は指摘している。以下に、古川（2008, p. 9-17）の論文からの引用を示す。

全日本吹奏楽連盟に加盟する高校は全国で 3781 団体（2007 年 10 月 1 日現在）であ

るが、運動部と比較してみると、陸上部、バスケットボール部、バレーボール部といったメジャーな部活動が 4000 団体前後（財団法人全国高等学校体育連盟平成 19 年度加盟登録状況による）であることから、それらの運動部と同じくらいの吹奏楽部が存在することが伺える。しかしそれらの運動部も、一つのスポーツ、競技として考えた時は、特に吹奏楽部のように学校の課外活動というイメージが強いわけではない。

…（中略）…

吹奏楽は聴取や鑑賞の面でもポピュラー音楽やクラシック音楽といった他の音楽とは異なった特徴を持っている。まず吹奏楽では、鑑賞という意味で純粋に音楽として吹奏楽を聴くという行為が他の音楽に比べて少ないと考えられる。

…（中略）…

吹奏楽関係者は資料として、又は自分の過去の演奏を懐かしむ為に吹奏楽を聴いている。一般の聴衆は吹奏楽に青春の物語や吹奏楽ではない音楽を求める。

…（中略）…

吹奏楽は音楽である。しかし、コンクールでの勝利を求める姿勢や体育会系的な練習方法…（中略）…といったような、音楽とはかけ離れた特徴が多過ぎる。そこには学校の課外活動のイメージという言葉だけでは片付けられない要素が数多くあるのではないだろうか

古川は、「コンクールでの勝利を求める姿勢や体育会系的な練習方法…（中略）…といったような、音楽とはかけ離れた特徴」を挙げて、音楽としての吹奏楽との乖離に言及し、「一般の聴衆は吹奏楽に青春の物語や吹奏楽ではない音楽を求める」と述べているが、これは、本稿第 3 章第 2 項で論じたことにも通じている。本稿第 3 章第 2 項では、「吹奏楽部アカウント」と「吹奏楽アカウント」の相違を考察し、吹奏楽と吹奏楽部の切っても切り離せない強い結びつきに言及した。上記の結びつきを古川の論を踏まえて考察すると、一般聴衆の中にも、現役の吹奏楽部員たちの中にも、「吹奏楽に青春の物語や吹奏楽ではない音楽を求める」者は存在し、その存在が非常に目立っているとも言える。

古川の言う「青春の物語」とは、部活動中の厳しい練習や人間関係のもつれなどの困難を、中高生たちが劇的に乗り越えていく様子を指すと考えられる。そのような「青春の物語」は、フィクション作品でもノンフィクション作品でも、テレビ番組などで取り上げられることが多く、3 年間にわたって頑張る部活動だからこその輝きとして世間一般に浸透している²³。

²³ 日本テレビ．“プレスリリース@日テレ”．日本テレビ．2005-06-01．<http://www.ntv.co.jp/info/news/229.html>, (参照 2018-12-14).

バラエティ番組「1億人の大質問！？笑ってコラえて！」²⁴内の「日本列島吹奏楽の旅」というコーナーは、吹奏楽部における「青春の物語」を取り扱ったコンテンツの代表とも言える。「日本列島吹奏楽の旅」は、2004年にスタートした後、番組におけるメインコーナーとして取り扱われるほどの人気を博し、吹奏楽部に注目が集まるきっかけの一つになったと考えられている（例えば、吉井ら, 2010）。古川は、「日本列島吹奏楽の旅」に対して、「放送された演奏も編集・抜粋されたものであり、さらに言えば本人はその演奏された音楽に感動しているつもりでも、それはその演奏の背景としてそれまで放送されてきた厳しい練習や様々なドラマに対する感情移入に由来するものであると考えられる。これらは全て吹奏楽という音楽の外側にあるもので、本来吹奏楽とは全く関係が無いことであるはずだ」（古川, 2008, p. 13）と考察している。

ここまで古川の主張を追ってきたが、ここからは、実際に「日本列島吹奏楽の旅」で吹奏楽部関係者がどのように吹奏楽部を捉えているのかも見ていく。「日本列島吹奏楽の旅 SP 2005」²⁵では、2005年当時、福井県立武生東高等学校の吹奏楽部顧問である植田さんが、吹奏楽部員たちに対して、演奏だけでなく、宿題の提出期限厳守や、返事の仕方などについても厳しい言葉をかけ、「やるべきことをやらない者には部活動をさせない」と叱咤していた。植田さんは「日本列島吹奏楽の旅 SP 2005」の中で、以下のように語っている²⁵。

音楽だけをやるバンドじゃなくて音楽を通して人間的に成長する事こそが目標だというのを生徒が本当にわかっている
本当にすごいなと思いますね

植田さんの指導や語りからは、古川が「音楽の外側にあるもので、本来吹奏楽とは全く関係が無いこと」としたものを、非常に肯定的に捉えていることが分かる。B 高校吹奏楽部顧問の長谷川さんは、インタビューにおいて「同年代の子たちとの人間関係を学べる場だから、部活動にはやっぱりちゃんと参加してほしい」という趣旨のことを語った。教師である植田さんや長谷川さんは、部活動を教育的な意義が強いものと考えているのだろう。

そもそも吹奏楽部は、音楽のプロフェッショナルを養成する機関ではない。植田さんの語るように「人間的に成長する事こそが目標」と、吹奏楽部関係者たちが考えることはごく自

²⁴ 日本テレビ. “1億人の大質問！？笑ってコラえて！”. 1億人の大質問！？笑ってコラえて！. <http://www.ntv.co.jp/warakora/>, (参照 2019-01-10).

²⁵ 日本テレビ. 1億人の大質問！？笑ってコラえて！ : 日本列島吹奏楽の旅 SP 2005. 2005.

然であり、また、「人間的に成長する事」に重きを置いて活動するのは、吹奏楽部以外の部活動にも当てはまると考えられる。古川が批判した吹奏楽部の非音楽的側面というのは、学校教育の意義を生み出している側面であるとも捉えられる。

しかし、「人間的に成長する事」を目指す過程で、古川の指摘するような「集団が重視され、個人は封殺されること」がしばしば発生すると考えられる。時として、過度に集団を重視する「カルト性」を帯びた「体育会系」な吹奏楽部が形成されることもまた事実である。

5.3 音楽的な繋がり

前項では、古川（2008）の論を踏まえながら吹奏楽部の非音楽的部分について言及したが、本項では、そもそも「音楽的」であることと「人間的に成長する事」は切り離せるのかを考察する。つまり、前項での議論を覆す可能性を探っていく。まず、音楽的とは何かを考える上で、D オケでの合奏練習の一場面を取り上げる。

12月の演奏会に向けた合奏練習中に、D オケ指揮者の石井さんから「スタッカートとは、そもそも何であろうか」という問いが、演奏者である子どもたちに投げかけられた。石井さんは「音楽の授業ではやらないような、大学の講義のようなことをやるから、つまらないかもしれないけど」と断りをいれつつ、D オケのメンバーに対して、非常に丁寧に理論的な楽譜の読み方を説明した。その説明は、バロックの時代に用いられたスタッカートには、丸型、楔型、縦線型の3種類があるが、これらはどのように違うのかという非常に高度なものであった。

D オケの合奏練習において特に重要視されていたのは、音楽的であることだ。スタッカートに限らず、フェルマータなども「尺で考えるのは非音楽的」と石井さんは注意を促した。石井さんは「オープンに、自由に、生きた音楽をする」上で、「理論的な楽譜の読み方は重要」とD オケのメンバーに語りかけ、理論的に楽譜を読めることによって、「みんなで共通認識を持って演奏できる」と説明した。石井さんの指導から、理論と実践の融合によって音楽的に高度な演奏をメンバーと協力して行うことができると考えられる。

D オケは、「世界水準の音楽家を輩出する地域を創りあげることに寄与する」という目的で設立されたという側面を持つため、上記のような音楽的に高度な指導を、音楽のプロフェッショナルから受けられると言えるだろう。しかし、D オケは、音楽のプロフェッショナルを養成するためだけでなく、音楽を通して、豊かな感性で次代を担う子どもたちの育成に貢献するという目的も持っている。また、D オケは、演奏する仲間との信頼関係が不可欠となるものとしてオーケストラを捉え、他者を思いやれる子どもを育む機会となることを望んでいる。つまり、D オケは「音楽を通した教育」を目指しており、前項で提示された「音楽の外側にある教育」とは異なった考え方を持っていると言える。

D オケは音楽的な繋がりを重要視していることから、植田さんの言う「音楽だけをやる

バンド」であるとも言える。では、D オケは「人間的に成長する事」が目標ではないのかと言うと、そうではないことも上記のことから明らかである。音楽を通して感性を育むことも、演奏を通して仲間との信頼関係を築くこともできるからこそ、学校教育の 1 つに音楽という教科が組み込まれているとも言える。音楽には「人間的に成長する事」が一切含まれていないのであれば、音楽という教科を学校で習う意味はないという矛盾が生じる。このような音楽と教育的意義に関する矛盾をはらんだ議論は、コンクールへの非音楽的であるという批判に引き付けて考えることも可能である。

古川は、プロのオーケストラ団員を務めた経験と、コンクールで審査員を行った経験のある A 氏に、半構造化インタビューを行っている。A 氏は、コンクールの全国大会出場校の演奏を CD で聴いた際の感想として、「ちょっと、異様な上手さだった。今でもありますよね。それが、何故かって言うと、そういう体育会系のそういう、何か指導方法って言うか、あの一、それこそ精神世界からきてんのかなって（笑）（中略）何か非常に、返って不自然さを感じちゃったんだよね。これがほんとの音楽かなあって」（古川, 2008, p. 40-41）と述べている。また、A 氏は「日本列島吹奏楽の旅」を視聴したことがあり、ある高校の指導場面对して「人権侵害にあたるんじゃないか」（古川, 2008, p. 47）と述べている。

「日本列島吹奏楽の旅 SP 2005」において、2005 年当時、柏市立柏高等学校が全国大会において銀賞を獲得したが、金賞ではなかったことに対して生徒たちが悔し涙を流す場面があった²⁵。その場面で、ソロ演奏を担当した生徒に対して、当時の柏市立柏高等学校吹奏楽部顧問である石田さんは、「努力っていいもんだろ」、「会場のお客さんがあんだけ喜んでくれたんだから」と語りかけた²⁵。その後、石田さんは「また今日から頑張るんだよ」、「まだ演奏会どんどん続きます」と、柏市立柏高等学校吹奏楽部のメンバーに語りかけた²⁵。また、「日本列島吹奏楽の旅 SP 2005」で、福井県立武生東高等学校吹奏楽部の 2005 年当時の部長は、コンクール全国大会で銅賞を獲得した後、部員に向けて以下のように語る場面があった²⁵。

僕たちが今までで最高の演奏をして今までに一番楽しい演奏をすれば誰が文句をつくれるでしょうか
ねえ
それでいいじゃないですか！
これからいい音楽目指して頑張っていきましょう！！

石田さんから生徒たちへの語りかけや、福井県立武生東高等学校吹奏楽部の 2005 年当時の

部長から部員たちへの語りかけを見ると、吹奏楽部が盲目的にコンクールでの勝利のみを追いかける集団であるとは、必ずしも言い切れないと考えられる。また、コンクールに挑戦する吹奏楽部という集団に対して、コンクールを通じた音楽的経験によって「人間的に成長」し、強い繋がりを獲得できる集団であるとも捉えられる。

田口（2012）は、普門館が「吹奏楽の甲子園」として扱われることから、古川と同様に、コンクールは「青春の物語」の文脈に位置づけられていると述べている。しかし、田口（2012, p. 287）は以下のように普門館を巡る「物語」を考察している。

普門館を巡る『物語』について考察することでわかるのは、音楽とは関係のない実践が、音楽を実践、あるいは受容する上で、音楽理解の一部となっていることである。…（中略）…日常生活における非音楽的な実践がよりよい音楽を産出するための条件となり、また、事実よいものとされた音楽を実現できたことの原因に非音楽的实践が結びつけられている

以上を踏まえて、改めて古川の論に言及を行う。古川はインタビュー調査の結果などから、「体育会系」で「カルト性」を帯びた吹奏楽部は非音楽的であると論じている。本章第1節では、吹奏楽部の「体育会系」な繋がりについて、第2節では、「人間的に成長する事」を目指す教育的意義を持つ吹奏楽部について、吹奏楽部は非音楽的であるという古川の主張を否定しきらずに論を展開していった。そこで、本節では、第1節と第2節とを再検討し、矛盾点を指摘する。

過度に集団を重視する「カルト性」を帯びた「体育会系」な側面があることを理由に、吹奏楽部を音楽ではないと結論付けることに対してイデオロギー的であると、筆者は考える。古川の用いる「音楽の外側」という言葉からは、純粋な音楽を想定した上で、そうでない部分を「外側」と捉えていることがうかがえる。しかし、吹奏楽部の「青春の物語」も、それに対する感動も、音楽を通じた経験であることには変わりなく、音楽であるか否かを誰かが裁定することは困難なのではないかと筆者は主張する。人権侵害にあたるような行為が部活動を通して行われることを、「カルト性」を帯びた「体育会系」な側面として批判する古川の姿勢は重要であるが、何が音楽で何が音楽でないかを取り決めることはできないと筆者は考える。

日本の吹奏楽部は、コンクールでの勝利を追いかけるという競技的な側面があり、独特の規範を持ち、時として「カルト性」を帯びた「体育会系」な集団となりうるが、その集団それぞれが思い描く「吹奏楽」を通して音楽的な繋がりを持っていると、筆者は主張する。

そして、その音楽的な繋がりとは、Twitterなどのソーシャルメディアによって拡張されているのである。第4章第3節で述べたように、「音楽を通してコミュニティが生まれる空間」はオンラインにもオフラインにも限定され得ない。吹奏楽部員たちが「吹奏楽部アカウント」によってTwitter上で繋がるという行為は、スモール（2011）の言うところの「ミュージッキング」に当てはまると筆者は考える。ミュージッキングは、ミュージックの動詞化を図っている。つまり、音楽をモノではなく行為と捉える概念であり、作曲者や演奏者以外にも、コンサートホールでチケットをもぎる人や、会場の掃除を行う人々や、それらの行為をも包含する。

吹奏楽部は音楽的な繋がりを持つ集団であり、音楽的な集団に所属している吹奏楽部員たちは、Twitter上でさらに音楽的な繋がりを経験しているのである。これらの行為は、ミュージッキングとして解釈でき、「カルト性」を帯びた「体育会系」な集団が「非音楽的吹奏楽」を信奉しているという構図から脱する機会となりうると、筆者は考察する。

第6章 既存の人間関係と Twitter

第5章では、吹奏楽部という集団がどのような繋がりを持っているかについて言及したが、本章ではそれを踏まえて、吹奏楽部員が学校などで築いてきた既存の人間関係と Twitter 利用について言及する。

第1節では、ボイド (2014) の言うところの「人気と地位をめぐるティーンの闘い」において、Twitter が活用されている様子を記述する。第2節では、Twitter を用いた「闘い」が有効である可能性を示唆するため、人々の振る舞いに対する「イメージ」が「*Twitter* の影響」によって変化することを論じる。第3節では、どのように戦略的なツイートが行われているのかを具体的に描写する。

6.1 スクールカーストと「吹奏楽部アカウント」

北村 (2016, p. 10) は、初期のコンピュータネットワークの利用行動研究では、これまでの地縁や血縁などの社会属性を共有する縁とは異なる「情報縁」が強調されていたが (池田編, 1997)、インターネットが社会に定着した現在では、社会的属性を共有する縁でのコミュニケーションを補完する役割を、インターネットが担うようになってしていると述べている。また、昨今 Twitter は、知らない人々との関係の構築以上に、オフラインの既存の人間関係を補強する役割を担っていると考えられている (北村ら, 2016; 高谷, 2017)。

Twitter が担う既存の人間関係の補強の役割という視点から、吹奏楽部員たちの学校における繋がりなどを考慮にいれ、吹奏楽部員たちの Twitter 利用を分析する。そこで、吹奏楽部とそれ以外の部活動の関係について見ていく。

近年、行き過ぎた部活動の是正が活発になってきているが、その主軸は運動部であり、文化部への言及は乏しい (中澤, 2017)。そのような状況に対し、「吹奏楽部も運動部同様、長時間におよぶ練習、厳しい上下関係などの問題を抱えている」という声があがった。また、吹奏楽部は「文化系最凶のブラック部活」というインターネット記事²⁶ が書かれ、Twitter 上でも様々な意見のツイートが飛び交い、議論が巻き起こった。「ブラック部活 (動)」とは、教師または生徒、あるいは双方にとって多大な負担となる過酷な部活動の呼称である。関 (2017) は、運動部活動における顧問教師の過重負担や勝利至上主義などの諸問題とされているものは、運動部に限らず文化部にも存在する問題だと指摘している。

「吹奏楽部アカウント」からも、「吹奏楽部は運動部と同じくらい大変なことを理解してほしい」という趣旨の主張が、色々な形でツイートされた。第5章でも述べたような、吹奏

²⁶ 串森シャモ. “文化系最凶? 吹奏楽部のブラック部活で「何度も倒れた」「楽器カーストも」”. 日刊 SPA!. 2018-06-08. <https://nikkan-spa.jp/1483569>, (参照 2018-06-24).

楽部の「体育会系」な側面について、「吹奏楽部アカウント」のツイートは、様々な具体例を提示していた。「吹奏楽部アカウント」のツイートをつぶさに見ていくと、中高生たちの主張の裏側には「吹奏楽部を馬鹿にしないで」という願いがあることが分かった。「運動部の子に、楽器吹くだけとか楽で良いよねって言われてムカついた」や、「吹奏楽部男子バカにするとかほんまありえん。運動部男子よりもかっこいいと思うんだけど。陰キャ（陰気なキャラクターの略）言うな」というツイートから、吹奏楽部員の抱えている不満が見えてくる。また、「吹奏楽部は楽器吹くの筋肉使ってるから運動部じゃん」というツイートから、「運動部とは違って、楽をしている文化部」と一緒にしないでほしいという考えも見ることができた。その一方で、「文化部だろうが運動部だろうが、どの部活にもそれぞれ良いところがある」や「吹部と運動部のキツさ比べやめようよ」などと反発する吹奏楽部員のツイートもあった。このことから「部活動によって上下関係を決めることがそもそもおかしい」という主張が、Twitterを通して行われていると分かった。

現役吹奏楽部員たちの学校生活を、ツイートを通して垣間見ることができたが、ここで根本的な部分に立ち返って考察を行う。楽ではない運動部は良いが、楽をしている文化部は悪いというような上下関係は、校則のような明文化された状態では存在していない。それにもかかわらず、「吹奏楽部を馬鹿にしないで」ほしいがために、吹奏楽部を楽な文化部と見なされたくない者がいる。

C 中学校吹奏楽部での参与観察中に行ったインフォーマルな形式でのインタビューで、1年生女子の田中さんは、運動部と吹奏楽部の関係を以下のように語った。

制服で（学校に設置されている）ウォータークーラー使うとすごい目で見られる。『運動部じゃないのに何で水飲んでんの？』みたいな。吹奏楽部だって筋トレしてんのに。運動部の先輩とかすごい腕んできて怖い。金曜は筋トレの日で体操服着てるから吹奏楽部ってバレなければ、ウォータークーラー使っても大丈夫。でも楽器の話とかしてたらバレるから白い目で見られる

また、吹奏楽部顧問の長谷川さんは、インタビューにおいて以下のように語った。

運動部は一日中部活するのは危険だから（…中略…）吹奏楽部とはちょっと違う。（…中略…）ゆるゆるやってる運動部はあまりないけど、文化部はゆるゆるやって日陰って感じで……、蔑称としての『文化部』もなんとなく分かる

関（2017）は、部活動を運動部と文化部に分類することに疑問を投げかけ、これまでの部活動のダイコトミーを批判的に検討した。関は先行研究の検討を通して、日本では、研究者による運動部と文化部の操作的分類であれ、被験者による判別分類であれ、「運動部と文化部には違いがあること」と「運動部所属は文化部所属よりもポジティブな影響があること」という運動部と文化部をダイコトミーとして志向する伝統的な部活動観が存在していることを示唆している。これは、田中さんと長谷川さんの語りにも通じるものがある。

関の先行研究と本調査の結果から、文化部を運動部と比較して劣っていると見なす学校が存在すると推察できる。運動部より文化部は劣っているとする考えは、「スクールカースト」が抱える問題に通ずる。スクールカーストとは、現代日本の学校、特に中学・高校における同学年の生徒集団内で発生する序列を、インドの伝統的な身分制度を表す英語“caste”²⁷になぞらえて表現したものである。スクールカーストは、もともとインターネット上で誕生した言葉と推測され、学術的な用語ではない（鈴木, 2012）が、2000年代からいじめ問題を議論する文脈で使用され始めた²⁸。初めて「スクールカースト」を紙面上で大きく取り扱ったのは、森口（2007）だと言われている（鈴木, 2012）。その際、森口（2007, p.41-42）はスクールカーストを、いじめの構造を理解するための概念として紹介し、以下のように定義した。

スクールカーストとは、クラス内のステイタスを表す言葉として、近年若者たちの間で定着しつつある言葉です。従来と異なるのは、ステイタスの決定要因が、人気やモテるか否かという点であることです。上位から「一軍・二軍・三軍」「A・B・C」などと呼ばれます

上記のように、スクールカーストは、いじめ問題に付随するものとして取り扱われていたが、鈴木（2012）は、スクールカーストの存在そのものを問題視し、いじめの文脈から外してスクールカースト研究を行った。その際、鈴木はスクールカーストを「同学年の児童・生徒間で共有される『地位の差』」と定義した。スクールカースト下位の生徒は、いじめにあいや

²⁷ 小谷汪之. “カースト”. 日本大百科全書 5. 相賀徹夫編. 小学館, 1985, p. 249- 250.

²⁸ 衆議院. “第 165 回国会 青少年問題に関する特別委員会 第 3 号（平成 18 年 11 月 16 日（木曜日））”. 衆議院. 2006, 16511160073003, p. 7-8. <http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugiin/165/0073/16511160073003.pdf>, (参照 2019-01-09).

すくなったり、いじめにあわなくとも自信を失うことで学校生活への適応が難しくなったりすることを、鈴木は特に問題視している。

文化部であっても吹奏楽部は楽ではないと主張することにより、楽な文化部よりも上の「地位」を得られる可能性がある。関（2017）は、『吹奏楽部は運動部（体育会系）』と認識されることに嬉しさを感じている学生が実に多くいた」（p. 13）と、関が勤務する大学の吹奏楽部経験者たちについて述べている。また、第5章で言及したように、古川（2008）の言う「体育会系」の厳しさが吹奏楽部にもあり、そして、それを根拠に運動部と同等あるいは、それ以上の優位性が吹奏楽部にはあると主張する者の存在が、先述の通り、Twitterを通して確認できた。

これらのことから、中高生の中には、スクールカースト的価値観の中で自身や、自身の所属する集団の立場性を意識し続けながら学校生活を送る者がいると推察できる。また、吹奏楽部は楽ではないという主張をオフラインに留めずに、ツイートとしてオンライン上で発信する行為には、吹奏楽部という集団のスクールカーストの向上を図る側面があると、筆者は考察する。

「吹奏楽部アカウント」が発する主張を踏まえて、以下のボイド（2014, p. 232-233）の論を見てみる。

ソーシャルメディアサービスは人気と地位をめぐるティーンの闘いにおいて、大きな役割を果たしている。それは情報の拡散を容易にし、ティーンが常に変化し続ける学校の力学についていくことを可能にする。…（中略）…フェイスブックのようなツールは、ティーンがクラスメイトの誕生日、別れや仲直り、社会的儀礼に伴う冒険の情報を知り、互いに会話を交わして助けの手を差し伸べるのをやりやすくする。それと同時に、そこで共有され容易にアクセスできるものが常に有益とは限らない。ソーシャルメディアによって情報を広く共有するのが簡単になり、人々は有害なゴシップを自分の地位を高めたり注目を集めたりするために、もしくは退屈しのぎに簡単に広めてしまう。こうした力学はしばしば絡み合っている

ボイドが想定しているのは「有害なゴシップ」を用いて学校での地位を高めたり注目を集めたりすることだが、「吹奏楽部を馬鹿にしないで」というスクールカーストへの抗いは、必ずしも「有害なゴシップ」には当てはまらない。「ソーシャルメディアサービスは人気と地位をめぐるティーンの闘いにおいて、大きな役割を果たしている」と言えるが、他人のプライバシーを侵害し、嘲笑するような行為だけが、「闘い」ではないと、筆者は考える。

しかし、吹奏楽部は楽ではないという主張と、「吹奏楽部を馬鹿にしないで」という主張が結びつくことによって、楽であると周囲から見なされている部活動に所属する者を、馬鹿にしても良いという考えが、学校に根付く危険性をはらんでいる。A 中学校野球部に所属する堂本さん（中学2年生男子）は、インタビューにおいて「部活動問わずクラスの皆が仲良い」と言いつつも、特定の文化部（吹奏楽部は含まれていない）に対して、「（仲良くすることが）ちょっと難しい」と、堂本さん自身も言語化しきれないような関わりづらさを語った。堂本さんの語りから、学校における吹奏楽部以外の文化部の立場性も考慮する必要があると言える。

さらに、「文化部は下」というスクールカースト的価値観から逃れるためには、第5章で言及した「体育会系」な吹奏楽部の「カルト性」に依拠してしまい、「体育会系」な吹奏楽部の「カルト性」から逃れた先には、「文化部は下」というスクールカースト的価値観が待ち構えているという構図にも注意を払う必要がある。

また、吹奏楽部員同士であっても楽器間の格差が存在する。先述の吹奏楽部は「文化系最凶のブラック部活」だというインターネット記事¹³には、以下のようなインタビューが掲載されていた。

アメフトの監督やコーチみたいに、吹部では顧問や指揮者の言うことは絶対。先輩後輩の上下関係も厳しかったです。あと、吹奏楽はたくさんの楽器を使います。おおまかに分けると『金管』『木管』『打楽器』の3種類。そのなかで『クラリネット』『サクソ』『パーカッション』など楽器ごとにパートがあります。ふだん吹部はそのパートごとに行動するのですが、パート内の上下関係やパート間格差もありました。自分は『ユーフォニアム』という地味な低音系の楽器だったので、ほかのパートがうらやましかったこともありました。『フルート』とか、華やかな楽器はやっぱりモテてましたしね（笑）。それでも当時は『パーカッションよりはモテるはず』という、目クソ鼻クソ的な“吹奏楽カースト”に囚われていました（笑）

「吹奏楽部アカウント」でも、「小楽器（小物打楽器）は誰でもできるって思われがちだけど、いい音を追求するのは1日2日じゃできない。力の細かい入れ具合や叩く場所で音が変わる。だから誰でもできるとか言わないでほしい☹️」や、「自分の楽器の他に楽器がないと吹奏楽って成り立たないと思う。陰ながら支えてくれる低音パートを馬鹿にするのはマジ怒った。低音がいるから高音は思いっきり吹けるのに！」など、特定の楽器やパートを馬鹿にすることへの苦言を呈するツイートが見受けられた。

以上の調査結果から、Twitter を通したオフラインへのアプローチについて考察する。同じ学校の同じ吹奏楽部の仲間たちの間で、スクールカーストへの抗いや、脱スクールカースト的価値観を表明することは、先行研究で述べられた既存の人間関係の補強に当てはまる。しかし、「吹奏楽部アカウント」は、Twitter 上で「リア友」を含む様々な人々との繋がりを持っている。そのため、既存の人間関係の補強と異なった側面も存在すると考えられる。ここで取り上げたツイートから、Twitter 上で、既存の人間関係を維持するだけではなく、意見の衝突や他者との関係に大きな変化が起こりうるような問題提起を行っていると言える。Twitter を利用する吹奏楽部員の中には、学校における既存の人間関係、つまりスクールカースト的価値観に支配された人間関係への問題提起を行う者もいると、筆者は考察する。特に、「地味な低音系の楽器」や「誰でもできるって思われがち」な楽器の奏者は、吹奏楽部の中でも肩身の狭い思いをする傾向にあるため、Twitter を活用し、声を上げることでエンパワーメントを図っているとも言える。また、上記と同様のことが、女子生徒の多い吹奏楽部における「吹奏楽部男子」にも当てはまると推察できる。

6.2 「Twitter の影響」を受ける「イメージ」

前項では、既存の人間関係を能動的に捉えなおし、Twitter を通してオフラインへアプローチする吹奏楽部員たちに言及したが、本項では、「Twitter の影響」を受けたことによって既存の人間関係への「イメージ」が変化していった Twitter ユーザに注目する。そこで、本項では、中高生時代に吹奏楽部に所属し、中学校ではチューバ、高校ではコントラバスを担当したエモトさん（20 代・女性）のインタビューを取り上げる。先述した通り、インタビューデータを引用する際は、すべて斜体で記す。また、協力者の発言と調査者である筆者の発言を区別するため、筆者の発言には傍線（——：）を付与する。

エモトさんへのインタビューは、筆者が大学 4 年生の時に、卒業研究のために行ったものであり、インタビューデータは 2016 年に得たものである。筆者の卒業研究ではスクールカーストを取り扱っていたため、2016 年のインタビューデータではあるが、本論文においても非常に有益であると判断し、エモトさんに承諾を得て、改めて分析と考察を行った。

インタビュー当時も 2019 年 1 月の時点でも、エモトさんは「吹奏楽部アカウント」は持っていないが、オフラインの友人知人と繋がるための「リア垢（垢は、アカウントを意味している）」では、中高生時分に吹奏楽部と一緒に活動していた人々との繋がりを持っている。また、エモトさんは「アカ分け」を行っており、マンガやアニメの情報を収集したり、マンガやアニメのファンたちと交流したりするために、エモトさんなりの基準で細分化した複数の「趣味用アカウント」を持っている。

インタビュー当時エモトさんは、兵庫県の芸術系大学に在籍していた。エモトさんは、共学かつ公立の小学校・中学校・高校に通い、大学ではアニメーション制作の技術を中心に学

び、2019 年現在はアニメーション制作関係の職に就いている。居住地域の特性上、幼稚園からの顔見知りがほとんどという中で、エモトさんは小・中学生時代を過ごした。エモトさんの特技は 5 歳から中学生ころまで習っていたダンスで、大学ではダンスサークルに入っていたが、サークルの雰囲気が自分に合わないと感じて辞めたそうである。

インタビュー当時大学生のエモトさんに、芸術系大学への進学を考えたのはいつ頃かと質問すると、エモトさんは「中学の時も思ってたかもしれないけど、結構悩んで高校、高3 ちゃうな、高2 の終わりくらいにあーもうやっぱ自分の好きな道に進みたいなと思って…。完全に決めたんやったかな」と語った。また、エモトさんに中高生の時に美術部に入部しなかった理由を聞いたところ、中学校に入学当初は候補として考えていたが小学校から仲良くしていたエモトさんの友人達の多くが吹奏楽部に入部を希望していたこと、エモトさんのいとも吹奏楽部に所属していること、エモトさんはステージに立つことが好きということの 3 点から吹奏楽部に入部し、高校では「カッコいい先輩」との出会いがきっかけとなり、高校でも美術部ではなく吹奏楽部に入部したという。

エモトさんは、自分自身について他人からの評価に流されずに行動することに重きを置いていると語った。しかし、全く他人からの評価を気にしないわけではない。小学校時代から「苦手なタイプの人」はいたが、大学生になってから「オタク」をめぐる葛藤が激しくなったと言う。以下に、エモトさんの語りを引用する。

うち、なんやろ、かなりの……オタク、だからさ……。オタクやから……って、んーなんか、いまだにこの思考持ってるのかって思うと悲しくなんねんけどもさ。なんかそういうリア充系の人たちからしたらさ……。なんか、オタク……。オタクなんかちょっと…。下やなみたいな感じに思ってたたりもするんかなっていう。

… (中略) …

——：リア充系の人たちって定義が難しいけど、たぶんその、恋人のいるいないとかじゃなくって、とりあえず華やかかってことやんな？

うんうん。

「リア充」とは、リアル（実生活）が充実している人々のことを指す俗称である。エモトさんは、自身のことを「オタク」だと考えており、「リア充系の人たち」とエモトさん自身とを切り分けて考え、「リア充系の人たち」が「オタク」を「下やなみたいな感じに思ってたたりもするんかな」と推測している。

エモトさんは、小学生の時から同級生たちを、「はっちゃけてる人」、「穏やかでオタク趣

味がない人」、「オタク」の3つのグループに分けて考えていたと語った。このグループ分けは、中学校に入ってさらに強化されたという。エモトさんには、「小学校のころ仲良かったけど、中学入ってからタイプの的に切れるなーって」と思った同級生が何名かいたそうである。また、エモトさんは、小学校時代から中学校時代にかけて、エモトさんの同級生たちが使用する「オタク」という言葉に蔑称としての意味が込められていることを、少なからず感じていた。これらのエモトさんの経験から、上記の「リア充系の人たち」が「オタク」を「下やなみたいな感じに思ってたりもするのかな」という推測に至っていると、筆者は考察する。

上記のエモトさんによる推測とともに「オタク」をめぐる葛藤が激しくなったのは、先述した通り、エモトさんが大学生になってからである。エモトさんは、大学に入ってから使用を開始した Twitter の「影響」について、以下のように語った。

んーなんやろなあ、うちもさあ、いや、ひねくれとるからさ、あんまりそういうはっちゃけたのをさ、好きじゃないねんやんか。うーん……なんか、うんでもね、うち、なんなんやろな……。結構 Twitter の影響を受けてんのかもなあ。

…（中略）…

申し訳ないなあ、ほんとなんでこうゆうイメージがついてしまったのかなあ。でも……絶対下にはさ、見られて……見られてるわけじゃないとも思うねんけどさ。でも……なんかね、釣りやけどもさ、なんか Twitter でオタクたちがキモイやらなんやらさ、なんやらかんやら言われてたりするからさあ、なんなんやこいつはとさ、うちは思ってしまったねんやんか。

——：それは大学に入ってから強くなった感じ？

んー、なんかすごくリア充苦手、リア充って言い方アレやけどそういう苦手意識が強くなってしまったっていうか……。

——：あー。

まあたぶんね今の環境がさ、そういうタイプの人がさ、あんまりいないからっていうのもあんねんけどもさ。

…（中略）…

だから、うち、あの大学では、ファッションがすごい、ファッション学科がすごい苦手やねんやんか。

「釣り」とは、インターネット上で、誤まった情報や作り話などで他者からの注目を集める行為である。エモトさんは、「釣り」を考慮しつつも、「Twitter でオタクたちがキモイやら

なんやらさ、なんやらかんやら言われてたりする」ことに心を痛めている。そして、エモトさんは、「オタク」を「キモイ」と見下すようなツイートをする人々を、「リア充」であると仮定し、さらにエモトさんにとって身近な「リア充」として「ファッション学科」の人々を仮定して、「ファッション学科がすごい苦手」と感じている。

しかし、現在、エモトさんの周囲に「見下すようなタイプはあんまない」状態であるとも、エモトさんは語る。

——：見下されてるって思ったときって隠す？その、自分の素性とか、私はオタクじゃないよって隠すのか、それとも、なんか、どうぞ見下してください！みたいな感じなのか……。

いや、ちゃうねん。なんか、あの一、正直言ってうちの周りにそういうタイプは、見下すようなタイプはあんまないと思うねんやんか。いないと思うけど、一般的なそういう……ギャル系っていうかリア充系っていうかはっちゃけてるタイプの人たちを、特定の人……、うち、その……に会ったわけじゃないから、一般的なそういう人たちを、嫌ってるだけで。

つまり、エモトさんは、過去から現在にかけて近しい「特定の人」が「オタク」を「見下してる」状態を経験したことがほぼない。では、誰が「見下してる」とエモトさんは感じているのかというと、「一般的な」「ギャル系っていうかリア充系っていうかはっちゃけてるタイプの人たち」である。インタビューにおけるエモトさんの「一般的な」という言葉の意味は、大多数の他者に認められていることを指していると、筆者は推察する。

「一般的な」像を作り上げる要因の一つとして、エモトさんは、大学に入ってから利用するようになった Twitter の存在を挙げた。エモトさんは、Twitter の活用方法などの細かい情報から、過去に「苦手」意識を持っていた「特定の人」の「イメージ」を帰納法的に一般化していると、筆者は推察する。先述した通り、エモトさんが「ファッション学科がすごい苦手」であるのも、実際に「ファッション学科」の「特定の人」から「キモイ」などと言われたわけではなく、Twitter から得た「一般的な」「ギャル系っていうかリア充系っていうかはっちゃけてるタイプの人たち」の「イメージ」と、「ファッション学科」の「イメージ」とを重ね合わせて「苦手」としていると、筆者は考える。

エモトさんの抱く「イメージ」に大きな「影響」を与えているのが、Twitter でのハッシュタグの活用方法である。以下に、エモトさんの Twitter でのハッシュタグに関する語りを引用する。なお、エモトさんの使用する「タグ」という言葉は、ハッシュタグの略称である。

あの Twitter とかでな、そのタイムラインで見てんねんけどもさあ、うちが最近さ、意味わからんと思ったのはさ、タグをさめっちゃつけてるあのツイート。

——：Instagram みたいなやつ(笑)

なんなん、あの、あの(笑)あれなんなん(笑)って思うねんやんか。

——：あ、そうなん？

すごい思うねん！ちょっとさー、ちょっと意味がわからない(笑)タグの意味、タグの意味が、を理解してるのかなあ。して……(ない) と思う。

… (中略) …

なんのために付けてんの？タグってさ、その話題をさ検索するためにさ、みんなでその話題を共有しようみたいな感じやんか。

… (中略) …

なんか、うちの周りにそれやってる人たちって大学の子らはいないねんやんか。

… (中略) …

——：(それやってる人たちは) 華やかなイメージ？

華やかっつーかなんか……。

——：ほんとに華やかかっていうか……、華やかぶってる？

… (中略) …

そうそれよ！うちあのね、そういう人たちの生活を華やかやとは言いたくない。人それぞれやと思うから。うちやって自分、自分なりのさ、楽しい生活してるわけやからさ。これ (Instagram の投稿) が全部華やかな生活ではない

Instagram とは写真や動画の共有に特化した SNS である。インターネット記事では Instagram が以下のように紹介されている²⁹。

今やオシャレ女子の間では定番となっているカメラアプリ「Instagram」。

²⁹ Colorful Instagram. “オシャレ女子がフォローすべき！！インスタファッション系アカウント & ハッシュタグって？”。Colorful Instagram. 2018-11-24. <https://colorful-instagram.com/should-follow-famous-account>, (参照 2019-01-06).

写真を撮るだけではなく、近年ではファッション感度の高い芸能人やおしゃれなセレブのインスタアカウントが増え、また、おしゃれな10代・20代の女子を中心に、独特なハッシュタグを使ってセルフィー（自撮り写真）をアップしたりと、インスタはファッションメディアとしても大変盛りあがっています

エモトさんは現在、Instagram ユーザーではないが、中高時代の同級生である「はっちゃけてる人」のInstagramでの投稿を目にしたことがあるそうだ。エモトさんは、Instagramでの投稿で流行しているものと似た「タグをさめっちゃつけてるツイート」に対して「意味がわからない」と困惑を示している。エモトさん「の周りにそれやってる人たちって大学の子らはいない」ことから、エモトさんは「はっちゃけてる人」などのInstagram利用者に対して「華やかな生活」を顕示する人々という「イメージ」を抱いていると、筆者は推察する。そして、エモトさんは、Instagramで流行っているハッシュタグの使用方法でツイートを行うTwitter利用者に対しても、「華やかな生活」を顕示する人々への「イメージ」を重ねていると、筆者は考える。ここで言う「華やかな生活」を顕示する人々の「イメージ」は、「リア充」への「イメージ」とほぼ同じものを指していると言える。

エモトさんの提示する「オタク」をめぐる葛藤は、前節で提示したスクールカーストの問題に通ずる。エモトさんが小学校時代から行っている3分類も、先述した「一軍」、「二軍」、「三軍」に当てはまる。エモトさんは、「一軍」である「はっちゃけてる人」が「三軍」である「オタク」に対して「下やなみたいな感じ」に振舞うという状況を実際に経験している

エモトさんの語りは2016年時点のものであり、なおかつ、エモトさんは2018年時点で20代であるため、上記で述べたことの中には、現役中高生には当てはまらない部分があると推察できる。しかし、2018年時点で中学2年生の野原さんは、夏イベの打ち上げで「インスタは1軍の人っていかそういう人たちが使ってるから（アプリケーションを）開きづらい。…（中略）…Twitterは文化部とか下の方が（使っている）」と語った。このことから、エモトさんが語ったように、ソーシャルメディアの利用とスクールカースト的「イメージ」が絡まりあって認識されていることが、現役中高生には全く当てはまらないとは言い切れないと、筆者は考える。

さらに、A中学校テニス部に所属する栗野さん（中学2年生女子）のインタビュー結果を踏まえて上記の論を発展させる。栗野さんは、同じテニス部の中にはマンガやアニメを好む生徒が少ないため、休み時間などは趣味友だち（マンガやアニメが好きな生徒たち）とおしゃべりをして過ごしていると、インタビュー中に語った。栗野さんによると、中学1年生の途中で、おそらく共通の趣味によってグループが出来上がり、休み時間などを過ごす友達が固定化するとのことであった。また、栗野さんは、学校の休み時間の雑談中に話題にあがる

SNS がグループごとに違うことについても語った。これらの栗野さんの語りは、エモトさんの「オタク」をめぐる葛藤と、Instagram 利用者に対する「イメージ」の双方に通ずるものがある。本章第 1 節では、部活動とスクールカーストの関係性について示唆したが、栗野さんの語りを踏まえて、部活動というくくりを持つ集団が決して一枚岩ではないことも忘れてはならない。

以上より、エモトさんの語りから分かることをまとめる。エモトさんは小学校・中学校・高校での実際の経験を手掛かりに、Twitter 越しのオフライン世界を想像し、「一般的な」「ギャル系っていうカリフォルニア系っていうかはっちゃけてるタイプの人たち」の「イメージ」を「嫌ってる」と言える。つまり、「Twitter の影響」を受けて、オフラインでの人々の振る舞いに対する「イメージ」が強化されたと言える。また、様々なソーシャルメディアを相対化し、ソーシャルメディア利用者に対する「イメージ」を構築している側面も、エモトさんの語りから判明した。これらのエモトさんの語りは、現役中高生にも当てはまる部分があると推察できる。

6.3 隠蔽または暗号としてのツイート

6.3.1 social steganography の検討

SNS 上での情報の隠蔽を、Boyd & Marwick (2014) は、"social steganography"と呼んでいる。social steganography は、社会的情報隠蔽技術と訳される (ボイド, 2014)。steganography とは、"security through obscurity"という概念に基づいて情報を隠す古くからの戦略である (Petitcolas et al., 1999, p. 1064-1065)。steganography は、メッセージの存在そのものを隠すことを意味し、"information hiding"という研究分野の下位分野にあたる研究分野を指す (Petitcolas et al., 1999, p. 1062)。steganography という語は、"covered writing"を意味する $\sigma\tau\epsilon\gamma\alpha\nu'o\varsigma$ 、 $\gamma\rho\alpha\phi-\epsilon\iota\nu$ というギリシャ語が由来であり、通常はある情報を別の情報に隠すことであると解釈されている (Petitcolas et al., 1999, p. 1062)。なお、野中が翻訳したボイドの著書『つながりっぱしの日常を生きる：ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』では、「ソーシャルステガノグラフィーという暗号」(ボイド, 2014, p. 105) と記述されているが、steganography は「隠蔽」技術のひとつであり暗号ではない (河口ら, 2002) という考え方もある。本論文でも、暗号と隠蔽を区別して考え、steganography を隠蔽技術の一つと捉える。

ボイド (2014) は、アメリカのティーンエイジャーたちが行う social steganography の一例として、カルメンという 17 歳の少女が Facebook にある曲の歌詞を投稿したことと、カルメンの周囲の人々がその投稿をどのように解釈したかを紹介している。カルメンは、ボーイフレンドと別れて傷心しており、Facebook を通して友人たちに苦しい胸の内を伝えたかったが、Facebook はカルメンの母親も見ているため、直接的な表現を避ける必要があっ

た（ボイド, 2014）。カルメンが投稿した曲の歌詞は一見すると明るい内容であり、カルメンの母親はカルメンの意図に全く気付かなかった（ボイド, 2014）が、カルメンの友人たちは、「その歌詞の下にあるメッセージを解釈し文脈化するのに何が参照されているのかについての文化的知識を持っていた」（ボイド, 2014, p. 109）ため、カルメンは「ただ大勢の人と曲の歌詞をシェアするだけで、一部の人々だけに意味するところを伝えることができた」（ボイド, 2014, p. 109）のである。

『つながりっぱなしの日常を生きる：ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』の中で、ボイド（2014）は、アメリカのティーンエイジャーたちによる「プライバシー」をめぐる戦略的なソーシャルメディア利用を記述している。上記のカルメンによる Facebook での social steganography もそのうちの一つである。ティーンエイジャーたちは、ソーシャルメディアを用いて何でもかんでも「あけっぴろげ」にしているわけではなく、周囲の人間、特に保護者や教師などの「彼らの生活と直接関わる権威的存在からの監視を防ごうとする」（ボイド, 2014, p. 91）のである。

しかし、social steganography は、ボイドが記述する「大人対子ども」の戦いの中でのみ用いられているとは言い切れないと、筆者は考える。調査で筆者が観察してきたツイートの中には、「大人対子ども」の戦いではなく、同年代の人々との繋がりをめぐるせめぎ合いの渦中で生まれたと推察できるものもあった。以下に、同年代の人々との繋がりをめぐるせめぎ合いの例として、調査用アカウントでフォローしている中学2年生女子 RiO のツイートを示す。なお、Twitter で検索をかけても参考にしたツイートが発見されないように、ツイートに使用されている単語などを文意が変わらない程度に改変している。

うーん……ごめん

リアルの人近々ブロるかもです(๑)

ごめんさいーイヤならリムって。

後になってぐちぐち言われんのが一番めんどくさいんで(๑)

きらいになったとかじゃないよ（多分）

RiO は、近日中に「リアルの人」をブロックすること、ブロックされることが「イヤなら」RiO の Twitter アカウントをリムーブしてほしいこと、その理由は「後になってぐちぐち言われ」たくないからであること、そして、「きらいになったとかじゃないよ（多分）」と、この一連の行動は誰かを嫌悪して拒絶するものではないことを、約 80 字で表している。RiO のツイートは、第3章で述べたような「関係性の維持」のために、「リアルの人」に対して、

近日中に行うブロックについて説明をしているものと考えられる。しかし、RiO のツイートは、書き方や絵文字の付与で相当に工夫が施されている。「リアルの人」を含む RiO のフォロワーから、RiO のツイートがどのように受け取られうるかに対して、複雑な思考が張り巡らされているツイートであると捉えられる。

筆者は、高校 3 年生の頃から 6 年間 Twitter を利用しているが、「この人たちにはこう見せたいけど、あちらの人たちにはこう思われたくないから、ぼやかした書き方でツイートしよう」ということを、しばしば経験している。RiO のツイートに対しても、筆者と同様のことが起こっているのではないかと推測できる。RiO や筆者のツイートでは、ある種の隠蔽が行われていると考え、一種の social steganography と言えるだろう。

ボイド (2014) は、social steganography を、オンライン上で行われる「プライバシー」をめぐる「大人対子ども」の戦いに用いられるものとして説明した。しかし、RiO のツイートから、「プライバシー」をめぐる中高生同士の関係調整の際に用いられる social steganography という新たな側面を提示できる。

6.3.2 暗号としての「意味深ツイート」

前項では、「プライバシー」のための隠蔽という観点から RiO のツイートを分析したが、本項では、RiO のツイートを social steganography ではなく暗号として捉え、新たな観点から分析することを試みる。

筆者は RiO と実際に会ったことはなく、どのような人物であるか、どのような人間関係を学校で築いているか、Twitter を通して発信される情報以外は全く知らない。前項の隠蔽という切り口で RiO のツイートを分析したことも、「大人である筆者」対「子どもである RiO」という枠組みの中で行われたことであるとも言える。以上を踏まえ、一つの観点にとらわれずに、多角的に RiO のツイートを考察する必要があると考える。

まず、steganography と暗号の違いについて改めて考察し、その後 RiO のツイートを暗号という切り口で分析する。steganography とは先述したように、とある情報を別の情報に隠すことだと解釈できる (Petitcolas et al., 1999)。つまり、steganography とは、重要な情報があるということ自体を隠すのである。一方、暗号は、「第 3 者に知られたいくない情報データを”かき混ぜて (scrambling)”内容をわからなくする技術であるが、”そこに怪しげなデータが存在する”ことは隠せない。すなわち、秘密の内容は保護するが、秘密の存在を強調してしまう」(河口ら, 2002, p. 415) ものである。秘密にしておきたい情報をあらかじめ暗号化しておき、さらに steganography で秘匿することで強力な情報保護技術となるため、暗号と steganography は協調できる技術だと言える (河口ら, 2002)。図 4 は上記に従って河口らが、steganography の位置づけを示したものである。

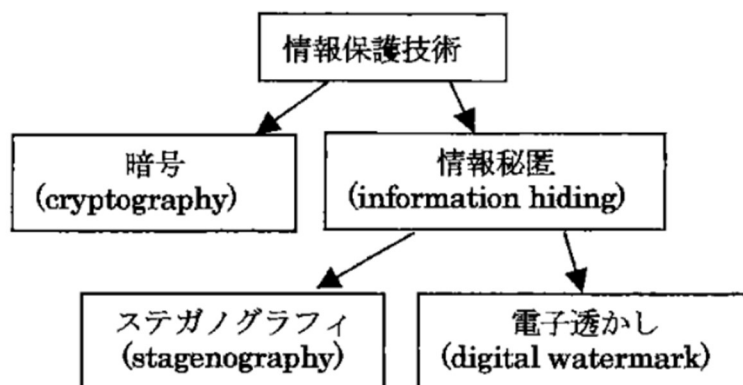


図 4 「ステガのグラフィ技術の位置づけ」(河口ら, 2002, p. 415)

RiO のツイートは、前項でも述べたように、書き方や絵文字の付与で相当に工夫が施されている。特に、「きれいになったとかじゃないよ (多分)」という表現は、「きれいになったとかじゃない」状態であると主張しながらも、文章の最後に付与された「(多分)」によって「きれいになった」状態を読み手に想起させる。

RiO は、RiO の同級生であり吹奏楽部の仲間である sena と、Twitter 上で「あの人の悪口」についてリプライし合うことがあった。「あの人」は、RiO と sena と同じ学校の吹奏楽部に所属している人物のことで推察できる。RiO は「こんなふうにあの人の悪口言ってるけど、明日会ったら普通に会話するんだよ？自分、最悪だよ」と、「あの人」への態度に対する自己嫌悪をツイートし、それに対して sena は、「そんなもんだよ」と RiO を慰めるリプライを送っていた。上記のやり取りから、RiO は Twitter 上で「あの人の悪口」をツイートし、オフラインで「あの人」と会う際には、悪感情を抱いていることを表に出さずに「普通に会話する」という二面性に対して自己嫌悪していることが分かる。

先ほど取り上げた RiO のツイートには、「リアルの人」の一部にしか分からないような情報が埋め込まれていると考え、social steganography と言える。しかし、「きれいになったとかじゃないよ (多分)」の「(多分)」に、誰かを「きれいになった」ことについて暗示する機能を、RiO が求めている場合、それは秘密の存在をあえて強調しているとも捉えられる。つまり、RiO のツイートは、まさに暗号である。暗号は、sena に宛てたものなのか、「あの人」に宛てたものなのか、あるいは全く違う人々に宛てたものなのかは筆者には分からない。しかし、筆者同様に RiO の「きれいになったとかじゃないよ (多分)」という文章に対して、きれいになったのか、きれいになっていないのか、考えをめぐらし、手元にある

RiO に関する情報と照合を行い、暗号めいたツイートの解読を行う者は、存在するかもしれない。

このようなハイコンテキストなツイートは「意味深ツイート」と呼ばれている。木口のインターネット記事では「意味深ツイート」について以下のように記述されている³⁰。

友達が急につぶやいたと思ったら、誰とは言っていないが自分に向けられて書かれたかのような文章……。

言いたいことがあるならハッキリ本人に言えばいいのに、それをせずにわざわざツイッターを通して濁して書かれているのを見ると、たとえ自分に非があっても苛立ちは隠せないと思います。

誰とは書いてないので、自分から聞くことも躊躇ってしまいますよね。そうするとずっとモヤモヤしてしまっ、そのツイートのことが頭から離れなくなってしまう

重要な情報があること自体を隠す steganography としてのツイートであれば、誰かを「モヤモヤ」させる意図は含まれていない。むしろ、social steganography は、誰かを「モヤモヤ」させることを回避する効果が期待できる。一方、暗号としての「意味深ツイート」は、誰かを「モヤモヤ」させる。発信者側には「意味深ツイート」のつもりはなくても、受信者側が「意味深ツイート」と解釈してしまうようなツイートもあるが、あえて誰かを「モヤモヤ」させたくて、「わざわざツイッターを通して濁して書かれている」「意味深ツイート」も少なくはないと推察できる。

「意味深ツイート」のような Twitter 上での戦略的な情報の提示においては、誰が誰どのように繋がっているかが重要な問題となる。「誰とは言っていないが自分に向けられて書かれたかのような文章」の場合、ツイートの宛先について、自分自身を含め複数の候補を考える必要が発生するからだ。今まで述べてきたように、Twitter 上での繋がりとおフラインでの繋がり、複雑な形で絡み合っている。Twitter 上では、「高度な情報戦」という言葉が使用されることが多く、ハッシュタグの形で用いられている。「意味深ツイート」は複雑な繋がりを利用した「高度な情報戦」を Twitter 上で展開できる暗号であると、筆者は考える。

³⁰ 木口美穂. “もしかして私のこと言ってる？意味深ツイートに左右されない方法”. 4MEEE. 2018. <https://4mee.com/articles/view/600776>, (参照 2019-01-05).

第7章 結論

7.1 「繋がりたい」ということ

第3章で述べたように、Twitter 上ではハッシュタグが見知らぬ人との繋がりを作る上で重要である。本調査では、ハッシュタグの使用によって、相互フォロー関係の拡大や、オフラインでの交流が可能となった。特に「#吹奏楽部さんと繋がりたい」や、「#twitter 上にいる吹奏楽部全員と繋がるのが密かな夢だったりするのでとりあえずこれを見た吹奏楽部員は rt していただくと全力でフォローしに行きます」などのハッシュタグによって、筆者は他の Twitter ユーザと交流する機会を獲得できた。

上記のハッシュタグにある「繋がりたい」という言葉は、Twitter 上で相互フォローになりたいという意味で使用されていると考えられる。しかし、Twitter 上で相互フォローになるということは、フォロイー・フォロワー数という数字を増加させることだけに留まるものではなく、リプライを送り合ったり、オフラインで会ったりするような多様な交流の起点にもなりうる。記述概念ではない「繋がりたい」という言葉を手掛かりに、何故相互フォローになりたいのか、どのように相互フォローの関係を発展させるのかなど、Twitter を利用する吹奏楽部員にとっては、何がどう繋がっていることになるのか探っていく必要がある。

そこで、Twitter のハッシュタグに今一度目を向ける。第6章第2節で取り上げたインタビューで、エモトさんは「タグってさ、その話題をさ検索するためにさ、みんなでその話題を共有しようみたいな感じやんか」と、ハッシュタグの利用目的を語っていた。「話題を共有しよう」という姿勢もまた、「繋がりたい」という欲求に含まれうると筆者は考える。しかし、先述したように、「#twitter 上にいる吹奏楽部全員と繋がるのが密かな夢だったりするのでとりあえずこれを見た吹奏楽部員は rt していただくと全力でフォローしに行きます」というハッシュタグからは、フォロイー・フォロワー関係を結びたいという欲求が見えてくる。つまり、フォロイー・フォロワー関係を結ばずともできることを、あえてフォロイー・フォロワー関係を結んで行いたいという考えがあると推察できる。

第3章第3節では、「吹奏楽部アカウント」が Twitter のハッシュタグを使用したり、オンライン上のグループに参加したりする動機として、「友達探し」や「仲間がほしい」というツイートに言及を行った。上記のツイートを踏まえると、相互フォローとなった Twitter ユーザは、「友達」や「仲間」として受け入れられると言える。この場合の「友達」や「仲間」は、オフラインでの対面を前提とした人間関係を結ぶか否かが問題とされていない。

Twitter では様々な繋がりを作ることができるため、オフラインでの対面の繋がりを獲得することは、特殊なことというより、様々な繋がりの中の一つであると捉えられる。ここで言う Twitter での様々な繋がりとは、相互フォローになることだけでなく、第3章第3節で言及した「ラブリッツ」や「リスイン」も含む。「ラブリッツ」や「リスイン」は、様々な Twitter

で繋がる方法のうちの一つであり、これまで言及してきた「吹奏楽部グループ」への参加や、「吹奏楽オフ」への参加も、同様に Twitter で繋がる方法のうちの一つである。このような Twitter における様々な繋がり方は、おそらく「吹奏楽部アカウント」以外の Twitter アカウントでも実践されている。

ここまで論じてきた様々な Twitter 上の繋がりを、まとめて振り返る。オンラインのみの繋がりからオフラインの繋がりへと移行することもあれば、第6章で取り上げたように、既存の人間関係を、Twitter を用いて展開していくこともできることが分かった。北村ら(2016)が指摘するように、Twitter の活用によってオフラインの既存の人間関係を補強することも可能であり、また、筆者が第6章第1節で述べたように、既存の人間関係の捉え直しを行うことも可能である。Twitter の利用によってオンラインとオフラインにまたがる形で様々な人々と繋がれることは、これまでの論から明らかである。

今までの論を踏まえると、Twitter は、第3章第3節で言及した選択縁(上野, 1994)を醸成する場所として、Twitter ユーザに活用されていると考えられる。「吹奏楽部アカウント」にとっても同様であろう。しかし、対面ではない選択縁であるからといって、オフラインの既存の人間関係より劣るわけではないと、筆者は考察する。筆者は、「吹奏楽部アカウント」にとって、オンライン上の見知らぬ人との繋がりには、オフラインでの既存の人間関係における繋がりとは全く異なった重要性があるという立場をとる。

では、Twitter を利用する吹奏楽部員にとっては、何がどう繋がっていることになるのかという問いに戻る。Twitter を利用する吹奏楽部員にとっては、吹奏楽(部)という、ジャック・ドーシー氏が言うところの「関心」を基軸に、選択縁を獲得している状態が、繋がっている状態であると、筆者は考察する。そして、その繋がり、オフラインでの対面の繋がりと比べて劣るわけではなく、また、必ずしもオフラインでの対面の繋がりの代替となっているわけでもなく、それぞれの Twitter ユーザたちが全く異なった重要性を見出していると、筆者は主張する。

ここで注意が必要なのは、上記の選択縁の獲得は Twitter に限らず、どのソーシャルメディアでも可能であるという点である。今後、Twitter と類似した特性を持つソーシャルメディアが数多く開発される可能性がある。また、Twitter は、他のソーシャルメディアと比較して自由度が高いと第3章第3節で言及したが、Twitter ほど自由度が高くないソーシャルメディアであっても、利用者たちが新たな使用方法を編み出すことも可能である。本節で主張することは、Twitter 上で繰り広げられる繋がり独特さではなく、Twitter を含む様々なソーシャルメディアでは多様な繋がり方が展開されており、その繋がり、オフラインでの対面の繋がりと比べて劣るわけではなく、また、必ずしもオフラインでの対面の繋がりの代替となっているわけでもないことである。

本節の最後に、何故「吹奏楽部アカウント」は、他の Twitter アカウントと「繋がりたい」

のか、吹奏楽部の特徴に着目しながら考察を行う。吹奏楽部の活動、特にコンクールへの参加は、集団競技の側面はあるものの、試合で他校の生徒と相対する運動部と比較すると、他校の人間と関わりあいを持つ機会は少ない。コンクール以外で演奏する機会も、もちろんあるが、他校と交流するきっかけにはなることは少ないと推察できる。自分自身の所属する吹奏楽部というコミュニティだけでなく、より広がりを持った吹奏楽（部）コミュニティへの参入を希望する吹奏楽部員が、Twitter 上で「友達探し」をする場合があると考えられる。また、演奏は集団で行うものである反面、スポーツと違い厳密な人数制限はない。吹奏楽部の規模やレベルは学校によって様々である。100 名以上の部員で活動する吹奏楽部と、廃部寸前の吹奏楽部とでは、演奏できる曲目は大きく異なる。吹奏楽部員の中には、「学校ではできない曲を、学校ではできない編成でやりたい」という願望を持つ者も少なからずいる。そのような願望を叶えるツールとして Twitter が活かされる場面を、調査を通して実際に見ることができた。

7.2 インターネット・パラドクスの検討

オンラインでのコミュニケーションとオフラインでの繋がりについて、Kraut ら（1998）の発表した「インターネット・パラドクス」が盛んに議論されている。特に、近年のソーシャルメディアの普及はめざましく、オフラインでの社会的な関係に大きく影響を及ぼしているのではないかという観点から、インターネット・パラドクスに対する検討が行われている（例えば、河井, 2014; 北村, 2016）。

本研究では、Twitter での参与観察を中心に、オンライン世界とオフライン世界の交錯の様相に焦点を当てつつ、人と人との繋がりや編まれ方を追ってきた。そこで、本節では、今まで論じてきた吹奏楽部員の Twitter 利用から、インターネット・パラドクスを検討する。まず、インターネット・パラドクスについての説明を行う。

Kraut らは、1995 年から 2 年間、インターネット利用に関する縦断的な調査を、ピッツバーグ地域の住民 93 世帯 256 名に対して行ったところ、インターネットを介したコミュニケーションを行うことで社会的関与が減少し、孤独感やストレスや抑鬱症状が増加するというネガティブな結果を示唆した。Kraut らは、ネガティブな結果の原因として、社会活動を行う時間がインターネット利用時間に置き換わってしまうことと、インターネット利用から生まれる弱い紐帯が、既存の人間関係である強い紐帯に置き換わってしまい、希薄な関係しか築けなくなることを挙げた。

Kraut らは、上記の状態をインターネット・パラドクスと呼んだ。その理由を、“because participants used the Internet heavily for communication, which generally has positive effects”（Kraut et al., 2002, p. 49）と説明している。つまり、コミュニケーションを豊かにするツールとしてインターネットが用いられた場合、かえってインターネットがコミュニケーション

ョンを阻害することに、Kraut らは注目している。

1998 年に発表されたインターネット・パラドクスは、社会的に非常に大きなインパクトを与え、インターネット・パラドクスに関連した数多くの追試や検討が行われたが、様々な研究結果が出ており、一貫した主張がなされているわけではない（高比良, 2009）。

Kraut ら（2002）は、1998 年に行った調査の対象者のうち 93 世帯 208 人に対して追跡調査を行い、また、新たに 216 世帯 446 人に対してパネル調査を実施した。その調査の結果、インターネット利用頻度が高い人ほど、身近な社会的ネットワークや遠方のネットワークが拡大したことが示されたが、家族や友人との対面コミュニケーションの減少や、精神的健康の減少とは有意な関連は示されなかった（Kraut et al., 2002）。つまり、インターネット・パラドクスは否定されたのである。研究結果が変化したことに対して、Kraut らは、既存の人間関係を維持するためのインターネット利用が行われるようになったことを理由に挙げている。また、インターネット利用者を外向的と内向的に分けた場合、インターネット利用頻度が高いほど、外向的な人は孤独感が減少するのに対し、内向的な人は孤独感が増大する傾向にあることや、コミュニティへの関与についても同様に、外向的な人は関与を深めるのに対し、内向的な人は関与が薄まり、“the rich get richer”という言葉が部分的に妥当すると示した（Kraut et al., 2002）。

北村（2016）は、2002 年の Kraut らの研究について、『『外交的で既存の社会的資源を持つ人はインターネット利用によって、ますます社会的な利益を得るようになる』という仮説を支持している』（北村, 2016, p. 54）と述べ、「社会的拡張」仮説に当てはまると考えている。また、北村は、「社会的補償」仮説にも着目している。「社会的補償」仮説とは、「社会的資源を持たない人々がオンラインという新しいコミュニケーション機会を使って他者との関係を形成し、社会的支援を得る」（北村, 2016, p. 54）仮説である。北村は、Twitter のフォロイーとフォロワーが区別されていることは「社会的補償」仮説の関係で重要になるとし、また、Twitter の利用動機によって「社会的拡張」仮説が当てはまる場合と、「社会的補償」仮説が当てはまる場合とがあると述べている。

繰り返しになるが、本研究では、オンラインとオフラインにまたがる様々な人々の繋がりを論じてきた。そのうえで筆者は、北村同様、Twitter での繋がりの形成においては、「社会的拡張」仮説も「社会的補償」仮説も、どちらの仮説も当てはまると考えている。第 3 章第 3 節でも言及したが、Twitter は、他のソーシャルメディアと比較して自由度が高いと見なされている。前項で述べた通り、Twitter の自由度が高いことから、Twitter ユーザは、Twitter の使い方を選択したり、新しく作ったりすることが可能である。そのため、Twitter では、「社会的拡張」仮説も「社会的補償」仮説も、どちらの仮説も当てはまると考えられる。

岡安（2016）は、高校生のインターネットの利用実態を調査し、インターネット利用行動とインターネット依存および精神的健康との間の関連性について検討を行ったところ、ス

スマートフォンが普及する以前の研究結果とは異なり、高頻度にインターネットを利用するだけでは、必ずしも精神的健康に悪影響をもたらすとは限らないと述べている。また、岡安の調査結果から、インターネットを高頻度で利用すると、友人関係の適応感を高めるという効果が認められたため、高校生たちはメールや SNS によって、友人関係適応感を高めている可能性が示唆された。これは Kraut らの 2002 年の研究結果と一致していると言える。

一方、岡安（2016）の研究とは異なる調査結果も存在する。宮戸と小玉（2016）の中学生を対象とした調査では、オフラインの友人が多い中学生ほどメールや SNS でのやりとりが活発である様子が示され、さらに、そのような活発なやりとりは、ストレス関連心性や不健康症状や不健全なネット利用に影響を及ぼす様子が認められている。つまり、Kraut らの研究に引き付けて考えると、「外向的で既存の社会的資源を持つ」中学生は、インターネットでのコミュニケーションで精神的健康においてネガティブな影響を受けていると言える。

宮戸と小玉の研究を踏まえて、筆者は、Twitter において「外交的で既存の社会的資源を持つ人」も、「社会的資源を持たない人」も、ポジティブな影響のみを受けるわけではないと考察する。その理由は、本研究における今までの論から、Twitter 上でのコミュニケーションには、ポジティブな側面もネガティブな側面も存在し、なおかつ、その二つの側面をはっきりと分けることが大変困難であると確認できたためである。以下に、ポジティブとネガティブという視点で、本論文で言及した Twitter の活用方法について、振り返ってまとめたものを記述する。

本論文の第 3 章では、Twitter 上での交流そのものに対する楽しみについて記述し、第 4 章では、Twitter の繋がりからオフラインでの繋がり発展する様子を記述した。第 3 章第 4 節を除くこれらの記述は、Twitter 利用のポジティブな側面を切り取ったものと言える。一方で、第 3 章第 4 節では、オンラインコミュニティでのトラブルに言及した。この記述は、Twitter 利用のネガティブな側面、例えばネットいじめや SNS 疲れなどを引き起こしかねない状況を切り取ったものと言える。また、第 6 章では、オフラインの繋がりへと影響を及ぼすツイートに言及したが、Twitter 利用のポジティブな側面とネガティブな側面が渾然一体となっている様子が見受けられた。第 6 章第 1 節で示した吹奏楽部をエンパワーメントするツイートは、吹奏楽部員にとって非常にポジティブな影響があると推察できる反面、場合によっては他の部活動、とりわけ吹奏楽部以外の文化部に所属する生徒の学校生活をより困難にする危険性をはらんでいる。第 6 章第 2 節で示したエモトさんの Twitter 利用では、ネガティブな影響が多く語られていたが、エモトさんは「趣味アカウント」が活用しているため、ポジティブな影響を全く受けていないとは言い切れない。第 6 章第 3 節で示したハイコンテクストなツイートは、捉え方が受け手によって変化すると推察できるため、一概にポジティブともネガティブとも言いきれない。

そもそも、インターネット利用者にとって、インターネット利用がポジティブであるかネ

ガティブであるかは、Kraut らが行ったようなパネル調査であったとしても、短いスパンでの影響しか見ることができていないと、筆者は考える。「人間万事塞翁が馬」ということわざがあるように、何がネガティブで何がポジティブな影響を与えるかは、短いスパンでは断定できない。本研究の場合、中高生という今後の人格形成の重要な時期にある子どもたちを対象としているため、この時期にインターネットを通して自身の音楽活動や部活動での様々な出来事を相対化したり俯瞰したりする経験が、彼ら彼女らの長きにわたる人生やその中で音楽との向き合い方にどのような影響を与えるかは、はかりしれないだろう。つまり、本論文では、インターネット利用の影響について、二項対立では表せない側面を記述してきたと言える。

数値化された性格特性だけでなく、本研究が言及してきたように、自ら決断することが可能な「主体的に行為する者」として中高生を捉えた上で、中高生のオンライン世界での高度な活動の実態にも目を向ける必要があると、筆者は主張する。また、中高生たちの創意工夫に富んだ人間関係の構築方法は、情報技術と同様に日夜進化し続けていることも無視できない。そして、前項で指摘した通り、2018 年時点では、Twitter を含む様々なソーシャルメディアでは多様な繋がり方が展開されており、その繋がり方は、オフラインでの対面の繋がりとは比べて劣るわけではなく、また、必ずしもオフラインでの対面の繋がりへの代替となっているわけでもない。そのため、オフラインでの対面の繋がりこそが最も良いものであるという前提に依拠し続ける限り、「パラドクス」からは抜け出せないと、筆者は考察する。

7.3 繋がりの可能性

本研究の目的は、中高生のオンラインエスノグラフィを行い、実際にオンライン世界で人間関係を築く中高生の実態について記述することである。本論文では、その中でも特に、オンライン世界とオフライン世界の交錯の様相に焦点を当てつつ、人と人との繋がりの方を追ってきた。

第3章では、Twitter で編まれた流動性の非常に高いオンラインコミュニティの様子と、そのオンラインコミュニティが、LINE グループなどの新たなオンラインコミュニティへの参加の機会を作る様子を記述し、さらに、第4章では、Twitter のオンラインコミュニティが、オフラインコミュニティへの参加の機会を作る様子を記述した。第5章では、本研究の対象である吹奏楽部員のオフラインでの繋がりについて言及し、第6章では、クラスメートや部活動仲間など、既存の人間関係を中心に、吹奏楽部員たちの Twitter 利用について言及した。本章第1節では、「繋がりたい」ということが何を指し、何故「繋がりたい」のかを論じ、本章第2節では、今まで言及してきたことに基づいてインターネット・パラドクスの検討を行った。

これまでの議論から、オフラインの既存の人間関係が重要視され、調査や研究が行われてきたことが分かる。それに伴って、調査対象者が「外交的で既存の社会的資源を持つ人」で

あるか否かも重要視されていると筆者考える。中高生の場合、学校の友人の数を、教師や研究者といった大人たちに注視されていると言えるだろう。また、中高生たちは、大人たちから、オフラインの対面の人間関係を充実させることを望まれ、かつ、ソーシャルメディアや SNS の利用にはなるべくのめり込まないでいることを期待されているとも言える。

しかし、先行研究が示しているように、ソーシャルメディアは、既存の人間関係の補強を担っている側面もある（北村ら, 2016; 高谷, 2017; 岡安, 2016）。学校の友人との繋がりを途切れさせないためには、ソーシャルメディアや SNS の利用は避けて通れない側面があり、それが精神的負担になる場合があることも否定できない。また、本調査では、日付を超えてもなお Twitter や LINE でやり取りを続ける中高生たちを観察できた。長時間のインターネット利用によって就寝時刻が遅くなったり（例えば、津田ら, 2015）、睡眠時間が減少したり（例えば、堀川ら, 2011）するという研究結果もある。オフラインとオンラインとにまたがる形で繋がりを維持し続ける中高生たちは、心身ともに大きな負担を抱えている場合があると考えられる。

その一方で、時として中高生たちは、その大きな負担をソーシャルメディアや SNS の利用によって解決しようと試行錯誤を重ねる。第3章や第4章で示した吹奏楽（部）という関心を軸にしたオンラインコミュニティでは、大人たちの監視下に置かれ、学校と家が主な居場所となっている中高生たちにとって、自分自身が選択した縁を取りむすぶことができるという希望をもたらず場合もある。オンラインコミュニティでトラブルが起こった場合でも、オンラインコミュニティ参加者同士で協働する様子を観察できた。また、第5章や第6章で、現役吹奏楽部員たちが、吹奏楽部の独特の規範や、学校におけるスクールカーストなどの規範に、従ったり、あるいは抗ったりしつつ、部活動や学校というオフライン空間に対して、Twitter を用いて「闘い」を行っている様子を記述した。以上より、現役吹奏楽部員の将来にわたる繋がりの可能性を開いていく一助として Twitter が用いられていることが示された。

7.4 オンラインエスノグラフィができること

本研究では、中高生たちは高度なソーシャルメディア利用を行っているということを、オンラインエスノグラフィを通して記述してきたが、だからといって、中高生たちには大人の手助けや介入が全く必要ないとは言いきれない現状も確認できた。中高生に対してソーシャルメディアの利用を完全に禁止する必要はないが、ソーシャルメディアの使用方法や、人と人とが繋がることを、大人たちも中高生たちとともに考えていく必要がある。また、第1章第1節でも述べたように、SNS が普及する以前から過度なインターネット利用に対して、中毒や依存の観点から議論が行われ続けている（例えば、ヤング, 1998, 文部科学省, 2003）が、インターネット利用時間や、利用しているサービスやアプリケーションによってのみ依

存状態を判断するだけでは、「インターネット依存者」に分類されない中高生のインターネット利用における問題を取りこぼすおそれがある。そのため、本研究のように、オンライン世界で人間関係を築く中高生の実態をつぶさに観察する研究がより活発に行われる必要があると、筆者は主張する。

さらに、本論文で繰り返し主張しているように、Twitter を含む様々なソーシャルメディアでは多様な繋がり方が展開されており、その繋がり方は、オフラインでの対面の繋がりとは比べて劣るわけではなく、また、必ずしもオフラインでの対面の繋がりへの代替となっているわけでもない。以上のことを意識した調査や研究が行われる必要がある。第1章第2節で述べたように、オンライン上のバーチャルワールドをオフライン世界の補完ではなく、同等のものに見なし、「Second Life」におけるオンラインでのやり取りのみでフィールドワークを完結させた Boellstorff (2008) の研究は、オンライン上の情報が、オフラインから得られる情報より劣るものとする考え方に反する姿勢があり、非常に革新的であった。研究における情報の重要性だけでなく、人と人との繋がりを考えていく上でも、Boellstorff の姿勢が必要と言える。

また、オンラインエスノグラフィができることのうちの一つに、オンラインコミュニティや、繋がりというものの、ある種の掴みどころの無さについての提示が挙げられるのではないかと、筆者は考える。オンラインコミュニティの流動性については、常に指摘され続け、それゆえに調査に困難を伴う。どこからどこまでがコミュニティと言えるのかという大きな問題を抱えているからである。しかし、この大きな問題に対して、どこからどこまでがコミュニティとは言い切れない、つまり定義しきれないからこそ、オンラインエスノグラフィが活きるとも言い換えられる。

インターネット上の膨大な情報に対して量的調査を用いることで得られる知見は、非常に重要で示唆に富む。そのような先行研究を参考にしつつオンラインエスノグラフィを行うことで、数値では表せない側面や、やむを得ず捨て去られる「外れ値」をも含んだ発展的な研究成果を導きだすことができる。オンラインエスノグラフィには、他の研究手法同様に限界がある。しかし、その限界を他の研究で補うことで、オンラインエスノグラフィの特性を十分に活かした発展的な研究を行えると言える。

7.5 課題と展望

本研究では中高生のオンライン上での活動の実態を明らかにしようと試み、その一例として Twitter 上の吹奏楽部員に焦点を当てた。しかし、吹奏楽部特有と考えられる Twitter での繋がり方の分析だけでは、中高生のオンライン上での活動の実態として浮かび上がってくる部分が少ないと考えられる。また、本研究では中学生と高校生を分けずに中高生として取り扱ったが、中学校生活と高校生活では大きな違いがあるため、その違いに着目した調

査も必要と考えられる。

C 中学校のアンケート調査結果から分かる通り、Twitter 利用が必ずしも吹奏楽部員に浸透しているわけではないことに留意すべきである。また、吹奏楽部員だけが特殊な Twitter 利用をしているわけではなく、それぞれの部活動や中高生コミュニティにおいて、独特の Twitter における規範や活用方法が浸透しているであろうことも忘れてはならない。A 中学校テニス部に所属する井伊さん（中学 2 年生女子）は、インタビューにおいて、「気の強い子」が「テニス上手じゃない子」を煙たがることによって、井伊さんと「テニス上手じゃない子」とが仲良くしづらくなることについて語った。井伊さんの語りから、吹奏楽部以外の部活動でも、その部活動内独特の規範による人間関係の難しさに悩む者がいると分かる。よって、Twitter 以外のソーシャルメディアについての調査、および吹奏楽部以外の部活動や中高生コミュニティについての詳細な調査も必要である。

また、部活動という切り口以外で中高生のオンラインエスノグラフィを行うことも非常に重要である。第 6 章第 2 節で言及した栗野さんの語りからも、部活動というくくりを持つ集団が、決して一枚岩ではないということが示されている。

特に、どのように調査の範囲を定めるか、どのようにオンライン上の大量の情報を取り扱うかという調査設計について、今後も検討し改善していく必要がある。さらに、調査から取得できた大量の情報をいかに整理して分析し、エスノグラフィを作成したのかを記述する際、調査対象者のリクルート方法や、調査者の立場性を考慮しつつ、従来のエスノグラフィの手法を踏まえながら、論文の読み手にとってより分かりやすいものとなるように検討を重ねていくことが重要だと筆者は考える。

謝辞

本論文を作成するにあたり、丁寧かつ適切なご指導を賜った指導教官の照山絢子先生に心より深く感謝いたします。また、温かいご助言を賜った歳森敦先生にも厚くお礼申し上げます。照山研究室4年生の立石さん、千葉さん、中島さん、西さん、堀江さん、卒業生の菅原さんからゼミを通じて多くのご支援をいただき、誠にありがとうございました。筆者が落ち込んだときに、快活な笑顔と愉快的言葉がけと不屈の心で励ましてくださった皆様、ありがとうございました。

そして最後となりますが、Twitterを通して交流してくださった皆様と、本研究の趣旨を理解し、快く調査にお力を貸してくださった皆様に厚くお礼申し上げます。

引用文献一覧

- 安藤玲子, 高比良美詠子, 坂元章. インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響. パーソナリティ研究. 2005, vol. 14, no. 1, p. 69-79. <https://doi.org/10.2132/personality.14.69>, (参照 2019-02-06).
- 青山郁子, 藤川大祐, 五十嵐哲也. 小・中学生におけるネットいじめの芽の経験, 深刻度の認識, 対処の自信と対処行動についての調査. 日本教育工学会論文誌. 2017, vol. 41, Suppl, p. 189-192. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjet/41/Suppl./41_S41098/_pdf/-char/ja, (参照 2018-06-24).
- Boellstorff, Tom. *Coming of Age in Second Life: An Anthropologist Explores the Virtually Human*. Princeton University Press, 2008, 344p.
- ボイド, ダナ. つながりっぱなしの日常を生きる : ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの. 野中モモ訳. 草思社, 2014, 268p.
- Boyd, Danah.; Ellison, Nicole. Social Network Sites: Definition, History, and Scholarship. *Journal of Computer-Mediated Communication*. vol. 13, no. 1, 2007, p. 210-230. <https://doi.org/10.1111/j.1083-6101.2007.00393.x>, (参照 2019-01-10).
- Boyd, Danah.; Marwick, Alice. *Networked privacy: How teenagers negotiate context in social media*. 2014
- Ellison, Nicole.; Boyd, Danah. "Sociality through Social Network Sites". *The Oxford Handbook of Internet Studies*. Dutton, W. H eds. Oxford University Press, 2013, p. 151-172. <http://dx.doi.org/10.1093/oxfordhb/9780199589074.013.0008>, (参照 2019-01-10).
- 藤代裕之編. ソーシャルメディア論 : つながりを再設計する. 青弓社, 2015, 253p.
- 藤田結子, 北村文編. 現代エスノグラフィー : 新しいフィールドワークの理論と実践. 新曜社, 2013, 257p.
- ゴッフマン, E. 行為と演技 : 日常生活における自己呈示. 石黒毅訳. 誠信書房, 1974, 350p.
- 堀川裕介, 橋元良明, 小室広佐子, 小笠原盛浩, 大野志郎, 天野美穂子, 河井大介. 中学生におけるネット依存の実態と要因分析. 日本社会情報学会全国大会研究発表論文集. 2011, vol. 26, p. 155-160.
- 池田謙一編. ネットワーキング・コミュニティ. 東京大学出版会, 1997, 216p.
- 石井健一. 「強いつながり」と「弱いつながり」の SNS : 個人情報の開示と対人関係の比較. 情報通信学会. 2011, vol. 29, no. 3, p. 25-36.
- 伊藤賢一. 中高生のネット利用の実態と課題 : 群馬県青少年のモバイル・インターネ

ット利用調査から. 群馬大学社会情報学部研究論集. 2011, vol. 18, p. 19-34. <http://hdl.handle.net/10087/6082>, (参照 2019-02-06).

- 上別府圭子, 杉浦仁美. ケータイメールが中学生の友人関係に及ぼす影響. こころの健康. 2004, vol. 19, no. 1, p. 73-82. <https://doi.org/10.11383/kokoronokenkou1986.19.73>, (参照 2019-02-06).
- 上沼あずさ, 石津憲一郎. 中学生における部活動の取り組み, インターネット依存と学校適応 : 生活習慣の視点を含めた交差遅れ効果モデル分析. 教育実践研究 : 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要. 2017, no. 12, p. 69-76.
- 加藤千枝. 「SNS 疲れ」に繋がるネガティブ経験の実態 : 高校生 15 名への面接結果に基づいて. 国民のための情報セキュリティサイト. 社会情報学. 2013, vol. 2, no. 1, p. 31-43, https://www.jstage.jst.go.jp/article/ssi/2/1/2_KJ00008760309/_pdf/-char/ja, (参照 2018-06-24) .
- 河口英二, 野田秀樹, 新見道治. デジタル・ステガノグラフィ技術について. 画像電子学会誌. 2002, vol. 31, no. 3, p. 414-420. <https://doi.org/10.11371/iieej.31.414>, (参照 2019-01-10).
- 河井大介. ソーシャルメディア・パラドクス : ソーシャルメディア利用は友人関係を抑制し精神的健康を悪化させるか. 社会情報学会. 2014, vol. 3, no. 1, p. 31-46. https://doi.org/10.14836/ssi.3.1_31, (参照 2019-02-06).
- 木村忠正. 科学研究費補助金研究成果報告書. 独立行政法人日本学術振興会, 2010, 19500210seika, 6p. <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-19500210/19500210seika.pdf>, (参照 2019-01-10).
- 木村忠正. デジタルネイティブの時代 : なぜメールをせずに「つぶやく」のか. 平凡社, 2012, 256p.
- Kraut, Robert; Patterson, Michael; Lundmark, Vicki; Kiesler, Sara.; Mukopadhyay, Tridas; Scherlis, William. Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being?. American Psychologist. 1998, vol. 53, no. 9, p.1017-1031.
- Kraut, Robert; Kiesler, Sara; Boneva, Bonka; Cummings, Jonathon; Helgeson, Vicki; Crawford, Anne. Internet paradox revisited. Journal of Social Issues. 2002, vol. 58, no. 1, p.49-74.
- 北村智. “オンライン世界とオフライン世界の交わり”. ツイッターの心理学. 誠信書房, 2016, p. 9-10
- 北村智, 佐々木裕一, 河井大介. ツイッターの心理学. 誠信書房, 2016, 217p.
- 古川裕生志. 音楽なき熱狂 : 学校吹奏楽のカルト性についての一考察. 弘前大学,

2008, 修士論文. 入手先, 弘前大学学術情報リポジトリ,
https://hirosaki.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=3188&file_id=20&file_no=1, (参照 2019-01-10).

- メリアム, S. B. 質的調査法入門 : 教育における調査法とケース・スタディ. 堀薫夫, 久保真人, 成島美弥訳. 2004, ミネルヴァ書房, 418p.
- 宮本瑛. インターネットと社会関係資本. 日本社会情報学会全国大会研究発表論文集. 2008, vol. 23, p. 234-239. <https://doi.org/10.14836/jasi.23.0.234.0>, (参照 2019-01-10).
- 宮戸悠貴, 小玉正博. 中学生におけるインターネット依存と学校適応、精神的健康との関連. 埼玉学園大学心理臨床研究. 2016, vol. 3, p. 10-21. <http://id.nii.ac.jp/1354/0000495/>, (参照 2019-01-10).
- 文部科学省. “「情報化が子どもに与える影響（ネット使用傾向を中心として）」に関する調査報告書”. 一般財団法人 コンピュータ教育推進センター. 2003-05-31. <http://www.cec.or.jp/soumu/netizon.html>, (参照 2018-11-15).
- 森津太子, 坂元章. インターネットに関する教育社会心理学的研究. 教育心理学年報. 2000, vol. 39, p. 78-85. https://doi.org/10.5926/arepj1962.39.0_78, (参照 2019-02-06).
- 森口朗. いじめの構造. 新潮社, 2007, 190p.
- 中澤篤史. そろそろ、部活動のこれからを話ませんか : 未来のための部活講義. 大月書店, 2017, 266p.
- 西田治. 学校吹奏楽におけるコンクール参加の意義 : スポーツコーチングからの考察. 音楽教育実践ジャーナル. 2006, vol. 3, no. 2, p. 92-98. https://doi.org/10.20614/jjomep.3.2_92, (参照 2019-01-12).
- 西村洋一. 対人関係とインターネット上での問題行動 : 高校生のインターネット上での問題行動に関連する要因の基礎的検討Ⅲ. 陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要. 2017, no. 10, p. 91-104. https://hokurikugakuin.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1005&file_id=22&file_no=1, (参照 2019-02-06).
- 岡安孝弘. 高校生のインターネット利用行動とインターネット依存, 精神的健康の関係. 明治大学心理社会学研究. 2016, no. 12, p. 17-30.
- Petitcolas, Fabian.; Anderson, Ross.; Kuhn, Markus. Information Hiding: A survey. Proceedings of the IEEE. 1999, vol. 87, no. 7, p. 1062-78. <https://doi.org/10.1109/5.771065>, (参照 2019-01-10).
- Prensky, Marc. Digital Natives, Digital Immigrants. MCB On the Horizon. 2001, Vol. 9, No. 5, p. 1-6. <http://www.marcprensky.com/writing/Prensky%20-%20Digital%20Natives,%20Digital%20Immigrants%20-%20Part1.pdf>, (参照 2019-01-10).

- 佐々木裕一. “ソーシャルメディアと SNS”. ツイッターの心理学. 誠信書房, 2016, p. 23-25.
- 関朋昭. なぜ吹奏楽部は文化部なのか : 運動部と文化部のダイコトミーに着目して. 名寄市大学紀要. 2017, vol. 11, p. 7-16, <http://id.nii.ac.jp/1088/00001650/>, (参照 2018-11-23).
- 関向央奈. 学校教育における吹奏楽部の在り方 : コンクールに対する意識を中心に. 釧路論集 : 北海道教育大学釧路校研究紀要. 2017, no. 49, p. 37-46. <http://sir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9862>, (参照 2019-01-12).
- 塩田真吾. “「SNS 東京ノート」効果測定およびネット利用実態把握調査の総括”. 「SNS 東京ノート」効果測定およびネット利用実態把握調査. LINE 株式会社, 2018, 189, p. 4. https://scdn.line-apps.com/stf/linecorp/ja/csr/sns_tokyo_note_report_2018.pdf, (参照 2019-01-14).
- 総務省. 平成 23 年情報通信利用動向調査 (世帯編) の概要. 総務省, 2012, HR201100_001, 97p. http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/pdf/HR201100_001.pdf, (参照 2019-01-03).
- 総務省. “ソーシャルメディアの普及がもたらす変化”. 平成 27 年版 情報通信白書. 総務省, 2015, n4200000, p. 199-214. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/n4200000.pdf>, (参照 2019-01-03).
- 総務省. “平成 29 年通信利用動向調査 ポイント”. 「平成 29 年通信利用動向調査の結果」の訂正. 総務省, 2018, 180525_1, p. 1. http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/180525_1.pdf, (参照 2019-01-23).
- 総務省 情報通信政策研究所. 平成 28 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 報告書. 情報通信政策研究所, 2017, 000492877, 96p. http://www.soumu.go.jp/main_content/000492877.pdf, (参照 2019-01-10).
- スモール, クリストファー. ミュージッキング : 音楽は<行為>である. 野澤豊一, 西島千尋訳. 水声社, 2011, 436p.
- 鈴木翔. 教室内(スクール)カースト. 光文社, 2012, 308p.
- 田口裕介. 吹奏楽の甲子園 : 「普門館」をめぐる物語としての音楽. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要. 2012, vol. 19, no. 2 別冊, p. 279-289, <http://hdl.handle.net/2065/35657>, (参照 2019-01-09).
- 高谷邦彦. ゼロ年代の情報行動の変容 : エスノグラフィによるブログ行動のモチベーション分析. 北海道大学, 2016, 博士論文. 入手先, 北海道大学学術成果コレクション, https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/61542/1/Kunihiko_Takaya.pdf, (参照 2018-06-30) .

- 高谷邦彦. ソーシャルメディアは新しいつながりを生んでいるのか? : 女子学生の利用実態. 名古屋短期大学研究紀要. 2017, no. 55, p. 13-27, https://ohka.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=21&file_id=22&file_no=1, (参照 2018-06-26).
- タブスコット, ドン. デジタルネイティブが世界を変える. 栗原潔訳. 翔泳社, 2009, 500p.
- 時津啓. SNS 時代の情報モラル教育に関する考察 : 中学校における情報モラル教育の授業実践に向けて. 子ども学論集. 2015, vol. 2, p. 59-68. <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hbg/metadata/12144>, (参照 2019-02-06).
- 時津啓, 中村暢. SNS 時代におけるコミュニケーションといじめ : 「すれ違い」の必要性和その授業実践. 広島文化学園大学学芸学部紀要, vol. 8, p. 33-45. <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hbg/metadata/12273>, (参照 2019-02-06).
- 富田英典. メディア・コミュニケーションの変容 : Intimate Stranger の時代. 社会学部論集. 1997, vol. 30, p. 49-64, <https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/SO/0030/SO00300R049.pdf>, (参照 2019-01-02).
- 津田朗子, 木村留美子, 水野真希. 小中学生のインターネット使用に関する実態調査 : 依存傾向と生活習慣について. 金沢大学つるま保健学会誌. 2015, vol. 39, no. 1, p. 81-86. https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=16104&file_id=26&file_no=1, (参照 2019-02-06).
- 津田大介. Twitter 社会論 : 新たなリアルタイム・ウェブの潮流. 洋泉社, 2009, 191p.
- 上野千鶴子. “選べる縁・選べない”. 文化の地平線 : 人類学からの挑戦. 井上忠司, 祖田修, 福井勝義編. 世界思想社, 1994, p136-153.
- 内海しよか. 中学生のネットいじめ, いじめられ体験 : 親の統制に対する子どもの認知, および関係性攻撃との関連. 教育心理学研究. 2012, vol. 58, no. 1, p. 12-22. <https://doi.org/10.5926/jjep.58.12>, (参照 2019-01-23).
- Varis, Piia. Digital Ethnography. Tilburg Papers in Culture Studies. 2014, no. 104, p.1-21. https://www.tilburguniversity.edu/upload/c428e18c-935f-4d12-8afb-652e19899a30_TPCS_104_Varis.pdf, (参照 2019-01-10).
- ヤング, キンバリー. インターネット中毒 : まじめな警告です. 小田嶋由美子訳. 毎日新聞社, 1998, 349p.
- 吉井千周, 下田克久, 小原聡司, 中村裕文, 岩熊美奈子. 吹奏楽部を核とした地域貢献活動. 都城工業高等専門学校研究報告. 2011, no. 45, p. 63-69, <https://ci.nii.ac.jp/els/contents110008608813.pdf?id=ART0009730607>, (参照 2018-12-14).

付録

付録1 オンラインエスノグラフィにおけるスクリーンショットでの記録の一部

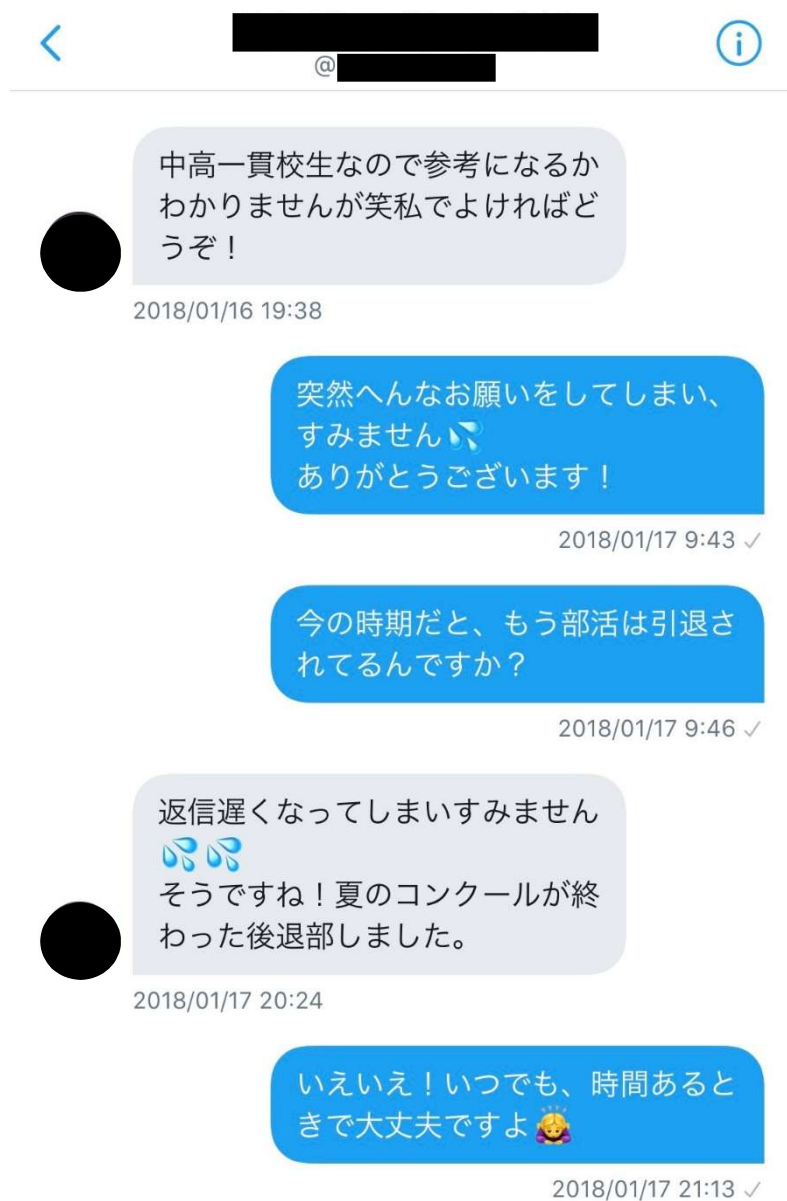


図 5 Twitter の DM を用いたやり取りのスクリーンショット

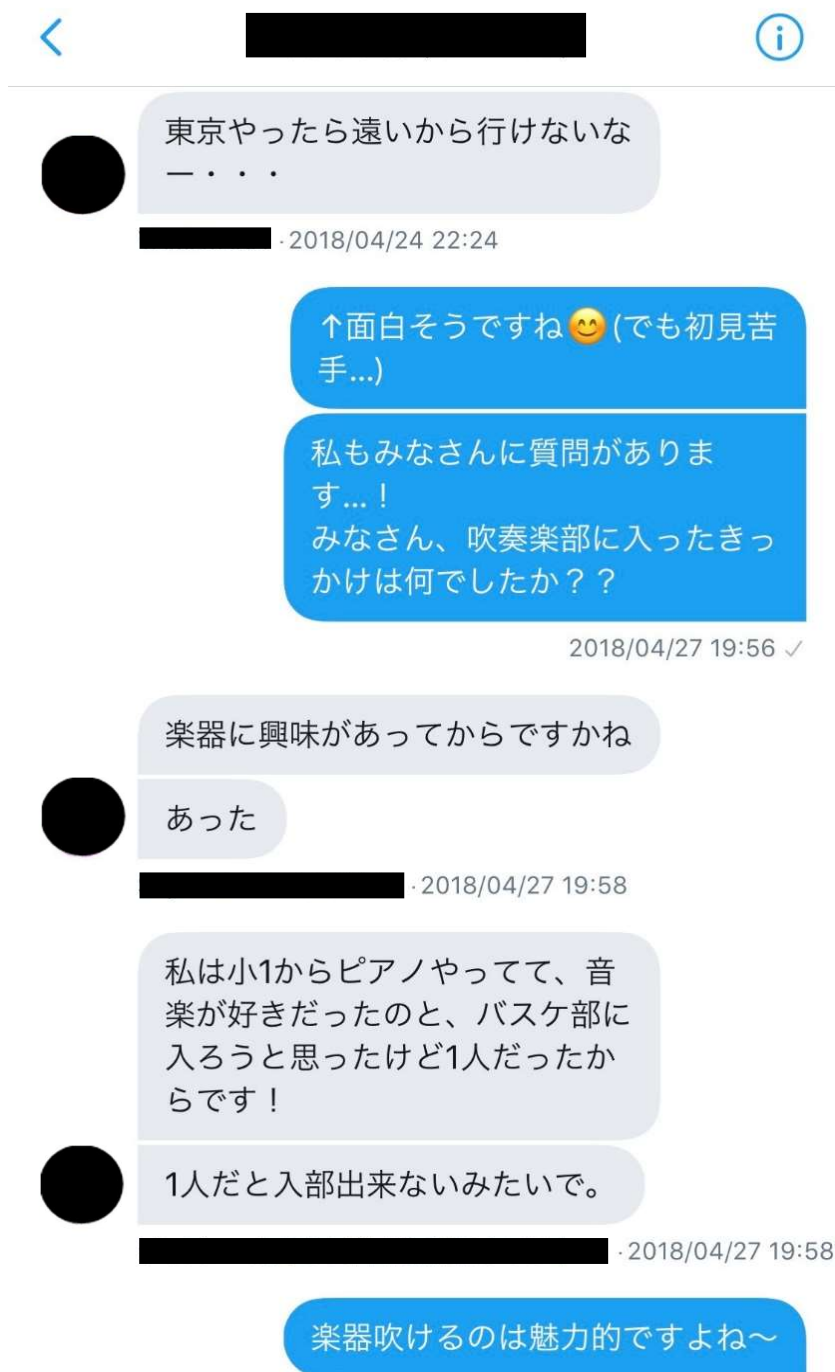


図 6 Twitter の GDM でのやり取りのスクリーンショット

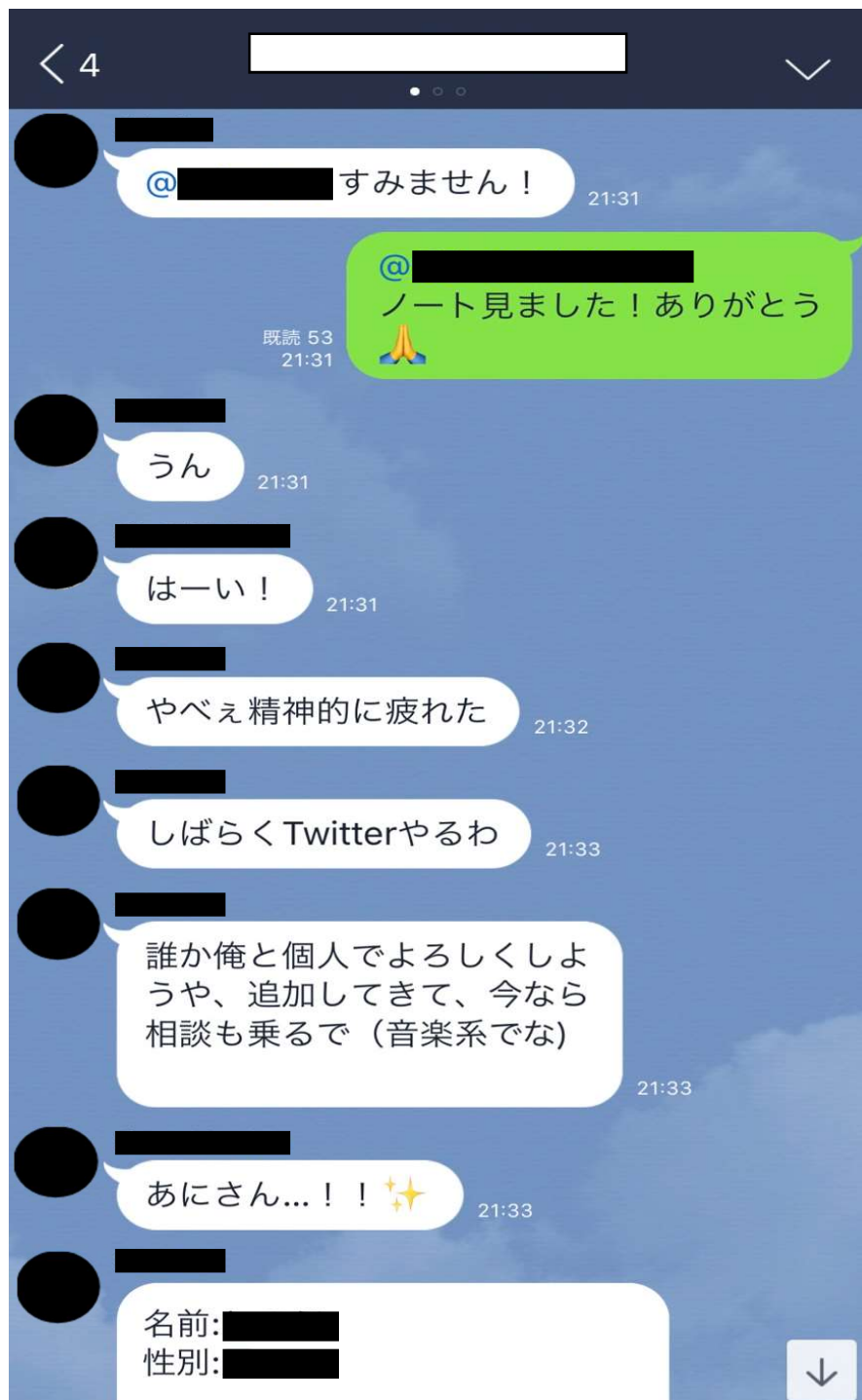


図 7 2018 年 5 月 5 日の A グループでのやり取りのスクリーンショット

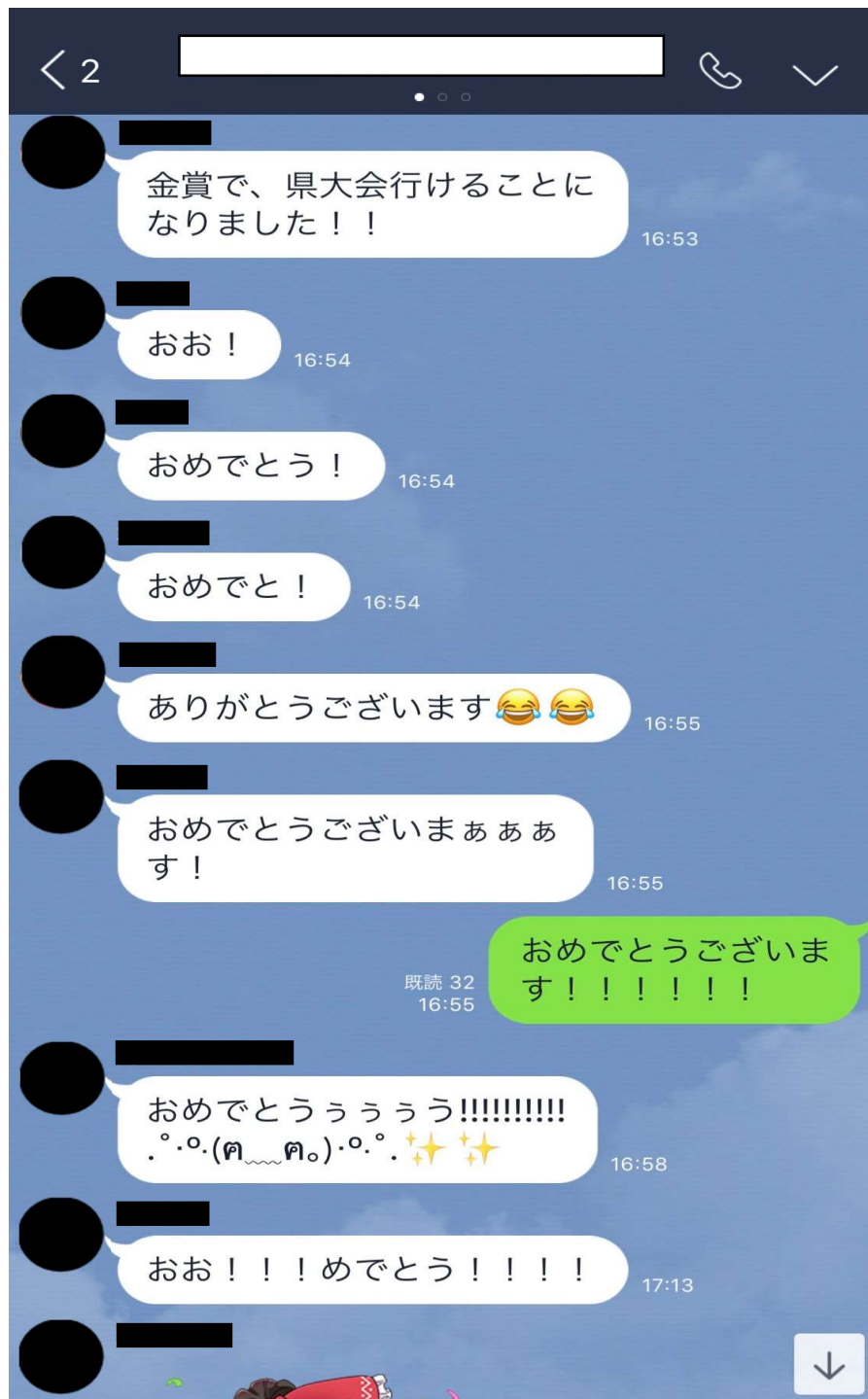


図 8 2018 年 7 月 26 日の B グループでのやり取りのスクリーンショット



図 9 2018 年 7 月 13 日の C グループでのやり取りのスクリーンショット

基本情報

当てはまる()に○を付けてください。

「その他」に○を付けた方は、下線部分に詳細などを、自由にご記入ください。

① 性別

- 女性 ()
- 男性 ()
- 答えたくない ()
- その他 () _____

② 学年

- 1年生 ()
- 2年生 ()
- 3年生 ()
- その他 () _____

③ 音楽経験

- 中学入学前からある () 習っていた楽器など： _____ 経験年数： _____
- 中学入学前にはない ()
- その他 () _____

④ 現在の担当楽器

- フルート ()
- オーボエ ()
- クラリネット ()
- ファゴット ()
- パーカッション ()
- コントラバス ()
- トランペット ()
- トロンボーン ()
- ホルン ()
- ユーフォニウム ()
- チューバ ()
- その他 () _____

パソコン・スマートフォンについての質問

当てはまるものに○を付けてください。

「その他」に○をつけた方は、下線部分に詳細などを、自由にご記入ください。

① パソコンを持っていますか？

- 自分用のパソコンを持っている（ ）
- お母さん・お父さん・兄弟姉妹のパソコンを共同で使っている（ ）
- 自分用のパソコンを持っていない（ ）
- その他（ ）_____

② スマートフォンを持っていますか？

- 自分用のスマートフォンを持っている（ ）
- お母さん・お父さん・兄弟姉妹のスマートフォンを共同で使っている（ ）
- 自分用のスマートフォンを持っていない（ ）
- その他（ ）_____

③ パソコン・スマートフォン以外でインターネットを利用している機器はありますか？

（例：ニンテンドー3DS などなど）自由にご記入ください

ソーシャルメディア・SNS についての質問

当てはまるものに○を付けてください。

「その他」に○をつけた方は、下線部分に詳細などを、自由にご記入ください。

① どのようなソーシャルメディア・SNS を使っていますか？

当てはまるもの全てに○を付けてください

- | | |
|----------------|-------------------|
| ● LINE () | ● YouTube () |
| ● Facebook () | ● Vine () |
| ● Twitter () | ● Instagram () |
| ● mixi () | ● その他 () _____ |
| ● Mobage () | ● ソーシャルメディア・SNS を |
| ● GREE () | 使っていない () |
| ● Google+ () | |

② 最もたくさん使っているソーシャルメディア・SNS をお答えください

ソーシャルメディア・SNS を使っていない場合は「使っていない」とお答えください

③ ソーシャルメディア・SNS 上に、実際に会ったことのない友人・知人がいますか？

- いる ()
- いない ()
- 分からない ()
- その他 () _____

④ ソーシャルメディア・SNS においてアカウントの使い分けをしていますか？

- アカウントを使い分けている ()
- アカウントを使い分けていない ()
- 分からない ()
- その他 () _____
- ソーシャルメディア・SNS を使っていない ()

⑤ ③でアカウントを使い分けていると回答した方だけお答えください

どのソーシャルメディア・SNS で、どのような使い分けをしているか自由にお答えください

⑥ 学校の友人・知人とソーシャルメディア・SNS で連絡を取り合いますか？

当てはまるもの全てに○をつけてください

- 現在のクラスメイトと連絡を取り合う ()
- 吹奏楽部員同士で連絡を取り合う ()
- クラスも部活動も違う仲の良い者同士で連絡を取り合う ()
- ソーシャルメディア・SNS では連絡を取り合わない ()
- その他 () _____

⑦ ソーシャルメディア・SNS で学校生活に関する投稿をしますか？

- する ()
- しない ()
- 分からない ()
- その他 () _____

⑧ ソーシャルメディア・SNS で部活動に関する投稿をしますか？

- する ()
- しない ()
- 分からない ()
- その他 () _____

⑨ ソーシャルメディア・SNS で吹奏楽に関する投稿をしますか？

- する ()
- しない ()
- 分からない ()
- その他 () _____

差し支えなければ、現在お使いの Twitter アカウントを教えてください

Twitter ID : _____

このアンケートに対するご意見

自由にご記入ください

ご協力ありがとうございました。